ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIV－3

1987

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

XIV－3

―坂田郡近江町世継遺跡・長浜市金剛寺遺跡―

1987

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに、昭和61年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を6分冊に分けて取りまとめましたので、ご高覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長　飯田志農夫

例　　言

1．本書は昭和61年度県営ほ場整備事業に伴う坂田郡近江町世継遺跡、長浜市金剛寺遺跡の発掘調査報告書で、昭和61年度に発掘調査し、整理したものである。

2．本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、㈶滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。

3．発掘調査にあたっては、近江町教育委員会、長浜市教育委員会の協力を得た。

4．本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

5．本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部　正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
〃　主任技師	葛野　泰樹
管理係主任主事	山本　徳樹

㈶滋賀県文化財保護協会

理事長	南　光雄
事務局長	中島　良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査三係長	兼康　保明
〃　技師	稲垣　正宏
総務課長	山下　弘
〃　主任主事	立入　裕子
〃　主事	西田　博之

6．本書の編集は、調査担当者兼康保明、稲垣正宏が行った。

7．出土遺物や写真・図面については、滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

Ⅰ．坂田郡近江町世継遺跡

1. はじめに …… 1
2. 位置と環境 …… 1
3. 調査の経過 …… 7
4. 調査の結果 …… 8
5. 遺　物 …… 16
6. まとめ …… 21

Ⅱ．長浜市金剛寺遺跡

1. はじめに …… 31
2. 位置と環境 …… 31
3. 遺　構 …… 37
4. おわりに …… 45

図　版　目　次

図版一　世継遺跡　試掘調査風景（西より）
世継の集落と遺跡全景（東より）
図版二　世継遺跡　筑摩神社並七ケ寺絵図（筑摩神社所蔵）
Ｔ２・小溝
図版三　世継遺跡　畦畔及び土層
遺構検出状況・ピット
図版四　世継遺跡　遺物出土状況
遺物出土状況
図版五　世継遺跡（遺物）
図版六　世継遺跡（遺物）
図版七　世継遺跡（遺物）
図版八　世継遺跡（遺物）　古式土師器
図版九　世継遺跡（遺物）　古式土師器・土師器、古式土師器
図版一〇　世継遺跡（遺物）　土師器
図版一一　世継遺跡（遺物）　須恵器、須恵器・灰釉陶器
図版一二　世継遺跡（遺物）　須恵器
図版一三　世継遺跡（遺物）　須恵器、灰釉陶器
図版一四　世継遺跡（遺物）　陶器・磁器、石製品
図版一五　世継遺跡（遺物）　木製品
図版一六　世継遺跡（遺物実測図・古式土師器）
図版一七　世継遺跡（遺物実測図・土師器）
図版一八　世継遺跡（遺物実測図・須恵器、灰釉陶器）
図版一九　世継遺跡（遺物実測図・須恵器）
図版二〇　金剛寺遺跡　鏡塚全景（南東より）
墳頂部掘下げ状況（北東より）
図版二一　金剛寺遺跡　鏡塚墳頂部土壙掘下げ状況（南西より）
鏡塚断割り断面図
図版二二　金剛寺遺跡　基底部土師質皿出土状況
上段の拡大写真
図版二三　金剛寺遺跡　第１トレンチ（北より）
第２トレンチ中央部（西より）
図版二四　金剛寺遺跡　ＳＥ００１遺物出土状況（南より）
ＳＥ００１遺物取上げ後（南より）
図版二五　金剛寺遺跡　ＳＥ００１遺物出土状況（西より）
ＳＥ００１遺物出土状況（拡大）

図版二六　金剛寺遺跡　第６トレンチ掘削前（東より）
第６トレンチ西部（東より）
図版二七　金剛寺遺跡　第６トレンチ中央部（北より）
第６トレンチ東部自然河川（西より）
図版二八　金剛寺遺跡　第６トレンチ東部自然河川（東より）
第６トレンチ東端
図版二九　金剛寺遺跡　第６トレンチ自然河川土器出土状況
第７トレンチ掘削前
図版三〇　金剛寺遺跡　第７トレンチ自然河川（西より）
第７トレンチ東部（西より）
図版三一　金剛寺遺跡　鏡塚封土出土土器
鏡塚基底部出土土師質皿
図版三二　金剛寺遺跡　ＳＥ００１出土遺物
図版三三　金剛寺遺跡　ＳＥ００１出土遺物（木器）
図版三四　金剛寺遺跡　ＳＥ００１出土遺物（木器）
鏡塚、第６トレンチ出土遺物
図版三五　金剛寺遺跡　第６トレンチＳＤ００１
図版三六　金剛寺遺跡　第６トレンチＳＤ００１、第７トレンチＳＤ００２出土遺物
図版三七　金剛寺遺跡　第７トレンチＳＤ００２出土遺物
図版三八　金剛寺遺跡　第７トレンチＳＤ００２出土遺物
図版三九　金剛寺遺跡　ＳＥ００１出土遺物
図版四〇　金剛寺遺跡　ＳＥ００１、第６トレンチ、第６トレンチＳＤ００１出土遺物
図版四一　金剛寺遺跡　第６トレンチＳＤ００１出土遺物
図版四二　金剛寺遺跡　第６トレンチＳＤ００１、第７トレンチＳＤ００２出土遺物
図版四三　金剛寺遺跡　第７トレンチＳＤ００２出土遺物
図版四四　金剛寺遺跡　第７トレンチＳＤ００２出土遺物
図版四五　金剛寺遺跡　第７トレンチＳＤ００２、鏡塚、撞木塚出土遺物
図版四六　金剛寺遺跡　ＳＥ００１出土遺物

挿　図　目　次

Ⅰ　坂田郡近江町世継遺跡

第１図　調査地位置図 …… 2
第２図　明治25年位置図 …… 3
第３図　試掘トレンチ配置図 …… 4
第４図　トレンチ実測図 …… 9
第５図　土層断面図 …… １１
第６図　第１地点遺構実測図 …… １２
第７図　第２地点遺構実測図 …… １３
第８図　第２地点土層断面詳細図 …… １４
第９図　第２地点遺構実測図 …… １４
第10図　土錘・石製品実測図 …… １９
第11図　瓦実測図 …… １９
第12図　木製品実測図 …… ２０

Ⅱ　長浜市金剛寺遺跡

第１図　周辺遺跡分布図 …… ３２
第２図　遺跡周辺図 …… ３３
第３図　遺跡位置図 …… ３４
第４図　遺構全体図 …… ３６
第５図　土層断面図 …… ３８
第６図　鏡塚墳頂土壙埋土断面 …… ３９
第７図　鏡塚基底部土師器皿出土状況 …… ３９
第８図　遺構全体図（第２トレンチ） …… ４０
第９図　ＳＥ００１遺物実測図 …… ４１
第10図　遺跡位置図 …… ４２
第11図　遺跡全体図（第６トレンチ） …… ４３
第12図　第７トレンチ河川土層断面図 …… ４４

表　目　次

Ⅰ　坂田郡近江町世継遺跡

第１表　試掘調査結果一覧 …… 5
第２表　世継遺跡出土土器観察表 …… ２３

Ⅱ　長浜市金剛寺遺跡

第１表　金剛寺遺跡出土土器観察表 …… ４６

Ⅰ．坂田郡近江町世継遺跡

1．はじめに

本報告は、坂田郡近江町世継の県営ほ場整備事業天の川西部地区世継工区内で、昭和61年度に実施した世継遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。

世継遺跡の存在については、昭和40年度版『滋賀県遺跡目録』に、世継の集落の南東側に世継遺跡、さらに集落東方の水田中に世継寺遺跡があげられており、早くから周知されていた。

世継遺跡は、世継に所在する深光寺に遺跡より採集された石鏃が保管されていることから、弥生時代の遺物散布地として理解されていた。しかしその後、集落の東側から隣接する水田一帯にかけて、土師器や須恵器など土器片の散布が認められ、かなり広範囲にわたる、しかも時代幅のある散布地であることが判った。

世継寺遺跡は、水田中に「興福寺」の小字名が残っていることから、「興福寺官務帳疏」にみられる寺院跡（世継寺）との関連が考えられていた。それとは別に、世継より古瓦が出土しているとの話が一部の研究者の間にあったが、瓦の所在が不明確で真偽のほどは定かでなかった。しかし字名に残る興福寺と関係するかどうか、関心のもたれるところであった。

昭和60年度に、世継と宇賀野を結ぶ県道の北側でほ場整備が実施された際、近江町教育委員会によって縄文時代から歴史時代にかけての多数の土器片が採集されている。ただ、遺物は工事中の発見であり、遺構の存在や遺跡の性格についてまでは詳細に把握することはできなかったという。しかし、世継遺跡の範囲が、当初予想していたよりも北へ伸びることが明らかになった。また、注目すべき遺物として、縄文時代晩期の滋賀里Ⅲ式の土器片が１点混っていた[①]。米原町入江内湖に形成される遺跡と同様に、当地においても内湖縁辺部の微高地に、縄文時代の遺跡の立地する可能性が強くなってきた。

以上の問題点を整理し、今回調査を実施するにあたり次の諸点に留意した。

（１） 遺跡の広がりと遺物包含層の状況、遺構の有無。

（２） 遺跡の中心となる年代。

（３） 瓦の有無とその年代。

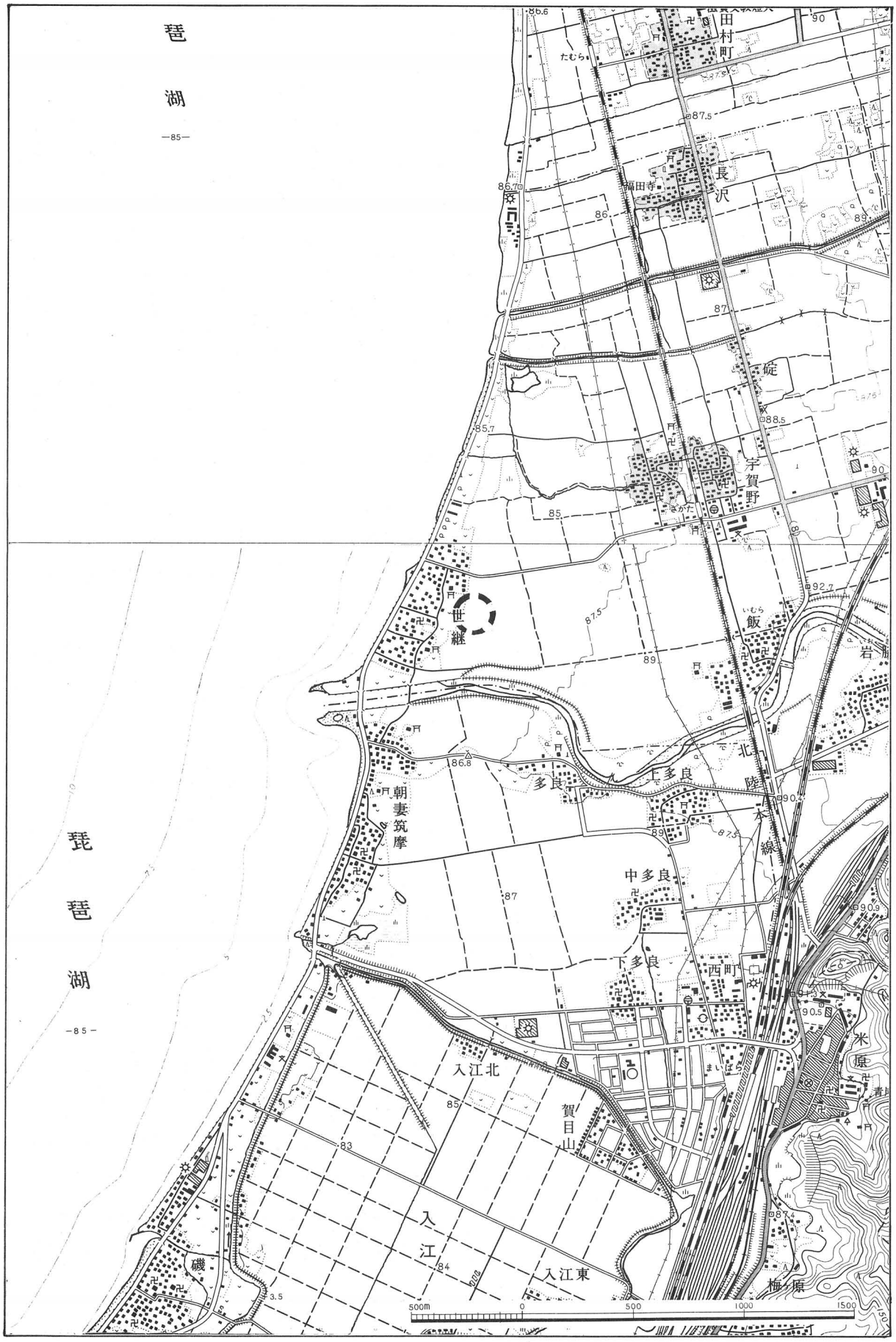
（４） 世継寺の所在。

（兼康保明）

2．位置と環境

世継は近江町の西端に位置し、琵琶湖に面している。湖岸には浜堤が形成され、その上に集落が営まれている。調査の対象地は、この集落の東側一帯に広がる水田地帯である。この地は、町内を東西に流れる天野川が形成する沖積低地である。浜堤と水田との比高差は約1.3ｍを測り、比高差が０㎝となる地点は、東へ約750ｍと緩やかな傾斜となっている。集落の南側には、浜堤を断ち切って天野川が流れ、さらにその南にはかつての入江内湖がみられる。また、北側には浜堤と沖積低地が続き、小さいながら沼地が残っている。このような地形をみると、今回の調査地はすべて水田化されてはいるけれど、かつては浜堤のすぐ東側に後背湿地帯が、あるいは広く内湖がみられたものと思われる。

世継の歴史を考えるうえで見過せないのは、その地名の由来である。『坂田郡志』は、「古く四大樹ありしより四ツ木の名を得た」との伝承をのせている。それに対して林屋辰三郎氏は、世継の地名をそのままに解し、世継


琵
湖
-85-
琵
琶
湖
-85-
田村町
たむら
長沢
福田寺
碇
宇賀野
さがた
世継
飯
いむら
岩
北陸本線
上多良
多良
朝妻筑摩
中多良
下多良
西町
入江北
賀目山
入江
入江東
磯
米原
梅原
500m
0
500
1000
1500

第１図　調査地位置図

第２図　明治25年位置図

第３図　試掘トレンチ配置図

の物語を伝える集団の居住するところと考えている[②]。つまり世継とは、世々のことを継々に語ることであり、その語られた物語とは、古代より坂田郡に勢力を張っていた息長氏の伝承ではないかとのべられている。息長氏は天武八姓の主位である真人姓をうけ、奈良時代にもひき続き郡の大領をつとめ、平安時代には正暦のはじめごろより長保2年にかけて（990～1000）、現在米原町に所在する筑摩御厨の長を任じられるなど、当地域との関係はけっして薄いものではない。

こうした歴史的背景からみれば、旧朝妻郷内に属する世継は、古代においては天野川をはさんで朝妻湊と対をなす古津としてとらえる必要があろう。（兼康保明）

3．調査の経過

（1） 試掘調査

昭和61年度のほ場整備では、田面の高さについては工事後も特に大きな変化がないため、直接遺跡に影響を及ぼすと考えられるのは排水路のみであった。調査の対象となった排水路は、ほぼ南北方向に入る第12号小排水路と、その途中から東に向ってT字形に伸びる第13号小排水路の2本である。

試掘調査は、県教育委員会文化財保護課の指導により、排水路に約20mの間隔で、約3m×3mの試掘坑を19カ所穿ち、遺構および遺物包含層の有無を確認した。調査は、昭和61年4月27日から5月7日まで実施し、第1表にみるような調査結果を得た。

トレンチ	排水路番号	遺物包含層	遺構	備考
T1	第13	無	無	
T2	〃	〃	有	幅40cm深さ20cmの小溝（図版2）
T3	〃	〃	無	
T4	〃	〃	〃	
T5	〃	〃	〃	
T6	〃	〃	〃	
T7	〃	〃	〃	土器小片若干
T8	〃	〃	〃	
T9	〃	〃	〃	
T10	〃	〃	〃	
T11	〃	〃	〃	
T12	第12	〃	〃	中世土器小片
T13	〃	〃	〃	灰釉底部片1 少量含
T14	〃	〃	〃	
T15	〃	〃	〃	
T16	〃	有	〃	包含層未完掘
T17	〃	〃	〃	〃
T18	〃	〃	〃	〃
T19	〃	〃	〃	〃

第1表　試掘調査結果一覧

（2） 本調査

試掘調査の結果に基づいて、本調査では、遺物包含層が確認されたT16～T19の4試掘坑を結ぶ第12号小排水路の北半と、一部第13号小排水路にもトレンチを拡張した調査を行った。調査は、昭和61年5月16日から6月10日までの間、まず第12号小排水路の北側より調査を開始し、遺物包含層の広がりの南限を確認した。続いて、第13号小排水路の拡張トレンチで遺物包含層の東限を確認して、調査を終了した。調査の所見については、次節でのべたい。（兼康保明）

4．調査の結果

（1） 地区割り

調査にあたっては、現地に４ｍで遺物取上げ用の小地区割を行ない、全長約80ｍにわたるトレンチを穿った。ここでは、トレンチを便宜的に５地点に区切って報告する。第１～４地点は第12号小排水路に、第５地点が第13号小排水路にあたる。

なお調査トレンチは、地表では水路幅の３ｍとし、調査最終面では幅約1.5ｍを基準とした。

第１地点

第12号小排水路の北端にあたる。新川の土手より南4.45ｍの地点（ポイントＡ）を調査の起点とし、約17ｍのトレンチを設定した。土層断面は東壁で２カ所、約８ｍにわたり観察・実測を行った。現地調査の地区割りはＡ～Ｃ地区である。

第２地点

本地点は、第１地点の南端より約10ｍ離れてトレンチを設定した。トレンチを続けて掘らなかったのは、その間に農業用揚水の配管が埋設されているためである。調査トレンチの全長は約18ｍで、ポイントＢ（ポイントＡより26.6ｍ南に設置）を起点とする。土層断面の観察と実測は、湧水と壁面の崩壊のため最初の７ｍを西壁で、後の11ｍを東壁で行った。現地調査の地区割りはＤ～Ｇ地区である。

第３地点

第２地点の調査トレンチに続けて、約16ｍのトレンチを設定する。土層断面の観察と実測は、引き続き東壁で行った。現地調査の地区割りはＪ・Ｋ地区である。

第４地点

第３地点の南端より約６ｍ離れてトレンチを設定する。土層断面の観察と実測は、西壁と北壁で行った。現地調査の地区割りはＪ・Ｋ地区である。

第５地点

本地点は、第３・４地点間の未調査分より、東に向けて拡張したトレンチである。この拡張したトレンチは、第13号小排水路の位置に合わせたもので、調査の基準を第12号小排水路と交わるセンター杭（ポイントＢより45.5ｍ南に設置）とした。このセンター杭を中心にして、幅３ｍ、長さ約9.5ｍのトレンチを設定した。土層断面は北壁で約６ｍ実測した。現地調査の地区割りは、拡張１・２地区である。

（2） 層　位

現地調査は小地区割りでトレンチを設定し数地区終了するごとに埋戻しを行い、各土層断面図を合成して約70ｍに及ぶ土層断面図を作成した。

第１層

耕土と床土で、およそ30～40㎝の厚さを測る。土色は、耕土が十分なほどの粘性を保った暗褐色、床土がやや鉄分を沈澱させた褐色である。そして第２地点より南の床土は、さらに多くの鉄分やマンガン粒を沈澱させ、赤茶褐色を呈してくる。また、その堆積面に凹凸が認められる。

第2層

本層の厚さは、20～40cmを測る。土質は粘質土あるいはシルトで、土色は淡青灰色または淡赤褐色である。特に土色では酸化土層と還元土層という大きな差が認められ、この差は第1層でみた床土の変化にほぼ対応している。後述するが、第2地点にみられる畔道がその境界となっているようである。しかも淡赤褐色シルト層のみられる範囲には、所々でなくなるもののさらに多くの鉄分等を沈澱させた赤褐色粘質シルト層が確認できた。この層は、おそらく現在の水田に先行する水田の旧床土と考えられ、その上層が旧耕土になるものと思われる。なお、第3地点より南には、畝跡とも考えられるような小さい凹凸が旧耕土面にて認められた。

第3層

本層は、20～60cmと場所によってかなり層の厚さに幅がある。しかし、大方は第3地点までが約30cmであり、第4地点より南では約50cmとしだいに厚くなっている。土質はシルト質砂～粘質土で、土色は暗青灰色～暗灰色を呈している。本層には、若干の遺物が包含されている。

第4層

本層は遺物包含層で、層厚は10～60cmと場所によってかなり幅がある。土質には粘土～礫までみられ、土色にもかなりの違いが認められ、しかも何層にも重なり堆積している。しかし大きくは、第1地点にみられるような砂や礫からなる包含層、第3地点をはじめとしてみられる腐植土をかなり含んだ粘質シルトからなる包含層、さらにそれらの混じった再堆積層とになる。また、本層を分層した中には、落ち込み状に堆積する層が確認された。

（落ち込み1）

第1地点～第2地点北部にかけて確認された、落ち込み状の包含層である。落ち込みの幅は約29m、深さは約0.5mを測る。土質は、先に述べたように砂と礫とによるもので、落ち込みの底より順に、褐色礫、黄褐色砂礫、暗灰色砂と3層に分層できる。また、それぞれの層は、大きくオーバーフローして堆積している。このほかにも、第1地点北部で同様な包含層が認められた。これは、北に広がって落ち込んで行く砂礫層である。層は何層にも砂と礫が重なりあっており、河川などによる2次的な堆積によるものと思われる。出土した遺物の中には、ひどく摩滅した土器片や、時期的にみてかなり隔たりのある土器片が混在していた。

（落ち込み2）

第2地点南端～第4地点北部にかけて確認された。幅約32.2m、深さ約0.5mを測る。埋土は3層で、上層が暗黒褐色砂、中層が青緑色と暗黒色を混在させたシルト質砂、下層が腐食しきっていない木の枝や葉などを多量に含んだ茶褐色の粘質シルトである。本層では、特に下層から多量の遺物が出土している。

第5層

本層は、遺物包含層と地山の間で確認された土層を第5層として把握した。この層には、土質、土色に著しい違いが認められるものの、どの層も層の厚さが極端に薄いか、あるいは数地区にしか存在しないため1層としてまとめた。ただ、遺物を含む層と含まない層とがあるが、はっきりと区分できるほどの層ではない。

（灰色砂礫）　第1地点と第2地点北半に認められる。層厚は20cm以下である。本層は上位に砂分が、下位に礫分の比率が高くなっている。遺物は出土しなかった。

（青灰色砂礫）　第1～第3地点にかけて部分的に認められる。本層より遺物は出土しなかったが、次の青緑色砂に近似する点からみて、調査地外において遺物の含まれる可能性は高い。

（青緑色砂礫）　第3地点中央部で確認された。本層の厚さは10cmに満たない。遺物はごく少量であるが出土している。

（暗灰褐色礫）　第３地点中央部、青緑色砂礫の下で確認された。層の厚さは５㎝以下である。巻貝の腐った痕跡と考えられる黄灰色の土粒が混っている。また、本層はひじょに硬く締っていた。遺物は出土しなかった。

（青灰色～暗褐色粘土）　第４地点南半に認められる。層厚は10㎝以下である。遺物は西壁断面で土器数片の出土が確認された。

第６層

青灰色の粘土層で、地山と判断した。地山の状況を確認するため、第１地点で約60㎝ほどの深さまで掘下げた。その結果、上位に認められた３～４㎝大の黄褐色シルトブロックはみられなくなり、下位になるほどより湖成堆積的な状況であった。ただし、この状況は調査地点が南に向かうほどに粘土層から砂質土層となり、褐色のシルトブロックがかなり多く混ってくる。また、レベルも南にだんだん高くなっている。

（３）　調査結果

第１地点

本地点での調査は、特に層位の確認を重視しながら、遺物の包含される層の特定、ならびに遺構面の存在の有無にも注意して進めた。その結果、自然堆積ではあるが、落ち込み状になる遺物包含層と、幾つかのピットよりなる遺構を検出した。

まず、層位についてはすでに前項でまとめたので、ここでは遺物との関係を中心にみて行きたい。

第１層・第２層から遺物の出土はない。

第３層からは、ごく少量ではあるが遺物が出土した。出土した遺物は、灰釉陶器、須恵器が各１点と、土師器とみられる小破片が数点である。特に土師器については、摩滅が著しかった。

第４層では、落ち込み１を検出し、それに伴い多くの遺物が出土した。古式土師器、土師器、須恵器が混在した状態で出土したが、摩滅の著しいものも多く認められた。落ち込み１は砂や礫で構成されており、遺物の状態や時期差のあるものが混在するなど、二次的な自然堆積によるものであることが確認された。

第５層の灰色砂礫、青灰色砂礫ともに遺物の出土はなかった。

第６層も第５層と同様に無遺物層である。

次に遺構であるが、落ち込み１のほかに、ピットを２カ所で検出しただけである。共に検出面は、暗青灰色砂を取り除き、青灰色砂を確認した時点である。両ピットとも地山の青灰色粘土まで掘り込んでいる。埋土は第４層で、落ち込み１の上層とした暗灰色砂である。

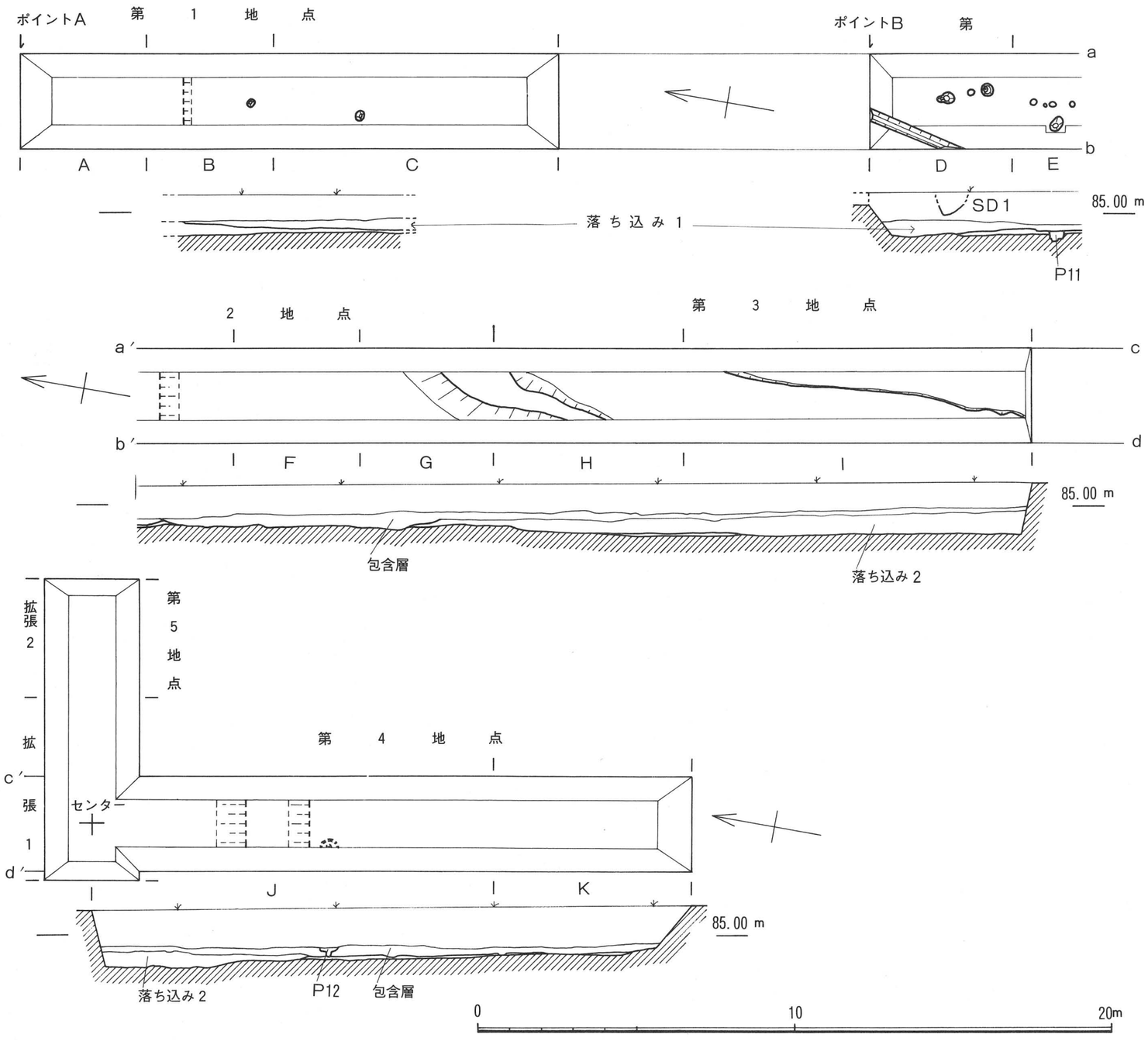
（ピット１）　径30㎝の円形を呈し、ピット内のやや北よりに径12㎝の柱穴（？）をもつもの。遺物なし。

（ピット２）　約30×35㎝を測るやや楕円形を呈するピットで、ピット内の南端に若干斜めに食い込んだ約15×25㎝の柱穴（？）をもつもの。遺物は、外面に粗いクシメを施したＳ字状口縁台付甕の小片が出土した。

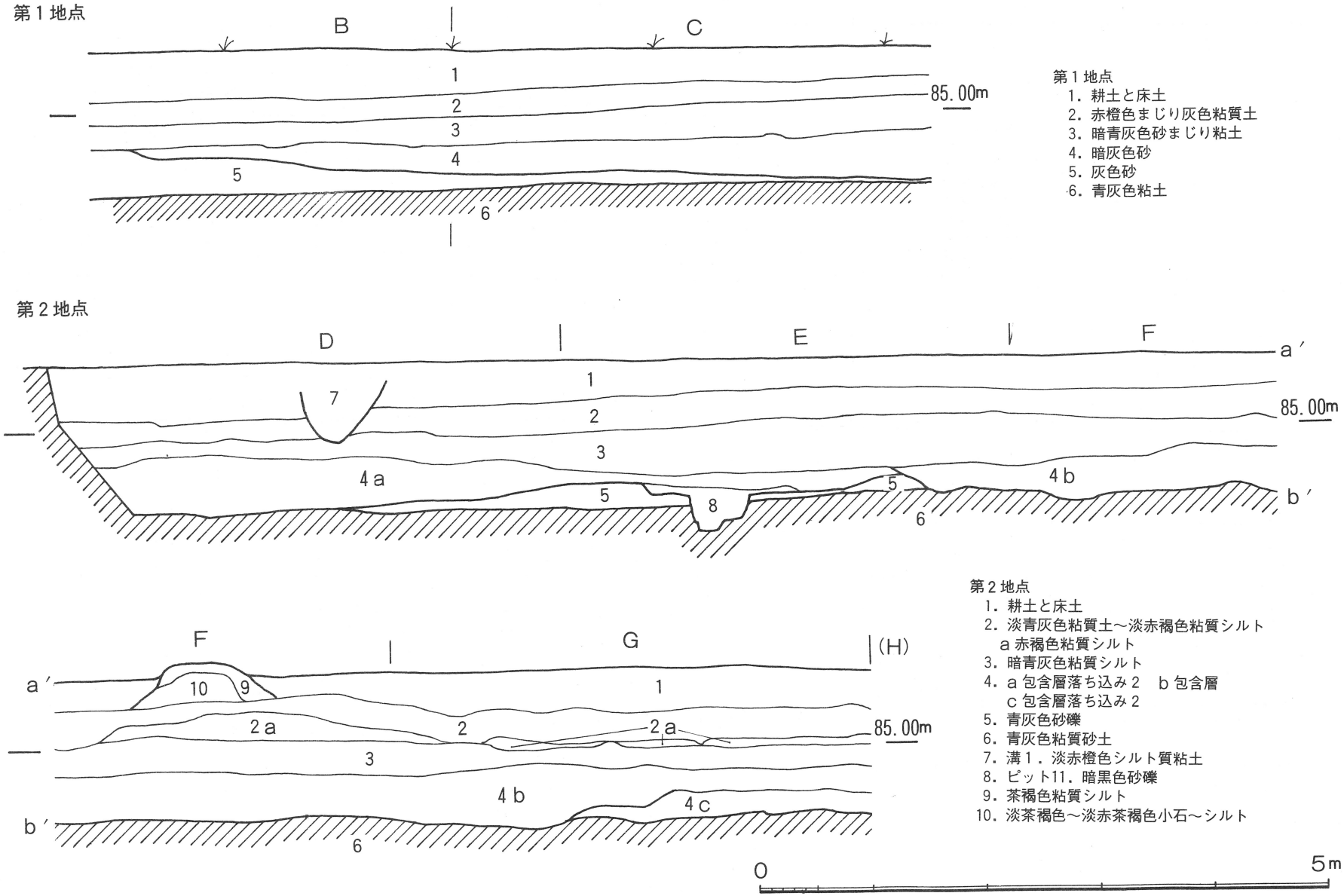
両ピットは、柱穴間隔約3.6ｍを測り、規格も似ており埋土も同じである。しかし、ピットの底のレベルは20㎝もの差があるうえ、続くピット列も検出できなかった。このことから、両ピットを掘立柱建物の柱穴と考えるのは困難である。

第２地点

第１地点のトレンチとは若干離れているため、調査は第１地点の層位分層の検討と、遺構の検出に注意を払った。その結果、トレンチの北端部分では第１地点の層位と同様であり、南側部分では遺物包含層などに大きな変化を認めた。また、遺構ではピット群を検出した。

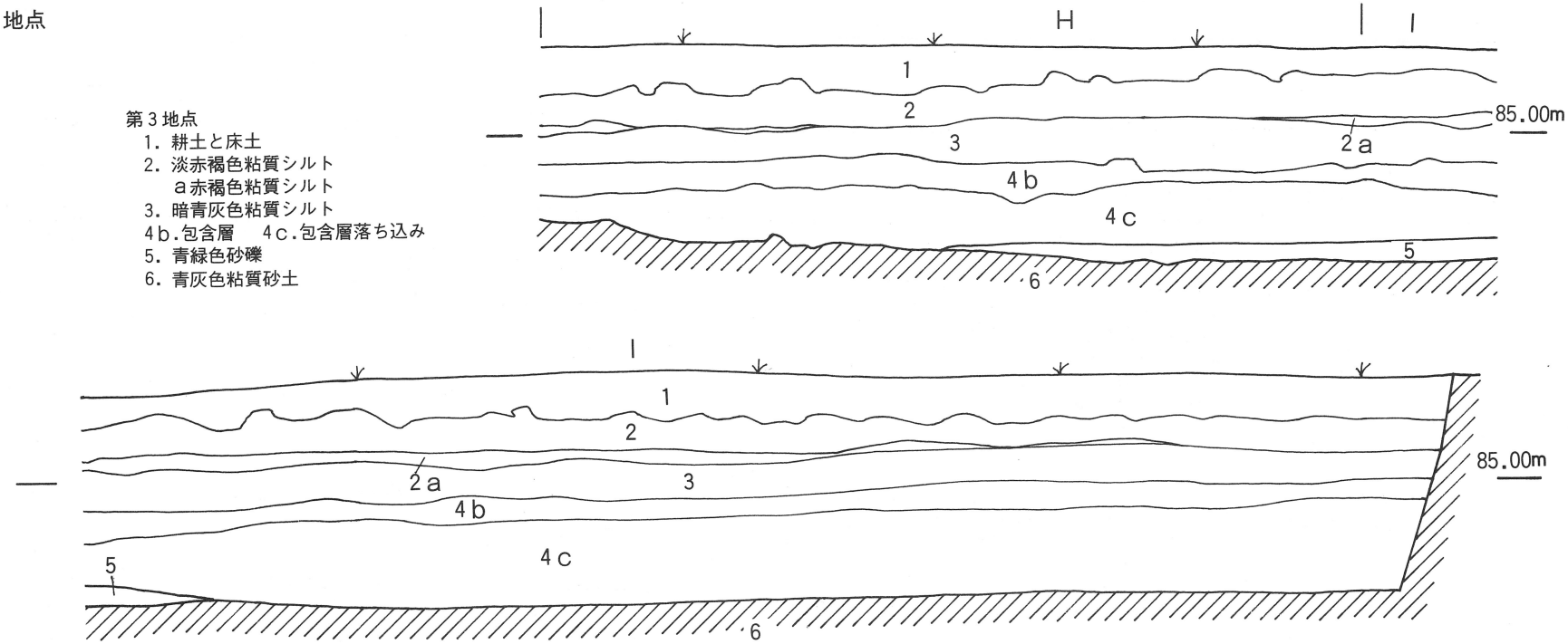

ポイントA
第 1 地 点
ポイントB
第
a
b
A
B
C
D
E
落ち込み 1
SD 1
85.00 m
P11
2 地 点
第 3 地 点
a′
c
b′
d
F
G
H
85.00 m
包含層
落ち込み 2
拡張 2
第 5 地点
拡張 1
c′
d′
センター
第 4 地 点
J
K
85.00 m
落ち込み 2
P12
包含層
0
10
20m

第 4 図　トレンチ実測図


第１地点
B
C
1
2
3
4
5
6
85.00m
第１地点
1．耕土と床土
2．赤橙色まじり灰色粘質土
3．暗青灰色砂まじり粘土
4．暗灰色砂
5．灰色砂
6．青灰色粘土
第２地点
D
E
F
a′
b′
7
1
2
3
4a
4b
5
8
6
85.00m
F
G
(H)
a′
b′
10
9
1
2a
2
2a
3
4b
4c
6
85.00m
第２地点
1．耕土と床土
2．淡青灰色粘質土～淡赤褐色粘質シルト
a 赤褐色粘質シルト
3．暗青灰色粘質シルト
4．a 包含層落ち込み２　b 包含層
c 包含層落ち込み２
5．青灰色砂礫
6．青灰色粘質砂土
7．溝１．淡赤橙色シルト質粘土
8．ピット11．暗黒色砂礫
9．茶褐色粘質シルト
10．淡茶褐色～淡赤茶褐色小石～シルト
0
5m

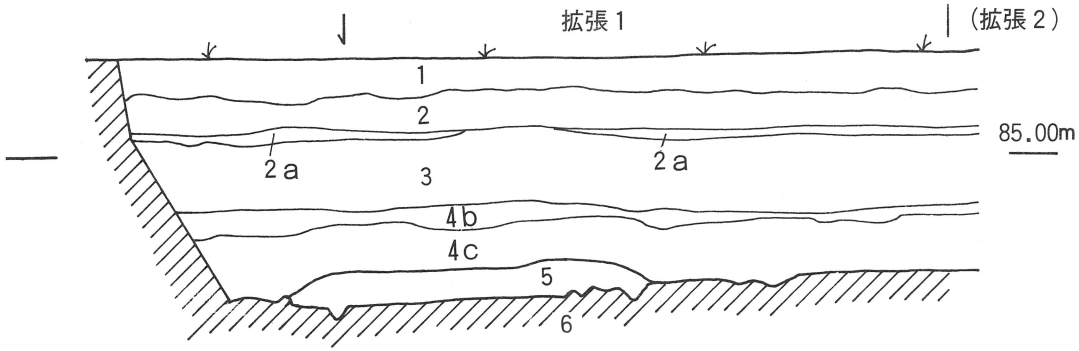
第５図　土層断面図

第３地点



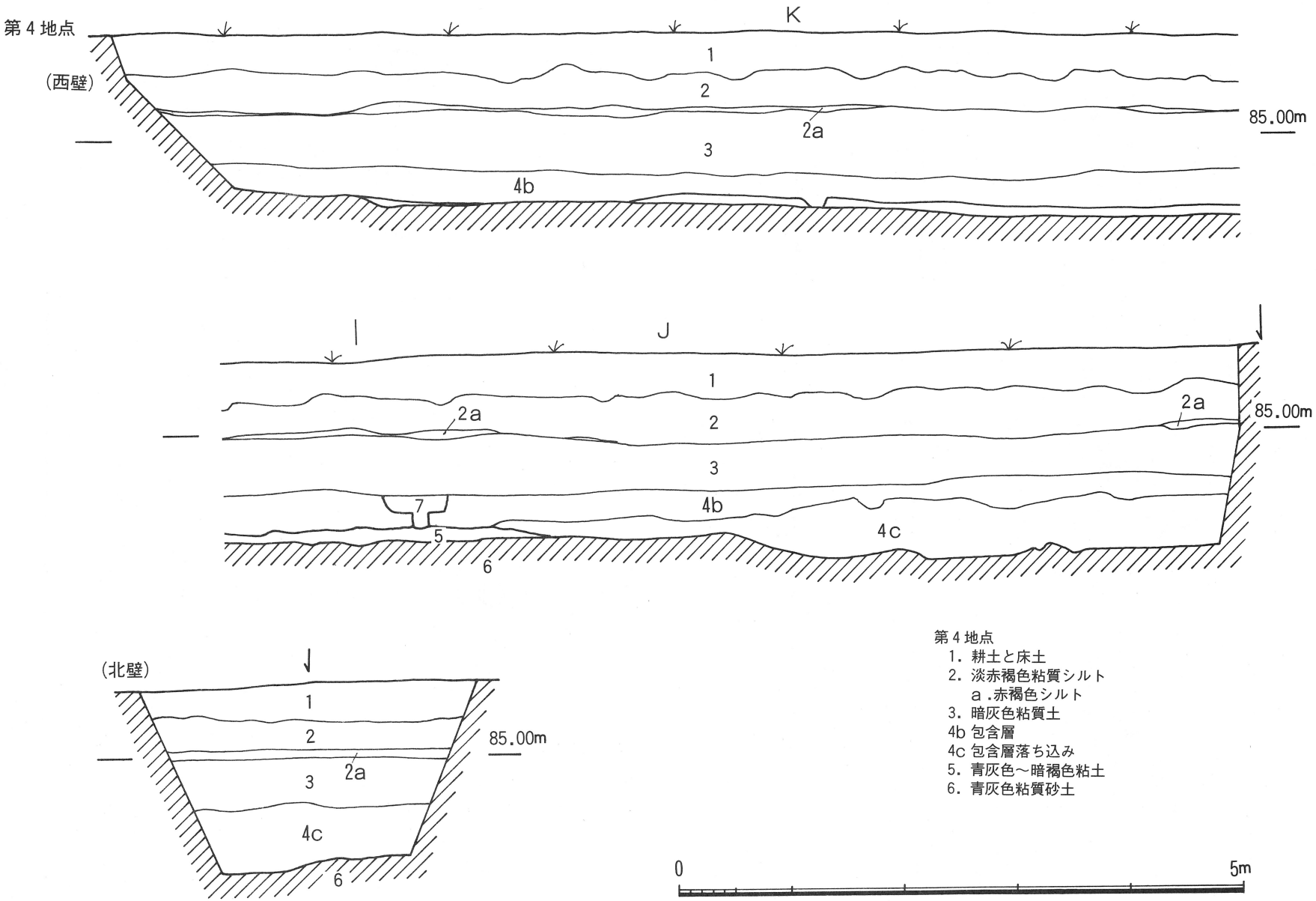
第３地点
1. 耕土と床土
2. 淡赤褐色粘質シルト
　a赤褐色粘質シルト
3. 暗青灰色粘質シルト
4b.包含層　4c.包含層落ち込み
5. 青緑色砂礫
6. 青灰色粘質砂土

第５地点

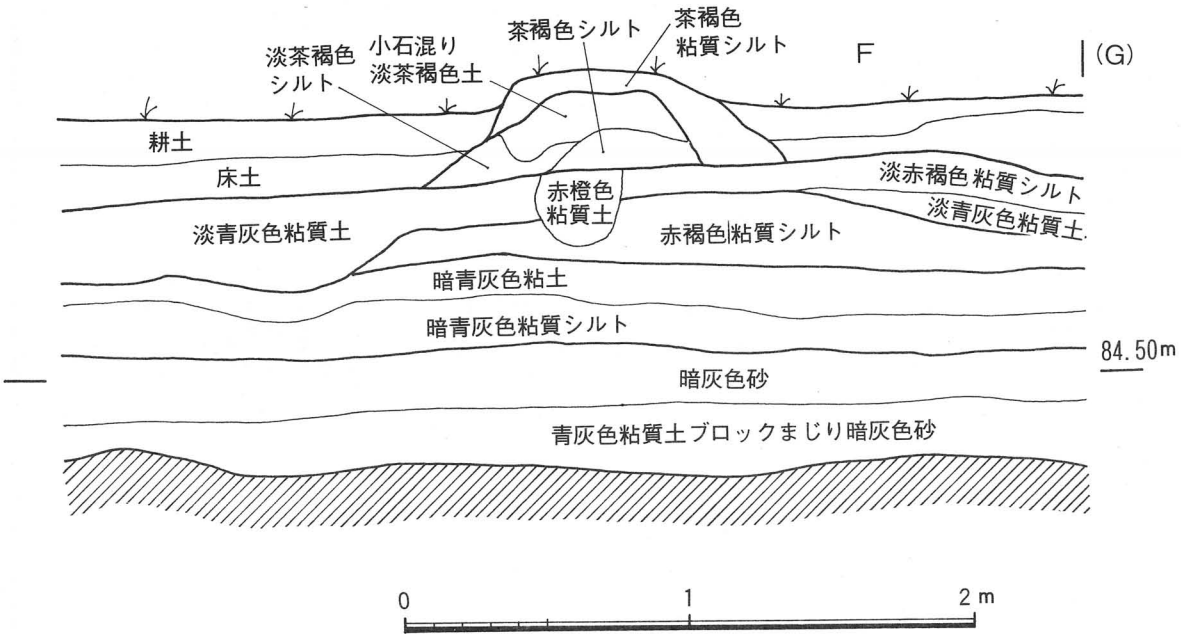


第５地点
1. 耕土と床土
2. 淡赤褐色粘質シルト
　a 赤灰褐色シルト
3. 暗青灰色粘質シルト
4b. 包含層
4c. 包含層落ち込み
5. 黄緑色砂礫
6. 青灰色粘質砂土

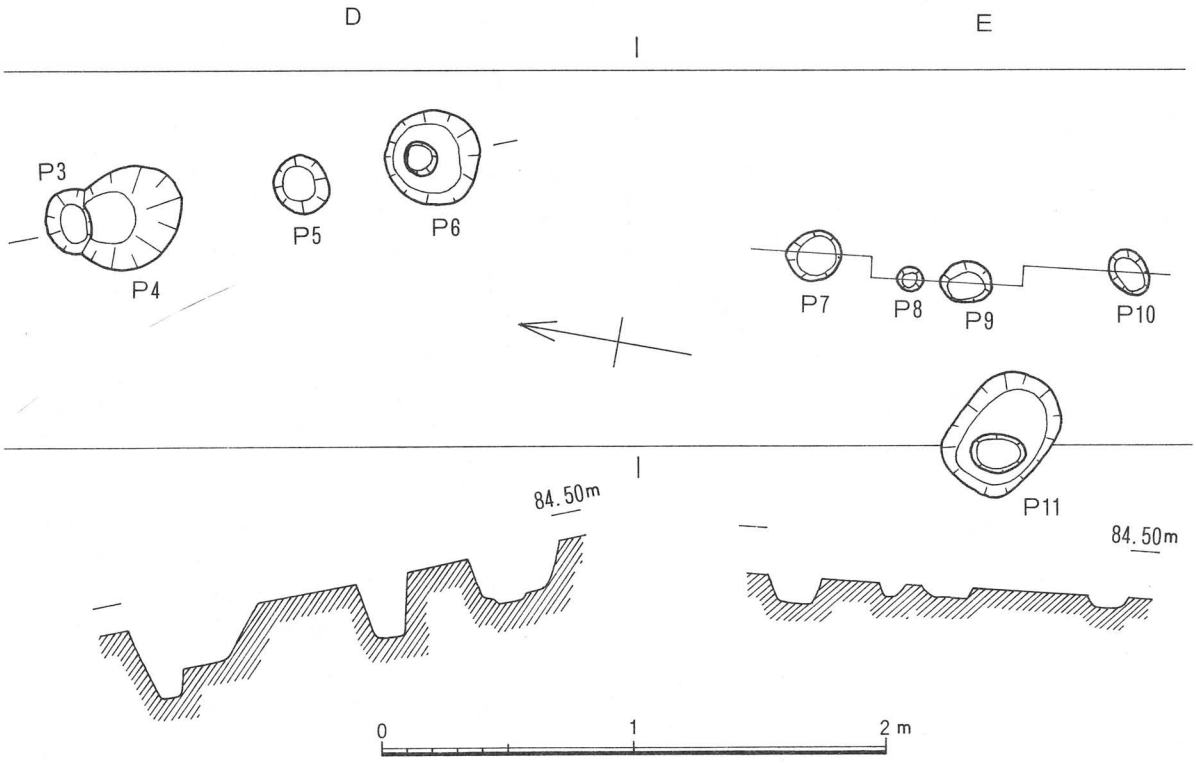
第６図　第１地点遺構実測図



第7図　第2地点遺構実測図



第8図　第2地点土層断面詳細図



第9図　第2地点遺構実測図

遺物について第１地点と同様、ここでも層位との関係をみてみよう。まず、西壁で観察を行った北側の７ｍあたりまでが、第１地点と同じ層位になる。そして、それより南では、第３層、第４層に大きな違いが認められる。

第１層は、トレンチの北半で、耕土がすでに削平されている。遺物の出土はない。

第２層は、青灰色系の還元土層から、赤褐色系の酸化土層へと変る。ここでも遺物の出土はなかった。

第３層からは遺物が出土したが、その出土量はさほど多くない。

第４層の遺物包含層は、トレンチの北端で落み込み１を７ｍ、南側で落ち込み２を３ｍにわたり検出した。なお、落ち込み２からは多量の遺物が出土し、上層の包含層（暗灰色砂）も同様であった。

第５層は灰色砂礫・青灰色砂礫で、所々確認されない部分もある。おそらく第４層に削られ、その埋土に混じったものと思われる。

第６層は南に向かってだんだんと粘土質から砂質へと変化していく。

遺構は、トレンチ北側部分でピット群を検出した。いずれも杭跡と推定される。ピット内の埋土には土色差が認められるが、土性はすべて砂礫であった。この他に、比較的時期の新しい溝（ＳＤ１）を１条検出した。この溝は、床土より掘り込まれた素掘りの溝で、遺物の出土はなかった。溝の方向は、現在の畔の方向と重なっていない。

本地点では、現在の畔道を調査トレンチが断ち割っているため、詳細にその土層断面の観察を行った。それによると、調査地は低湿地であるため、畔道が沈むことのないよう５㎝ほどの小石を畔の中ほどに敷き、あるいは杭を打ち込んだ可能性がある。この畔道は、第２層上面より土や石などを積んで作っており、現在の水田に伴うものである。なお、第２層とした赤褐色粘質シルトは、他の地点の同層の厚さと比べてかなり層厚が増している。おそらく、旧の畔道あるいは畔があったものと考えられる。また、旧床土とした赤褐色粘質シルトは、この高まりを境として南にのみ認められている。

第３地点

本地点では、ピットなどの遺構は検出されなかった。しかし、遺物包含層の落ち込みを面的にとらえて、ほぼその西端を検出した。また、その落み込み面では、多くの遺物の散布が認められた。

第１層・第２層から遺物は出土はない。第２層の旧耕土には、多少の凹凸が認められた。凹凸は、あるいは畝の痕跡ではないかと考えられる。また、旧床土でもより多くの鉄分が沈澱し、かなり固くなる。

第３層は、第２地点と相違はない。

第４層は、大きく上層と下層に分けられ、その下層が落ち込み２としてとらえられる。落ち込み２は第２地点の南端で検出され、さらに第４地点でも確認されている。落ち込みの埋土は３層に分層され、上層が暗黒褐色砂、中層が青緑色と暗黒色の混じったシルト質砂、下層が茶褐色粘質シルトである。この３層ともに遺物を多量に包含しているが、層位的には堆積せず混在した状態である。ただ傾向としては、中・下層に古式土師器が多く認められた。

第５層には、厚さ10㎝以下の濃緑色砂礫（上層）と、厚さ５㎝ほどの暗灰褐色礫（下層）がトレンチ北半で確認された。暗灰褐色礫層はひじょうに固くしまっている。また、巻貝の腐った痕跡と考えられる黄灰色の土粒が果粒状斑点となって含まれている。

第４地点

本地点では、第３地点より続く落ち込み２をトレンチ北端から約７ｍ検出し[illegible]。また、それ以南では、大きく２層に分けた遺物包含層の上層だけが認められる。遺構については、西壁断面でピットを検出した。

第１層・第２層ともに第３地点と状況に相違はなく、遺物も出土していない。また、旧耕土上面でみられる畝跡の凹凸は、北壁ではほとんど確認されなかった。おそらく、かつて耕されていた畑の畝は、南北方向からかなりずれていたものと思われ、第３地点で発見されたＳＤ１の方向に沿うのではないかと推定される。

第３層も同様で、遺物もほとんど出土せず、わずかに出土する遺物は下層出土の遺物より時期の新しい中世のものである。

第４層は、上層が調査区域外にまで続いている。下層は南に向かってトレンチの北半にて終り、西に向かって落ち込んでいる。

第５層には、暗青褐色粘土層がトレンチ中央部に認められた。

本地点では、遺物包含層のうち落ち込み２がトレンチ中ほどで終っている。また、遺物包含層の上層にあたる層が調査区域外にまで続いて行くが、ここでは遺物は出土しなかった。これらのことから判断して、遺物包含層の限界と理解した。そのため、トレンチをさらに南に向けて延長する必要性もないため、調査を終了した。

第５地点

本地点は、遺物包含層の東端を確かめるべく拡張したトレンチである。試掘調査の結果によれば、Ｔ11では遺物包含層は検出されて、その中間に東端が存在することは容易に推定できた。調査は東に向かって約9.5ｍトレンチを伸したところで終了した。遺物包含層の堆積は、東に行くにしたがってしだいに薄くなり消滅した。なお、遺構は検出されなかった。

第１層～第３層は、他地点と相違はない。旧耕土の凹凸についても、第４地点の北壁同様ほとんど確認できなかった。

第４層のうち、落ち込み２は東に向かって緩やかに上っている。また、埋土も色調がかなり薄くなり、特に下層の茶褐色粘質シルトには多量に含まれていた樹木の枝や葉がほとんどみられなくなった。

第５層では、黄褐色砂礫が検出されている。層の厚さは約20㎝あり、貝殻が多く含まれていたほか、遺物は砥石などが出土している。

第６層は、東に向かってなだらかに上がっている。　（前角和夫）

5．遺　物

（1） 土　器

出土遺物のうち、古墳時代～平安時代前期の土器は、同一遺物包含層（第４層）中より混在した状態で出土している。ただし、時期的には混在しつつも、古式土師器は第１地点を中心に調査地の北部にまとまりがみられるなど、多少出土状況に差が認められないでもない。ここでは、出土地点での比較や、各土器の詳細は遺物観察表にゆずり、同一遺物包含層中の土器を各々の特徴等から４期に分類③し、各時期の概要をのべたい。

遺物包含層より上層に含まれる遺物は、量的にも少なく、時期も平安時代から室町時代におよぶ。これらについては、遺物包含層出土土器の概要のあと、上層出土の土器として一括してのべる。

ａ．遺物包含層出土の土器

〔Ⅰ期　古墳時代前・中期〕

壺（１～４）は、やや突出した底部（24）をはじめ、平底の底部（25～29）が残る庄内式に比定できるものが大半を占めるが、量的には多くない。また、布留式の二重口縁壺（141）の小片も認められた。

甕は、庄内、布留式両期を通して地域色のあるものが混在している。器壁の厚いくの字状の口縁を有するもの（５、６）は、第Ⅴ様式の畿内系甕の在地化したものの系譜に求められよう。受口状口縁を有する近江の甕（７～11）は、端部を外方へつまみ出す新しい時期のもので、体部外面にハケメ調整を施すもの（７～９）と、施さないもの（10、11）がある。前者は、おそらく（31）のような小さな平底を残し、後者は器体のカーブからみて丸底の可能性がある。ここでは前者を庄内式、後者を布留式に伴うものと考えている。畿内系の甕は、器壁の薄いくの字状の口縁を有し、その端部をわずかにつまみあげた庄内式甕（13～15）と、口縁部が内弯し端部を肥厚させた布留式甕（16、17）とがある。庄内式甕のうち（13）は、わずかな口縁部の破片であるが、胎土からみて搬入品の可能性が強い。ただ（15）にみられるように、胴部が丸味をおび、外面もハケメ調整であり、庄内式としても新しい段階のものと考えられる。東海系のＳ字状口縁台付甕（18～22）は、小破片を含めると比較的よく目立ち、量的には受口状口縁をもつ近江の甕と大差はない。甕には大小２種が認められるが、形態からみて時期幅があり、頸部内面にクシメを残す（18）の方が（19、20）にくらべ口縁部のつくりがシャープで、前者を庄内式、後者を布留式に伴うものと考えている。（21、22）は、東海系の甕の脚台であるが、（33）は湖北に分布する受口状口縁甕の脚台の可能性もある。北陸系の甕（23）はほとんどなく、口縁部外面に擬凹線文を施す月影式のものであるが、口縁部内面の立上りに明瞭な段をもっていない点注意をひいた。

（33）は、庄内式期の椀状をした台付鉢と考えたが、すでにのべたように在地の台付甕の脚台であるかもしれない。

（34）は、布留式の典型的な椀である。

高杯は、杯部が少なく、比較的残り易い脚柱部が多かった。（35）の杯部は外方へ口径が大きく広がり、深い庄内式の高杯である。しかし、端部にシャープさを欠き、器表の調整も雑になっていることなどからみて、布留式に近い新しい時期のものであろう。脚部は、円形の透しを穿ったもの（36）と、透しをもたないもの（37）とがある。ここでは透しのあるものは古い様相ととらえ、前者は庄内式、後者を布留式のものと考えている。（38）は、椀状の杯部をもち、脚の裾部が大きく開く布留式の高杯であろう。この他、特徴的なものとして、杯の内面を装飾した東海系の高杯（154）も認められる。

器台は、第Ⅴ様式から続く筒状のものがある。下半部のみ（40）で、口縁部を欠くが庄内式のものであろう。（41、42）の小型器台は、（34）の椀と共に布留式の指標となる器形であるが、小形丸底壺のみ出土していない。

〔Ⅱ　期〕

須恵器の杯が量的にも多く、その変化も見やすいことから、杯を用いてⅡ期をⅡ－１期とⅡ－２期に細別した。杯の形態を概観すると、蓋は天井部の稜が完全に消滅したもので、時期決定の目安となる。Ⅱ－１期の杯（82～84、86～88）は、Ⅱ－２期の杯（89～95）にくらべて口径が大きく、たちあがりの高い点があげられる。

Ⅱ－１期には、有蓋高杯（85）や透しのない脚部（134）をもつ高杯、長頸壺（129）などの須恵器と、口縁部内面にヘラ記号のある土師器の長胴甕（43）などがあげられているが、いずれも須恵器の杯ほど明確に時期決定は難しい。小片であるが端部外面が肥厚する須恵器の甕や、土師器の把手付き甕（44）や杯（50）などは、大きくⅡ期の範疇でとらえられよう。

Ⅱ－１期は、須恵器の杯やその他の遺物から、600年前後の６世紀第４四半期～７世紀第１四半期を中心とする時期が考えられよう。それに対してⅡ－２期は、Ⅱ－１期に続く７世紀第２四半期を中心とする時期とみてよいで

あろう。ただ、Ⅱ-1、2期とも飛鳥時代前期にありながら、まだ古墳時代より継続する器形が大半を占めている。ことにⅡ-2期の須恵器の杯をみると、湖北地方においても宝珠つまみをもつ小形の杯が出現しているにもかかわらず共伴していない。

〔Ⅲ　期〕

Ⅱ期同様、須恵器の杯の変化で、Ⅲ-1期とⅢ-2期に細別した。

Ⅲ-1期の須恵器の杯は、蓋の頂部に宝珠つまみがつき内面にかえりをもち（96）、身は外方へしっかりと八の字状に開く高台のついた深いもの（97）である。身については、形態的に蓋よりやや後出的であるが、近接して出土しており、共に大きく損われておらず、口径に大差がないことなどからセットとした。また、高台のつかない杯（98～99）は比較的多い。内外面にハケメを残す土師器の甕（47）も、この時期のものであろう。

Ⅲ-2期の須恵器の杯は、蓋内面のかえりが消滅した大きく深いものである（102～105）。高台のつかない杯（100～101）は、Ⅲ-1期のものにくらべると浅くなり、内面の底部と体部の境がしだいに不明瞭となっている。長頸壺（132）は、最大径が体部中位にあり、高台底面が水平になる。比較的高い高台をもつ台付鉢（135）は、あまり類例を見ないが、高台の形状の類似からこの時期と考えた。天井部に把手のついた平瓶（133）も、この時期のものであろう。土師器は、精良な胎土にヘラミガキや暗文を施した杯（51）がみられるようになる。（48）の甕も、Ⅲ-1期と比較すると薄手になる。

Ⅲ-1期は、7世紀第3四半期を中心とする時期が考えられる。それに対してⅢ-2期は、700年を前後する7世紀第4四半期～8世紀第1四半期を中心とする時期とみてよいであろう。このⅢ期より、須恵器、土師器とも在地色が払拭され、畿内中央部の土器と大差なくなる。

〔Ⅳ　期〕

Ⅳ期になると、Ⅱ、Ⅲ期にくらべて須恵器の杯の形態変化が鈍くなり、代って土師器の杯や皿などに大きな変化が読みとれるようになる。そのためここでは、土師器の変化を基準にして細別を行った。

Ⅳ-1期の土師器の杯は、内面に暗文を施すもの（52）が少なからずあり、また口縁端部を丸く内傾させるなど特徴的なものも多い（53）。須恵器では、頸部に数段に波状文を施す甕（127）や、角張った高台がやや外方へふんばった杯（106）などがこの時期と考えられる。

Ⅳ-2期は、この時期より、畿内の土師器の杯と形態や製作技法に違いが顕著になり、近江の地域色が明確になる。器壁の薄い皿（68、69）や須恵器の皿を写したような形態の皿（66）、器壁が厚ぼったく感じる口縁端を丸くおさめた杯（70）、あるいはⅣ-3期以降目立つロクロ成形と思われる須恵器杯を模倣したような土師器の杯などもこの時期に出現しているのかもしれない。大、小の甕（46、49）も、この時期から次の時期にかけてのものと考えている。須恵器杯は、しっかりとした宝珠のついた、屈曲した口縁端部をもつ蓋（110）に対し、身は高台にシャープさがなくなり高台径も小さくなる（111、112）。こうした杯は、Ⅳ-3期にも継続するものと思われる。また、（117）の杯蓋の口縁端部は、各時期を通して例がなく、あるいは北陸方面の土器の可能性がある。この他須恵器では、皿（139）や深鉢（168）などがある。

Ⅳ-3期は、須恵器模倣のロクロ土師器の杯（75～80）が主流となるが、面取りした脚をもつ高盤（72）も残っている。須恵器に代って灰釉陶器の椀（121、122）や皿（120）が出現する。灰釉陶器は、体部をヘラケズリ成形し、高台も断面の角張ったシャープなもので、底部に糸切痕などはとどめていない。一方須恵器では、平底の甕（128）や、円筒形の無頸壺（136）など、これまでみられなかった新しい器形が加わっている。

Ⅳ-1期は、土師器の杯からみてやや幅があり、8世紀第3四半期から第4四半期にかけての時期。Ⅳ-2期は、

9世紀第1四半期を中心とする時期が考えられる。Ⅳ-3期は、9世紀中葉を中心とするが末まではいかないやや漠然とした時期幅を考えている。ただ下限については、貞観15年（873）の木簡を伴出した高島郡高島町鴨遺跡の土器群④より古い様相を呈していることによるものである。Ⅳ-3期で注意をひいたことは、緑釉陶器や無釉陶器はいうにおよばず、一般的には伴出する黒色土器がまったく認められなかったことがあげられる。

〔墨書土器〕

墨書土器は3点出土しており、須恵器、灰釉陶器、土師器各1点ずつ底部に文字が認められた。須恵器の杯（115）には「田村」とあり、おそらく地名で世継北東の長浜市田村町付近をさすのであろう。灰釉陶器の椀（123）には「穴回」とあり、人名ではないかと推定される。土師器は、墨の残りが悪く、しかも小破片のため判読できなかった。器壁の厚さ、色調などからⅣ期のものであろう。

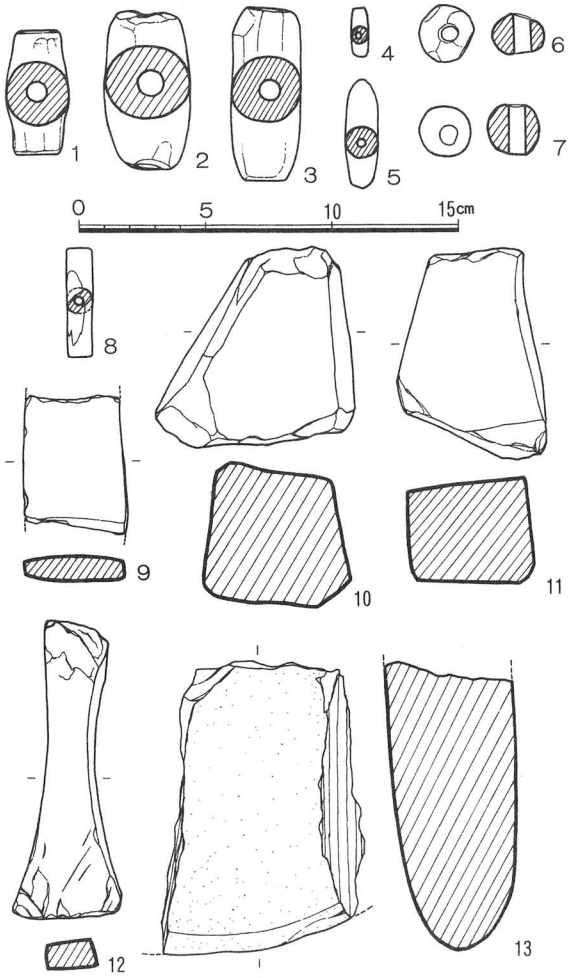
b．上層出土の土器

平安時代の灰釉陶器をはじめ、平安時代末の常滑の大平鉢、鎌倉時代の常滑の甕、青磁碗。信楽の大平鉢、瓦器の火舎のものと思われる獣足、土師質土器の小皿などがある。

時代的には、平安～室町時代と各時期に渡っているが、近世の遺物は出土しなかった。

（2） 土　錘

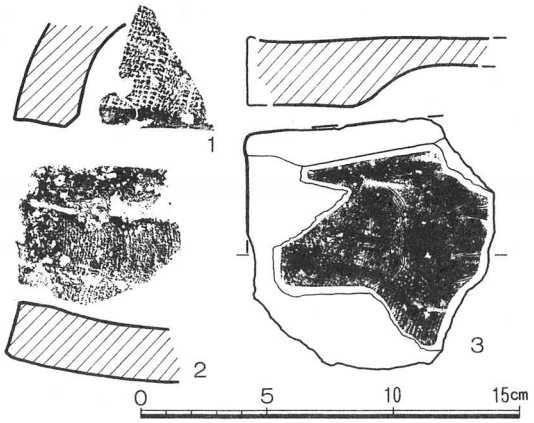
（1）が試掘時にT15より出土した他、すべては本調査時の出土である。形態から、球形のもの（6、7）と円筒形のものと2種類に大別できる。円筒形の中でも、（4、5）は小形である。



第10図　土錘・石製品実測図

（3） 瓦

瓦は3点あり、遺物包含層の砂礫層中より出土している。地点別には、第5地点より丸瓦（1）、第2地点より平瓦（2）と用途不明瓦（3）が出土している。このうち（3）の瓦は、端部に行くにしたがって太くなり逆玉縁



第11図　瓦実測図

状になる。この瓦は軟質であり、他の２点は硬質である。瓦は小片のためその年代については決定し難いが、作りなどからみてⅣ期の土器に伴うものと考えている。しいて年代を特定するなら、平安時代前期のものではなかろうか。

（４） 石製品

管玉（８）と砥石（９～12）と用途不明（13）のものが、遺物包含層中より出土している。

（５） 木製品

遺物包含層より出土した木製品は、量的には少なく、そのうち加工の明確なものは５点である。

（４）は、下方を欠失しているが、側面に少くとも２個以上の切込みが推定できることから、斎串Ⅰ⑤の頸部かもしれない。斎串とすればⅣ期と推定される。

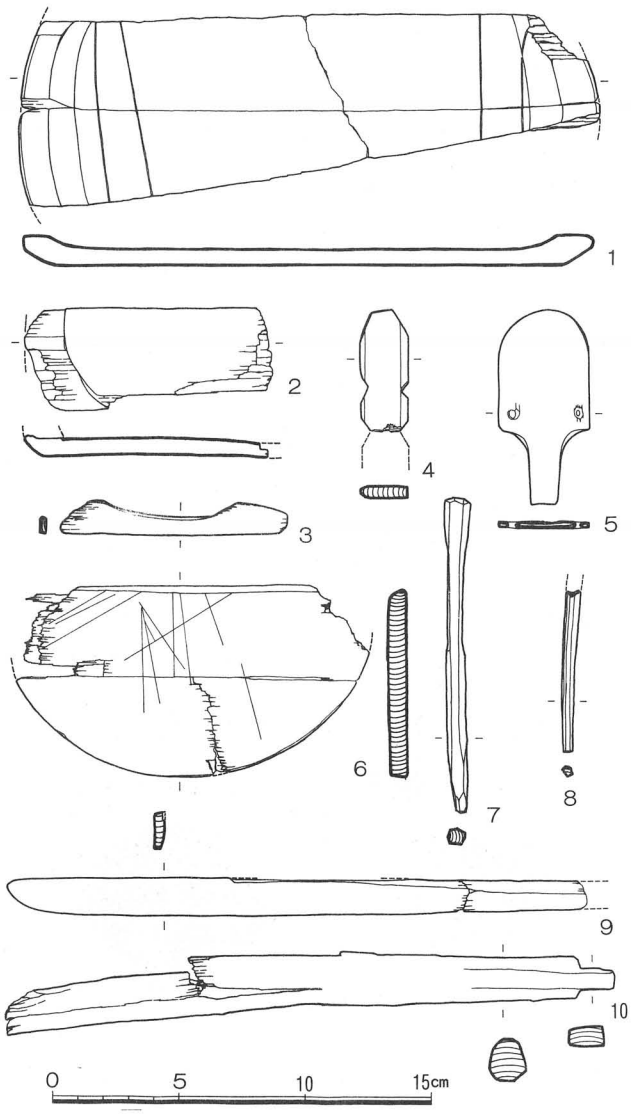
（１、２）は刳物の皿で、（１）は内底面に２カ所、底面に１カ所、使用時についたと思われる浅い傷がある。Ⅳ期と推定される。

（６）は曲物の底板で、刃痕が表面につく。Ⅳ期と推定される。

（３、７）は用途不明の木製品である。（７）は、両端を削って整えた浮子状のもので、共に時期不明。

上層からは、Ｔ12より箸の断片（８）、Ｔ17より杓子状の用途不明木製品（５）と刀状のもの（９）が出土している。（９）は、先端部が焼焦げており、もう一端は欠損している。Ｔ５より、一端に枘を作った何かの部材と考えられる板材（10）が出土している。

（高田宏司・兼康保明・前角和夫）



第12図　木製品実測図

6．まとめ

調査の結果、検出された遺物包含層は、トレンチより西側にある現在の集落の立地する浜堤上より廃棄され、それが浜堤縁辺部の湿地へ流入して堆積したものである。試掘調査と第12号小排水路の調査状況からみて、遺物包含層の広がりは、浜堤北西部の縁辺で東西約30m、南北約80m（北へのびるかどうかは、調査範囲外のため未確認）程の範囲と推定される。

発掘が水路敷の限られた面積の調査であったため、検出されたピットのならび方など十分に検討できなかったものもある。しかし、立地条件などから考えると、検出された遺構は、杭の跡や自然地形の窪みなどであろう。そして、遺物を廃棄した遺跡の本体ともいうべき生活の場は、おそらく現在の世継の集落と重複しているのであろう。浜堤上での調査は、これまで一度も行われていないが、調査地の西側に隣接する微高地上の畑地には、それを証明するかのように須恵器や土師器など土器の破片が散布している。

遺物包含層（第4層）の状況は、古墳時代から平安時代前期までの遺物が混在して出土し、層位的堆積や地点別に時期が異なるなど編年に資するような出土状況ではなかった。そのため、土器の形式分類によって遺物包含層中の土器を4期に大別した。

Ⅰ期は、古墳時代の古式土師器で、細別すると庄内式の新しい段階のものと布留式のものに分類できる。

Ⅱ期は、古墳時代後期（6世紀第4四半期）から飛鳥時代（7世紀第2四半期）にかけての時期であるが、須恵器は古墳時代の様式を飛鳥時代まで継承している。須恵器の杯で分類すると、さらに2期に細別できる。

Ⅲ期は、飛鳥時代（7世紀第3四半期）から奈良時代前期（8世紀第1四半期）にかけてのもので、2期に細別できるが、量的には奈良時代前期のものが圧倒的に多く、土師器の杯の内面に暗文を施すものが現われる。

Ⅳ期は、奈良時代後期（8世紀第3四半期）から平安時代前期（9世紀中葉）のもので、3期に細別できる。中でも細別された第2期より、畿内と土師器の杯や皿の形態、製作技法などに相違がみられるようになってくる。第3期になると灰釉陶器は出土するが、緑釉陶器、無釉陶器、黒色土器はまったく認められなかった。緑釉陶器のような特殊な土器はともかくとして、土師器と供膳、煮沸両形態を構成している黒色土器の欠落は、不可解な現象である。

Ⅴ期は、平安時代中期（10世紀中葉）のもので量的にはひじょうに少ないが、出土状況よりみて遺物包含層の堆積時期を示すものである。

遺物包含層より上部の層、あるいは地点を異にして、Ⅴ期からそれ以降の平安時代から室町時代の土器や木製品などが少量ある。

遺物包含層より上部の層、あるいは地点を異にして平安時代～室町時代の土器や木製品が少量出土している。

以上出土した遺物をみると、まず遺物包含層のⅠ期とⅡ期の間に断絶がみられる。次にⅡ期以降Ⅳ期までは、調査面積に制約があり遺物の出土量に時期的なバラつきはあるが、8世紀中葉に編年の空白がみられるもののほぼ一貫して土器形式の変遷を追うことができる。おそらくこのころから、世継の浜堤上に安定した生活の跡がうかがえるのである。また土器の器形の転換や、暗文を施した土師器の杯が認められるようになるなど、7世紀第3～4四半期を境に浜堤上の遺跡の性格が変質したのではないかと推定される。それは、8世紀代に至っても暗文を施す土師器の杯、皿が目立つことから、けっして湖辺の一村落とは言い難いのである。加えて、3片ではあるが瓦片が出土していることも大きな問題を投げ与えている。

調査の課題の一つでもあった寺院跡については、今回の試掘をも含めた調査範囲内には所在しなかった。水田中に残る「興福寺」の字名は、おそらくその所領が小字名として今日まで残ったものであろう。

ただ出土遺物にみられるように、古瓦が3片出土していることから、遺跡の性格は別として、浜堤上に瓦を使用した建物があった可能性はきわめて強い。世継と同じような浜堤上に立地する米原町筑摩湖岸遺跡においても、やはりごく少量の平瓦が出土している⑥。両遺跡の立地と歴史的背景、瓦の出土量などから推測すれば、伽藍の整備された古代寺院を想定するよりも、天野川流域の湊に伴う建物、あるいは御厨の建物に伴う瓦ではないかとも考えられる。「興福寺官務帳流」にみられる世継寺は、おそらく中世の寺院であり、伝承に言う天台寺院もあるいは小規模な堂舎から成っていたものであったかもしれない。共に歴史的にみて、Ⅴ期以降のことであり、今回の調査では確認するだけの資料は得られなかった。（兼康保明）

註

① 近江町教育委員会中川通士氏の御教示による。

② 林屋辰三郎「古代芸能の成立と特質」（『中世芸能史の研究』岩波書店、1960）76～79頁。

③ Ⅱ～Ⅳ期の分類については、次の報告書の編年を用いた。
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ（奈良国立文化財研究所、1978）
『平城宮発掘調査報告』Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅸ（奈良国立文化財研究所　1962・1965・1974・1976・1978）

④ 丸山竜平他『鴨遺跡』（高島町教育委員会・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1980）
兼康保明「滋賀県鴨遺跡出土陶磁」（『愛知県陶磁資料館研究紀要』2　愛知県陶磁資料館　1983）

⑤ 黒崎　直「斎串考」（『古代研究』10　元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室　1976）

⑥ 中井　均『筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』（米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅴ　米原町教育委員会　1986）17・18頁、図版14。

⑦ 須崎雪博『山の神遺跡発掘調査報告書』（大津市埋蔵文化財調査報告書（9）　大津市教育委員会　1985）図版43、154～156。

第2表　世継遺跡出土土器観察表

器形	No.	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	備考	時期
土師器 壷	1	口径　14.9	頸部のくびれ部より口縁部は外反し、口縁端部を内弯させつまみ上げる。	内外面は横ナデ。	D区　残1/3	I期
	2	口径　13.0	上外方に真直ぐにのびる口縁部。	口縁部内外面は横ナデ。体部内外面はナデ。	B区　残1/3	〃
	3	口径　16.2	口縁部は外反し、口縁端部は外側に外傾面を作る。	内外面は横ナデ。	C区　残1/8	〃
	4	口径　13.2	屈曲し、上方に外反する口縁部。口縁端部はやや外面肥厚する。	内外面横ナデ。	H区　残1/4	〃
土師器 甕	5	口径　15.4	器壁の厚いくの字状の口縁を有する。	内外面ともに刷毛。（6）は刷毛後横ナデ。	5　B区　残1/5 6　H区　残1/4	〃
	6	口径　14.2				
	7	口径　15.3	受口状口縁を有する近江の甕。	口縁部内外面横ナデ、体部外面は刷毛を施すもの（7～9）と施さないもの（10・11）がある。内面は横ナデ。	7　H区　残1/5 8　F区　残1/5 9　G区　残1/4 10　G区　残1/4 11　C区　残1/5	〃
	8	口径　14.9				
	9	口径　10.6				
	10	口径　13.4				
	11	口径　11.8				
	12	口径　12.9	くの字の頸部から口縁端部を上方につまみ上げる。	口縁部内外面は横ナデ。頸部外面に波形と直線文を施す。	A区　残1/8	〃
	13	口径　13.9	器壁の薄いくの字状の口縁部を有し、口縁端部をわずかにつまみ上げる庄内式甕。	口縁部内外面は横ナデ。（14）の口縁部内面は刷毛後横ナデ。体部内面は篦削り。（14・15）の体部内面は篦削り。（144）の体部外面は細かい叩き。内面は篦削り。	13　H区　残1/14 河内系の胎土か 14　C区　残1/6 15　B区　残1/3 144　G区　残1/14	〃
	14	口径　15.2				
	15	口径　15.3				
	144					
	16	口径　15.1	口縁部は内弯し、口縁端部を内面肥厚させた布留式甕。	口縁部内外面横ナデ。	16　I区　残1/12 17　I区　残1/10 142　C区　残1/6 143　C区　残1/8	〃
	17	口径　12.6				
	142	口径　13.4				
	143	口径　15.5				
	18	口径　14.5	東海系のS字状口縁台付甕の口縁部。	口縁部内外面は横ナデ。（18）は頸部内面に櫛目を残し、体部内面は指ナデ。（20）は頸部に一条の沈線。体部内面は篦ナデか。	18　H区　残1/3 19　H区　残1/4 20　H区　残1/5 145　H区 146　H区 147　H区　残1/8 148　H区　残1/10	〃
	19	口径　13.3				
	20	口径　9.0				
	145	口径　11.1				
	146	口径　15.2				
	147	口径　10.2				
	148	口径　14.6				
	21		東海系のS字状口縁台付甕の脚台。	外面は刷毛で（22）は部分的にナデ消し。内面は指ナデ。	21　C区　脚台上半部完存 22　I区　残1/2	〃
	22					
	23	口径　14.3	北陸系の口縁部外面に擬凹線文を施す甕。	口縁部内外面横ナデ。	C区　残1/8	〃
土師器 壷	24	底径　8.0	やや突出した平底の底部。	内外面ナデ。底部外面に乾燥時の圧痕。	H区　残3/4	〃
	25	底径　5.7	平底のもの（25・29）と大きく凹むもの（26）とやや凹むものとがある。	概ね内外面ナデであるが（25）の内面は刷毛後ナデ。（26）の外面は刷毛後ナデ。（30）の内面は刷毛。また（28）の底部外面には平行	25　I区　残1/4 26　A区　残1/4 27　I区　底部完存 28　T17　底部完存 29　H区　底部完存	〃
	26	底径　4.5				
	27	底径　4.1				
	28	底径　6.8				
	29	底径　4.1				

	30	底径　5.2		線状の圧痕が残る。	30　拡張区　残½	I　期
土師器甕	31	底径　3.3	小さな平底（31）と大きく凹んだ底部（32）。	内外面ナデで、（31）の外面は板状工具を使っているのか。	31　拡張区　底部完存 32　H区　残⅓	〃
	32	底径　3.0				
土師器脚台	33		ほぼ直線的に開く脚部。	外面横ナデ。脚部内面ナデ。体部内面に放射状の板ナデ。	H区　脚部上半完存	〃
土師器椀	34	口径　15.4	半球形の体部より口縁部が2段に屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ。	H区　残⅕	〃
土師器高杯	35	口径　23.2	坏部は外方へ大きく開き、深い。	全体に磨滅が激しいが、恐らく内外面とも横ナデであろう。	B区　坏部ほぼ完存	〃
	36		八の字状に開く脚柱部で三方透しである。	内面にしぼり痕あり。	36　H区　脚柱部完存 153　C区　脚柱部完存	〃
	153					
	37		直線的に開く脚柱部（37）と筒状の脚柱部（149・151）で共に透しはない。	外面ナデ。内面は篦削り。	37　T17　脚柱部完存 149　T17　脚柱部完存 151　T17　脚柱部完存	〃
	149					
	151					
	38		短い脚柱部に大きく広がる裾部で八方透しである。	内外面ナデ。	C区　脚柱部完存	〃
	39	裾径　12.8	低く大きく開く裾部。	内外面刷毛後横ナデ。	I区　残⅕	〃
	154		杯の内面を装飾した東海系の高杯。	内外面横ナデ。	E区	〃
土師器器台	40	裾径　25.3	大きく外反しながら開く裾部で、端部はやや上方に拡張する。	外面は刷毛後ナデ。内面はナデ。	I区　残⅛	〃
	41	口径　8.5	浅くて小さい受部に（42）は大きく広がる脚部がつく。恐らくどちらも三方透しであろう。	受部内外面及び脚部外面は横ナデ。脚部内面は（41）がしぼり痕を残し、（42）は刷毛。	41　H区　残¼ 42　G区　残⅓	〃
	42					
土師器壷	140		口頸部は外反し、口縁部は上方において直立する。2本以上の棒状浮文を貼り付ける。		H区	〃
	141		二重口縁	内外面横ナデ。	表採	〃
土師器甕	43	口径　21.6	口縁部は内弯し、口縁端部が内傾するもの（43）、内外面に肥厚するもの（45）、外方が強い横ナデによりやや凹むもの（46）がある。	口縁部内外面は概ね横ナデ。胴部内外面は概ね刷毛。（43）は口縁部内面にヘラ記号を有する。	43　J区　残⅙ 45　I区　残¼ 46　I区　残1/12	II－1期 III　期 IV　期
	45	口径　19.6				
	46	口径　22.8				
	44	口径　18.6	胴部に把手の付く甕と思われる。	口縁部内外面は横ナデ。	H区　残1/12	II　期
	47	口径　13.5	口縁部は外傾し、口縁端部は丸くおさまる。	口縁部内面横ナデ。口縁部外面は刷毛後横ナデ。	拡張区　残¼	III－1期
	48	口径　14.6	外反する口縁部で、口縁端部は上下にやや拡張し、外面に凹線を施す。	口縁部内外面横ナデ。胴部内外面刷毛。	拡張区　残1/10	III－2期
	49	口径　9.4	外反する頸部を口縁部で	口縁部内外面と体部外面	I区　残⅕	IV　期

			内弯させる。	は横ナデ。体部内面篦削り。		
土師器杯	50	口径 9.0 器高 3.4	小型の杯身	内外面ナデ。	H区 残⅔	Ⅱ 期
	51	口径 17.8 器高 5.1	深くて大きめの杯身で、口縁端部はやや外反する。	内面に放射状暗文を施し、外面下方は篦削り。	拡張区 残⅐	Ⅲ－2期
	52	口径 17.0	口縁端部は巻き込む様に肥厚し、深いもの（52）と浅いもの（53）	内面に放射状の暗文を施す。	52 拡張区 残⅛	Ⅳ－1期
	53	口径 18.4			53 拡張区 残⅐	〃
	54	口径 14.6 器高 2.7	口縁部は直線的に立ち上り、口縁端部はやや内面肥厚する。	内面にラセン暗文を施す。	54 拡張区 残⅛	〃
	55	口径 15.4 器高 3.6			55 拡張区 残⅙	〃
	56	口径 12.1	口縁部は内弯する。	内外面横ナデ。	56 拡張区 残⅙	〃
	57	口径 12.2			57 拡張区	〃
	58	口径 11.8 器高 2.3	口縁部は内弯し、口縁端部はやや外方へ屈曲している。	底部外面は不調整で（58）底部外面に布目圧痕が残る。	58 拡張区 残¼ 150 拡張区	Ⅳ－3期
	150					
	59	口径 11.2 器高 3.3	口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。	底部外面は不調整。	拡張区 残¼	Ⅳ 期
	60	口径 12.0	口縁部は内弯し、口縁端部は外面肥厚する。	内外面横ナデ。	拡張区 残⅛	Ⅳ－3期
	61	口径 14.8 器高 2.3	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部はやや内傾する。	底部外面は不調整。	拡張区 残¼	Ⅳ－1期
土師器盤	62	口径 19.8	口縁部は外傾し、口縁端部は外面肥厚する。	外面底部は不調整と思われる。	拡張区 残¼	Ⅳ－2期
土師器皿	63	口径 25.4	口縁部は内弯ぎみに立ち上り、口縁端部は丸くおさまる。	底部内面及び口縁部外面に暗文。	J区 残⅙	Ⅳ－1期
	64	口径 14.8 器高 1.4	口縁端部はやや面取りをしている様である。	底部外面は不調整。	64 I区 残¼ 66 拡張区 残⅙	Ⅳ－2期
	66	口径 14.8 器高 1.5				〃
	65	口径 12.6 器高 1.6	口縁部は内弯し、上方において外反する。	底部外面は不調整。	拡張区 残⅒	〃
	67	口径 14.3 器高 1.5	口縁部は内弯し、器壁がやや厚い。	底部外面は不調整。	拡張区 残⅙	〃
	68	口径 14.6	口縁部は内弯し、口縁端部は丸くおさまる。	底部外面は不調整。	68 I区 残⅙	〃
	69	口径 15.6 器高 1.7			69 I区 残⅛	〃
土師器杯	70	口径 14.5	口縁部は内弯し、上方で若干外反している。	底部外面は不調整。	70 拡張区 残¼	Ⅳ－2～3期
	74	口径 11.2			74 H区 残⅕	〃
	75	口径 11.9 器高 2.3	口縁部はほぼ直線的に立ち上る。	底部外面は不調整。	75 拡張区 完形 76 拡張区 残½	Ⅳ－3期
	76	口径 11.4			79 T17 残¼	〃
	79	口径 10.6 器高 3.0				〃
	77	口径 12.4 器高 2.7	口縁部はやや外に開く。	底部外面は不調整。	77 I区 残⅙ 78 H区 残⅕	〃
	78	口径 11.0 器高 2.9			80 拡張区 残½ 81 拡張区 残⅙	〃
	80	口径 12.4 器高 2.9				〃

	81	口径　13.2				Ⅳ　期
土師器 高盤	71		(71) は7面、(72) は8面、(156) は細かく面取りを行う。		71　J区　脚柱部完存 72　拡張区　脚柱部完存 156　拡張区　脚柱部完存	Ⅳ－2期 Ⅳ－3期
	72					
	156					
	73	口径　23.6	ほぼ直線的に開く杯部で、口縁端部は外に張り出し若干面取りを行う。	内面は横方向、外面は放射状の暗文を施す。	拡張区　残1/14	Ⅳ－3期
土師器 鍋	155		口縁部は外弯し、上方において屈曲度をます。	胴部内外面刷毛。	拡張区	
土師器 椀	157		椀の高台部と思われる。		157　拡張区 158　K区	
	158					
土師器 皿	159		台付皿の脚台と思われる。		拡張区	
土師器 不明	152		口縁端部は内傾し、外面に断面三角形の凸帯を貼り付ける。	胴部外面に煤が付着。	T16	
須恵器 杯蓋	82	口径　12.7	口縁部はやや内弯しながら下りる。	天井部上方を篦削りしている。	82　I区　残1/4 83　T17　残1/4 84　I区　残1/5	Ⅳ－1期
	83	口径　11.0 器高　3.6				
	84	口径　11.6 器高　2.7				
須恵器 高杯	85	口径　11.8	有蓋高杯の杯部で、ほぼ水平の受部に上方において屈曲する立ち上り部をもつ。二方透しである。	杯部内面中央部のみ丁寧な仕上げナデ。	85　J区　残1/3 162　T17	Ⅱ－1期
	162					
須恵器 杯身	86	口径　10.7 器高　3.3	受部はほぼ水平で、立ち上り部はやや内弯している。	外面下方を篦削りしている。	86　T17　残1/2 87　T17　残1/3 88　H区　残1/7	Ⅱ－1期
	87	口径　11.2 器高　3.5				
	88	口径　10.0 器高　3.1				
須恵器 杯蓋	89	口径　10.6 器高　3.9	小型の杯蓋。	天井部上方を篦削りしている。	89　I区　残1/2 90　T17　残1/3 91　I区　残1/3	Ⅱ－2期
	90	口径　9.6 器高　3.7				
	91	口径　10.0 器高　3.1				
須恵器 杯身	161	口径　9.8	受部はやや上方に屈曲し、立ち上り部はやや肉厚である。	内外面横ナデ。	T17　残1/6	
	92	口径　9.4 器高　3.1	小型の杯身。	外面下方を篦削りしている。(94) は底部に2条の篦記号。	92　T17　残1/4 93　J区　残1/2 94　I区　残1/2 95　J区　残1/4	Ⅱ－2期
	93	口径　8.6 器高　3.3				
	94	口径　8.9 器高　2.9				
	95	口径　9.3 器高　3.2				
須恵器 杯蓋	96	口径　15.6 器高　3.1	内面のかえりが退化しかけている遍平な杯蓋。	天井部上方を篦削りしている。	H区　残1/4	Ⅲ－1期

須恵器 杯身	97	口径　13.6 器高　4.6 高台径　8.3	ハの字状に開くしっかりした高台。	内外面ロクロナデ。	G区　完形	Ⅲ－1期
	98	口径　9.8 器高　3.6	高台のつかない深い杯身。	(99)の底部の一部に篦削りが残る。	98　拡張区　ほぼ完形	Ⅲ－1期
	99	口径　13.6 器高　4.9			99　拡張区　残⅓	〃
	100	口径　11.6 器高　3.2	浅くて大きな杯身。	底部外面は不調整。	100　拡張区　残½	Ⅲ－2期
	101	口径　13.2 器高　3.8			101　Ⅰ区　残⅓	〃
須恵器 杯蓋	102	口径　17.2 器高　4.6	大型で深い杯蓋。	天井部は不調整。	102　拡張区　残⅓	〃
	103	口径　18.0 器高　3.9			103　H区　残¼	〃
須恵器 杯身	104	口径　16.3 器高　4.4 高台径10.6	浅くて大きめの杯身に低い高台が中心よりにつく。	底部外面は不調整。	104　拡張区　残¼	〃
	105	口径　17.6 器高　4.3 高台径12.7			105　H区　残½	〃
	106	口径　14.4 器高　4.7 高台径10.2	深く大きめの杯身に低い高台部。	底部外面は不調整。	106　Ⅰ区　高台部完存、他は½	Ⅳ－1期
	107	口径　15.4 器高　5.4 高台径10.0			107　拡張区　ほぼ完形	〃
	108	口径　11.8 器高　3.9 高台径　7.6	ほぼ直線的に開く口縁部で、口縁部上方でやや外反する。	底部外面は不調整。	H区　残⅓	Ⅳ－1～2期
	109	口径　14.0 器高　3.1	浅くて大きめの杯身。	底部外面は不調整。	拡張区　残¼	〃
須恵器 杯蓋	110	口径　11.7 器高　2.6	口縁部で屈曲して稜のつく杯蓋。	天井部外面は不調整。 重ね焼き痕が残る。	拡張区　残½	Ⅳ－2期
須恵器 杯身	111	口径　11.4 器高　4.4 高台径　7.5	ほぼ直線的に開く口縁部。幅広の低い高台部。	底部外面は不調整。	111　拡張区　高台部完存　口縁部⅙ 112　拡張区　完形	Ⅳ－2～3期
	112	口径　11.5 器高　4.1 高台径　7.6				〃
	113	口径　12.0 器高　4.0	高台のつかない杯身。	底部外面は不調整。	113　H区　残½ 114　拡張区　残⅓	〃？
	114	口径　11.9 器高　3.0			165　拡張区　残½ 166　拡張区　残⅙	Ⅳ－3期
	165	口径　12.2				
	166	口径　11.2				
	115	口径　14.4 器高　5.0 高台径　8.4	やや深く大きめの杯身に低い高台部	底部外面は不調整。	拡張区　残¾	Ⅳ－2～3期
	116	口径　13.8 器高　3.6 高台径　9.0	やや小さめの高台が底部中心よりにつく。	底部外面は不調整。	拡張区　残¼	〃？
須恵器	117	口径　14.2	扁平な杯蓋。	(117)は天井部の一部	117　拡張区　残⅑	Ⅳ　期

杯蓋	160	口径　16.8		に篦削りが残る。	転用硯 160　T17　残⅓	
	163				163　T 4	
	118	口径　13.8 器高　1.7	つまみのつかない杯蓋。	天井部外面は不調整。 天井部内面は仕上げナデ。	118　I区　ほぼ完形	Ⅳ－3期
	119	口径　16.0 器高　1.1			119　拡張区　残½	〃
灰釉陶器 皿	120	口径　14.4 器高　2.4 高台径　5.9	口縁部はやや外反する。高台部は断面台形状で、内側に段がつく。	皿部下半及び底部外面は篦削り。	拡張区　完形	Ⅳ－3期
灰釉陶器 椀	121	口径　14.0 器高　4.7 高台径　6.6	口縁部はやや外反する。高台部外面はやや外反し、（121）は内面に段がつく。	胴部下半及び底部外面は篦削り。	121　拡張区　完形 122　T16　残⅓	〃
	122	口径　13.0 器高　4.6 高台径　6.0				〃
	123	高台径　7.4	口縁部はやや内弯し、高台部はやや高めの高台である。	底部外面は篦削り。	123　J区　残½ 178　J区　残⅙ 180　拡張区　残⅓ 181　C区 182　J区　残⅙	〃
	178	口径　14.4				
	180	高台径　6.1				
	181					
	182	高台径　7.2				
	124	口径　10.9 器高　2.4 高台径　5.8	体部はやや内弯ぎみに立ち上り、低い高台がつく。	底部外面は篦削り。	124　J区　残½ 179　J区　残¼	V　期
	179	高台径　7.4				
	164	高台径　7.0	断面方形の高台（164）、やや三ケ月形の高台（183）三角形の高台（185）等がある。	底部外面は糸切後高台貼付時にナデ消し。（183）のみ高台接地部を棒状具により凹ませている。	164　T17　残½ 183　F区　残⅕ 184　J区　高台部完存 185　J区　残⅓	
	183	高台径　6.0				
	184	高台径　6.1				
	185	高台径　7.7				
須恵器 甕	125	口径　16.4	口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は外面肥厚する。	胴部内外面は叩き。	拡張区　残⅐	Ⅱ－1期
	126	口径　21.4	口縁端部は外面下方に拡張する。	口縁部内外面はロクロナデ。	拡張区　残⅓	Ⅱ～Ⅲ－1期
	127	口径　38.4	口縁部は外反し、口縁端部で上方に屈曲する。	口縁部外面に波状文を施す。	127　I区　残⅙ 175　I区 176　I区	Ⅳ－1期
	175					
	176					
	128	底径　17.2	平底の底部。	胴部内外面は叩き。	I区　残⅕	Ⅳ－3期
	169		口縁部は外反し、口縁端部で上方に屈曲する。		I区	
須恵器 壷	129	口径　7.5 器高　19.2	なだらかに外反しながら立ち上る長頸壷	口縁部内外面に絞り痕を残す。時計回りの13本1単位の刺突列点文。	H区　残½	Ⅱ－1期
	130		口頸部の器壁が非常に厚い。胴部上方にて肩が張る。	胴部外面沈線より下方に篦削り。	拡張区　図の部分のみほぼ完存	Ⅲ期？
	131	高台径12.6	高台部は逆くの字状に開く。透しは四方と思われる。透し下方の高台端部に切り込みを施す。	体部外面は弱い篦削り。透しは外方より内方に透った後に上方にあげながらぬいたものと思われる。	J区　残¼	Ⅲ－1期
	132	高台径　8.7	算盤玉状の体部。ハの字型に開く高台。	胴部外面下方は篦削り。	T17　残⅕	Ⅲ－2期
須恵器	133		やや肩の張る体部。	（133）胴部外面は篦削	133　拡張区　残½	〃

平瓶	177			り、底部外面は非常にツルツルしている。（177）外面は平行叩き後カキ目を、内心は同心円の叩き。	177　拡張区	
須恵器高杯	134		無蓋高杯で、脚部はラッパ状に開く。	内外面ロクロナデ。	134　Ⅰ区　脚部完存	Ⅱ－1期
	167				167　拡張区	
	173				173　Ⅰ区　脚部完存	
須恵器鉢	135	口径　24.6 器高　14.0 高台径17.3	半楕円状の体部に、細くて長い高台部がつく。	胴部外面下半より底部にかけて篦削り。	H区　残⅓	Ⅲ－2期
須恵器無頸壷	136	口径　12.2	口縁部は内傾し、口縁端部は浅く凹んでいる。	外面中程より下方に粗い篦削り。	拡張区　残¼	Ⅳ－3期
須恵器⑦脚付盤	137	口径　19.4 器高　6.7 脚台径　9.0	大きく深い盤に、小さな脚台がつく。	（137）の杯底部外面は篦削り。	137　H区　坏部¼ 脚台部½	Ⅲ－1期
	138	脚台径　9.3			138　拡張区　残¾	〃
須恵器皿	139	口径　14.8 器高　1.9	外傾して立ち上る口縁部。	底部外面は不調整。	拡張区　ほぼ完形	Ⅳ－2期
須恵器壷	170		胴部は内弯し、底部は平底ぎみである。	胴部外面は篦削り。 底部の器壁は厚い。	T17	
	172		底部（172）と口頸部（174）。	（172）は胴部外面に粗い篦削り。	172　拡張区	
	174				174　拡張区	
須恵器鉢	168		体部は直線的に外方に立ち上り、口縁端部は外に面をもつ。	体部下方は粗い篦削り。	拡張区	Ⅳ－2期
須恵器	171		口縁部と思われるが、あるいは脚部の裾になるかもしれない。	内外面ロクロナデ。	拡張区	
常滑大平鉢	186		ほぼ長方形の高台がつく。	胴部外面に粗い篦削り。	186　H区	中　世
	188				188　D区	〃
	189				189　D区	〃
常滑甕	187		口縁部が外傾するもの（187）と垂下するもの（190）がある。	（193）の胴部には叩きが残る。	187　E区	〃
	190				190　T16	〃
	193				193　E区	〃
信楽大平鉢	192		口縁端部が外面肥厚する。	内外面ロクロナデ。	T16	〃
青磁碗	191			外面に連弁が入る。	H区	〃

（高田宏司）

Ⅱ．長浜市金剛寺遺跡

1．はじめに

阿弥陀如来立像
（阿弥陀寺）

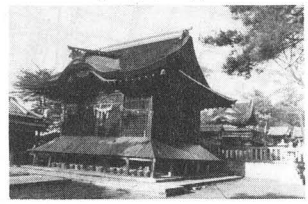
本報告は、県営ほ場整備事業神田地区加田西第２工区にともなう金剛寺遺跡の昭和61年度における発掘調査の成果を収めたものである。

金剛寺遺跡は長浜市加田町に所在する。遺跡は加田集落の西側に広がる水田に位置する。

金剛寺遺跡の名称は、天平宝寺６年（762年）に大和大安寺の僧安澄により創建され、大治４年（1129年）に再興された金剛寺という寺に由来する。しかし、その所在は、遺跡の付近に存在するとみられるが、建てられたとされる正確な位置は、明らかでない。

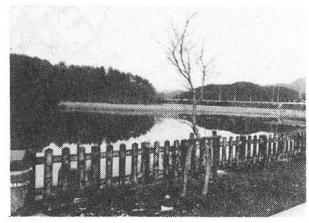
今回のほ場整備事業では、切土工事により２箇所の塚（鏡山、撞木山）が削平され、さらに排水路敷設予定線が、遺跡内を縦横に貫くなど、工事により影響をうける地点について、事前に発掘調査を実施することにした。

昭和61年４月15日から９月24日まで、現地調査をおこない、ひきつづき整理調査を実施した。



小坂神社（大正9年6月建立）

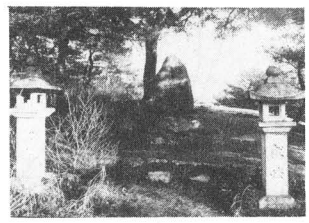
2．位置と環境



神 田 溜 池

金剛寺遺跡は、長浜市加田町に所在する。遺跡は、伊吹山脈から流れ出す姉川により形成された沖積平野上に立地する。

加田町には、中々山、平塚、亀岡など新世代第四紀洪積世（200万年前）以前に形成された小丘陵群が存在し、隣接する田村町には、同じ小丘陵である田村山があり、加田町の東には、山東町との境界に横たわる横山丘陵がある。



豊島作右衛門石碑
（亀岡山上、明治35年建立）

加田町は、姉川扇状地の扇端の南縁辺部①にあたり、加田の集落は東の田村、北東の大戌亥、南の近江町長沢、宇加野の集落に比べて、標高は高く、約95.00ｍを測る。このため、姉川の分流も加田の約1.5㎞北東の永久寺集落から湖岸の下坂浜をむすぶ小河川以南には存在しない。

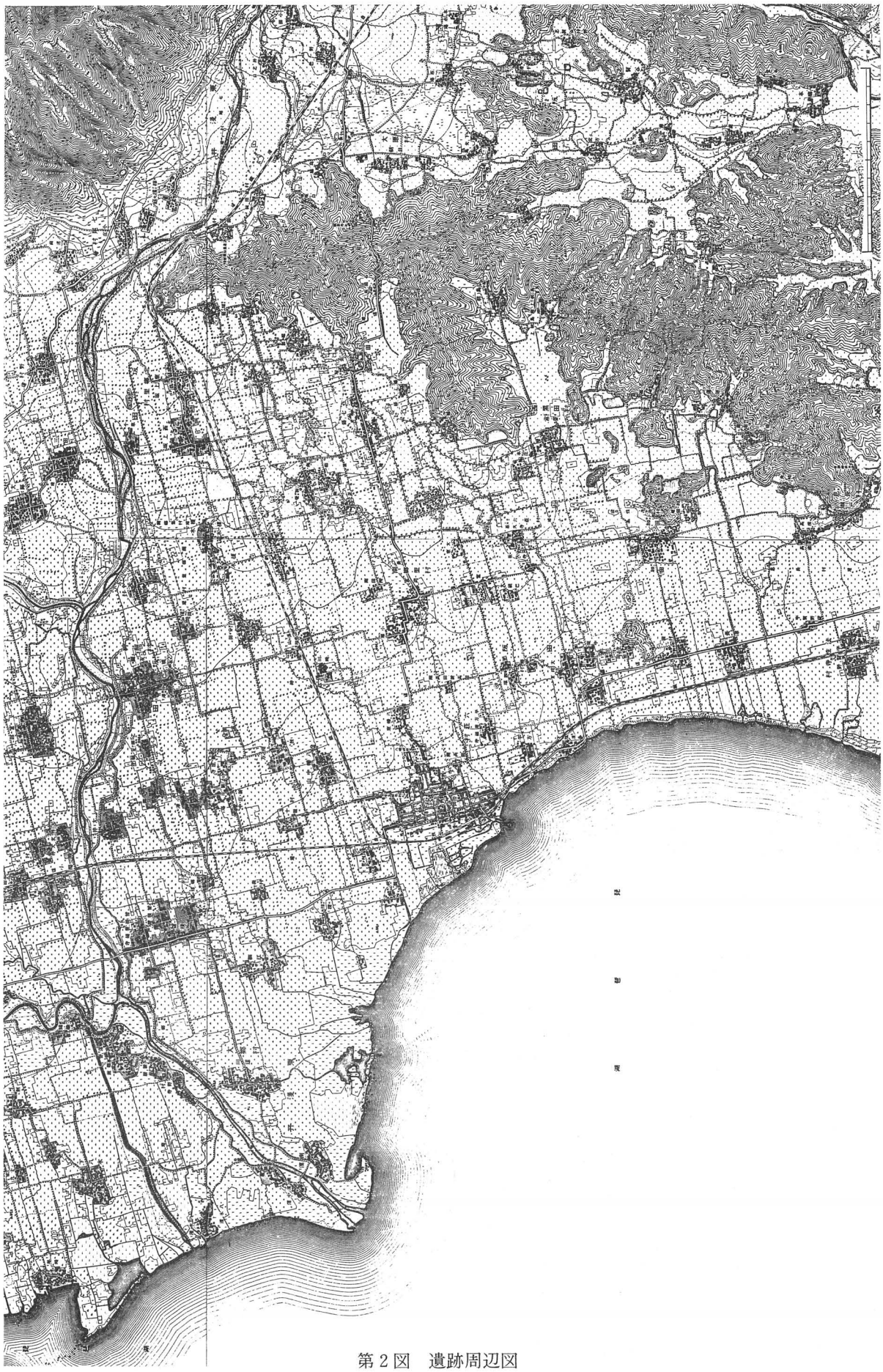
小丘陵群の南側の裾から、南の沖積地にかけて広がる金剛寺遺跡の本年度調査区においては、弥生時代の溝であるＳＤ001、ＳＤ002、遺物を含まない溝、と合せて３本の河川を検出したが、いずれも短い期間存在しただけのものと思われ、遺物を含まない溝（第３トレンチ中央部検出、埋土は砂礫層である）は、洪水等の一時の増水時に形成されたと思われる。

以上のような地理的条件から、加田町の水利は悪く、近世文書等によると、江戸時代においては、永久寺の村（姉川の分流沿にあり、地下水も豊富に涌く）から、用水路を引いて、水を分けてもらっていた。しかし、かんばつ時には、加田の水田では深刻な水不足が生じたようである。

中世以前においても、水利の点では周辺に比して、悪かったであろうと思われる。そのため、加田付近では大規模な集落遺跡は検出されていない。

（長浜市） 1 下ノ郷東遺跡　2 小沢城跡　3 真源寺遺跡　4 相撲東遺跡　5 十里町遺跡　6 塚田遺跡　7 新庄馬場遺跡　8 神照寺坊遺跡　9 泉町西遺跡　10 妙覚寺遺跡　11 地蔵遺跡　12 口分田北遺跡　13 野瀬最跡　14 国友遺跡　15 森前遺跡　16 梅塚古墳群　17 榎木百坊遺跡　18 松塚古墳群　19 加納遺跡　20 越前塚遺跡　21 大塚遺跡　22 神戸遺跡　23 大月遺跡　24 乗台寺遺跡　25 上坂城跡　26 正蓮寺遺跡　27 墓立遺跡　28 一丁田遺跡　29 地蔵堂遺跡　30 北船町遺跡　31 南呉服町遺跡　32 本覚寺遺跡　33 徳蔵坊遺跡　34 高田遺跡　35 妙覚院遺跡　36 新放生寺遺跡　37 八幡東遺跡　38 川崎遺跡　39 山階遺跡　40 川崎南遺跡　41 鳥居立遺跡　42 長浜北高遺跡　43 阿弥陀遺跡　44 小堀遺跡　45 寺元遺跡　46 正信寺遺跡　47 宮司東遺跡　48 八田切遺跡　49 石仏遺跡　50 西通寺遺跡　51 一乗寺遺跡　52 常昌寺遺跡　53 丸岡塚遺跡　54 仏厳寺遺跡　55 寺ケ谷遺跡　56 八反田遺跡　57 中町田遺跡　58 十禅寺遺跡　59 極楽寺遺跡　60 無量光寺遺跡　61 宮川陣屋遺跡　62 宮司遺跡　63 室遺跡　64 大東北遺跡　65 大東遺跡　66 大辰巳遺跡　67 円明寺遺跡　68 柳町遺跡　69 矢正寺遺跡　70 南高田遺跡　71 東高田遺跡　72 地福寺遺跡　73 福満寺遺跡　74 経田寺遺跡　75 大戌亥遺跡　76 鴨田遺跡　77 永久寺遺跡　78 東光寺遺跡　79 西徳寺遺跡　80 長因寺遺跡　81 正光寺遺跡　82 永保町遺跡　83 豊公園湖岸遺跡　84 平方湖岸遺跡　85 神宮寺遺跡　86 柿町遺跡　87 下坂湖岸遺跡　88 塚町遺跡　89 下坂城遺跡　90 高橋遺跡　91 寺田遺跡　92 安導寺遺跡　93 金光寺遺跡　94 多田幸寺遺跡　95 田村遺跡　96 前川遺跡　97 前五反田遺跡　98 金剛寺遺跡　99 大堂郷遺跡　100 福林寺遺跡　101 七殿屋敷遺跡　102 阿弥陀寺遺跡　103 明厳遺跡　104 法華寺遺跡　105 綾堂遺跡　106 青蓮坊遺跡　107 本庄遺跡　108 常喜城跡　109 東屋敷遺跡　110 熊岡北遺跡　111 熊岡山遺跡　112 熊岡社遺跡　113 熊岡山西遺跡　114 森ノ木古墳群　115 四面山遺跡　116 湯田遺跡　117 釈迦堂遺跡　118 権山遺跡　119 富施寺遺跡　120 布勢東遺跡　121 天神遺跡　122 中山古墳群
（近江町） 123 長沢城跡　124 福田寺遺跡　125 長沢関跡　126 長沢遺跡　127 西火打遺跡
（浅井町） 128 湯次神社遺跡　129 荘厳寺遺跡　130 三田遺跡　　**（虎姫町）** 131 宮部遺跡

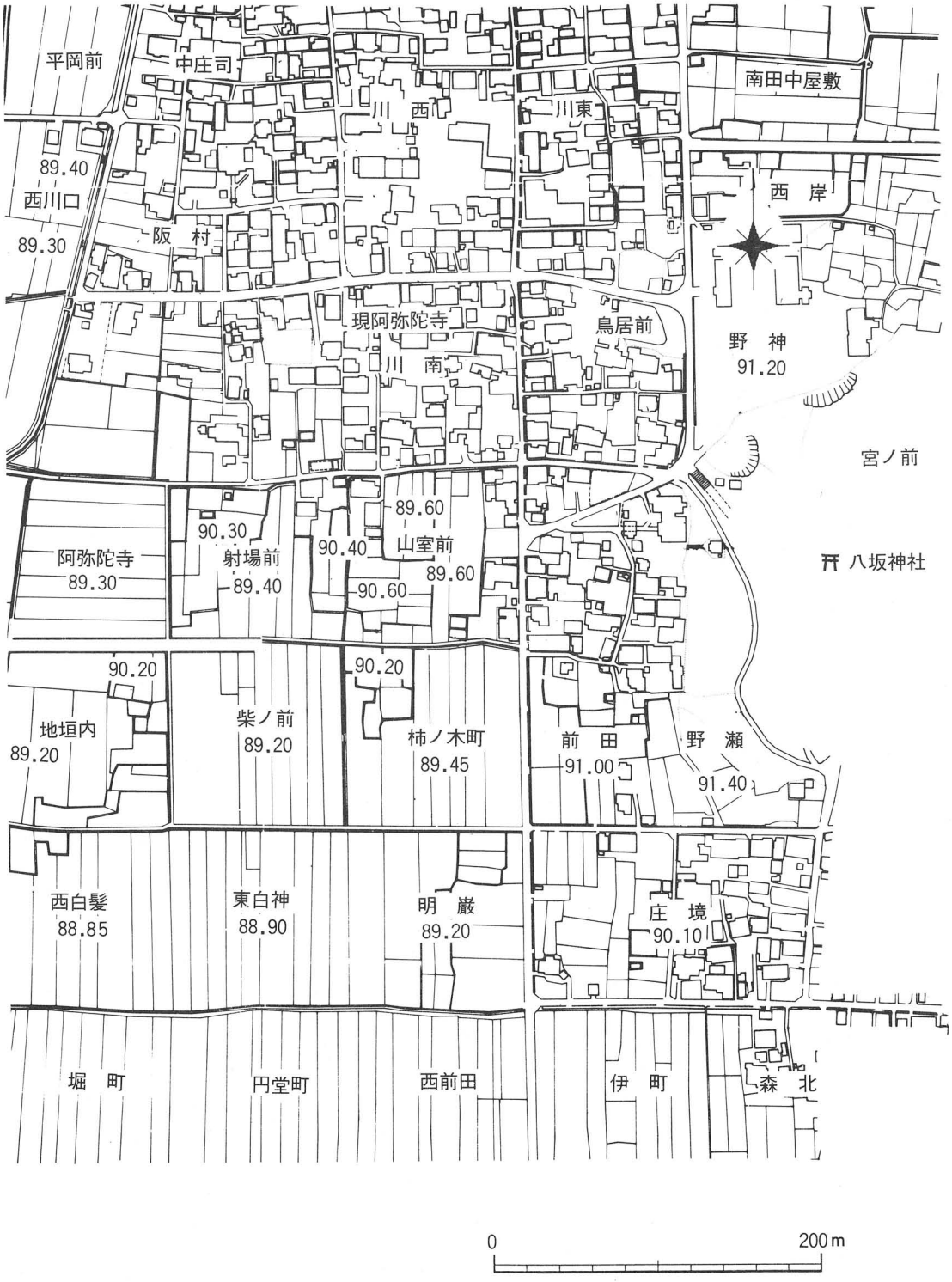
第１図　周辺遺跡分布図

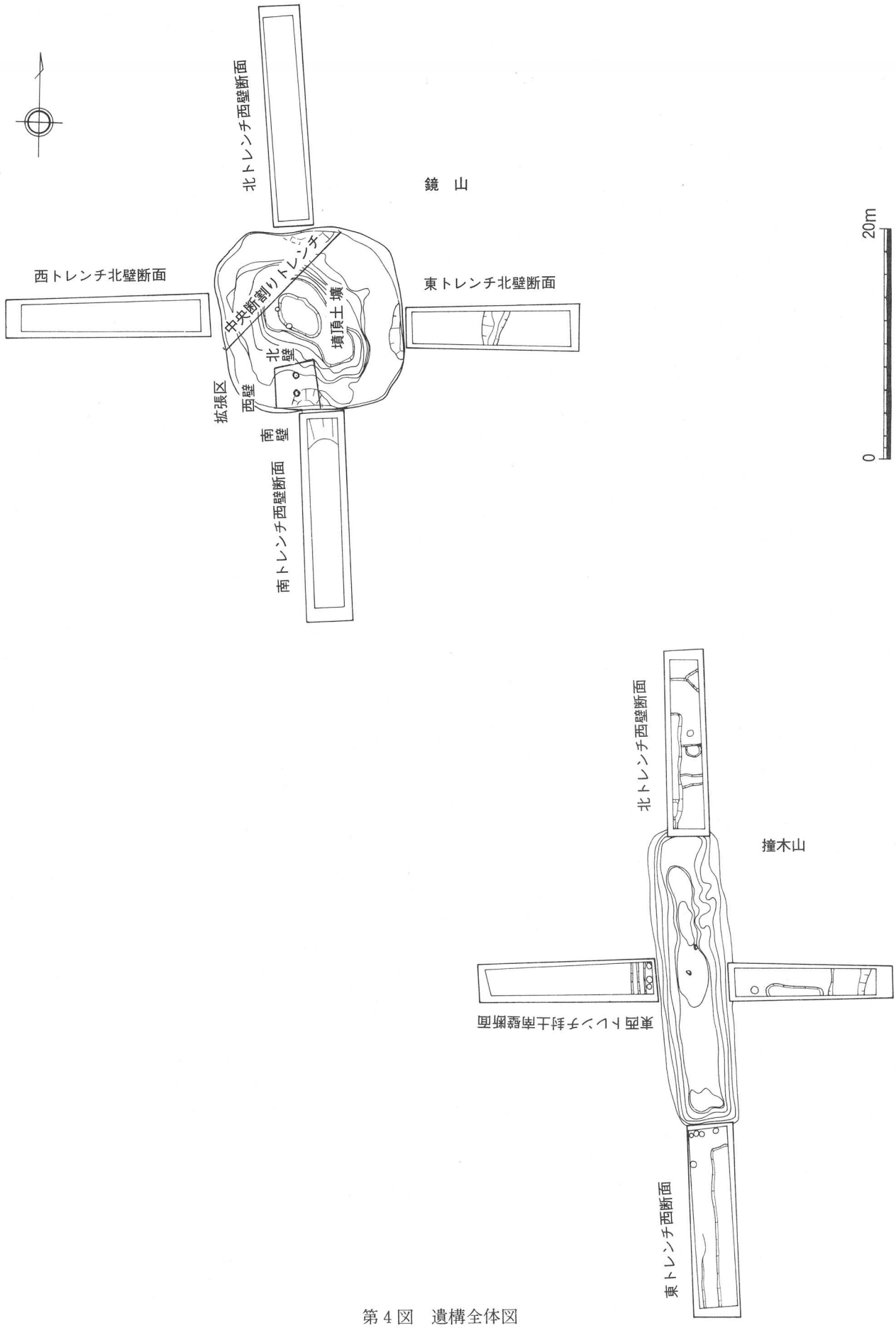


第２図　遺跡周辺図

乙　丸
西二丁目
中二丁目
東二丁目
南瀬町
登り田
北上ノ堂
北室町
88.00
88.40
稲　葉 88.70
上必入
88.80
第２トレンチ
堂ノ内
鏡山
撞木山
89.20
福　山 90.40
90.20
89.25
上ノ堂
南室町
88.40
南稲葉
88.40
下必入
88.60
堂ノ前
88.80
西禅坊
89.00
東禅坊
89.20
川オサ
持　岡
88.05
第1トレンチ
五良堂
88.40
橋　本
88.50
平　等
88.85
89.00
三反田
89.10
89.63
上　森
大入道
87.85
中喰町
88.05
寺　町
88.50
西小垣内
88.80
東小垣内
88.80
木ノ根町
88.50　88.70
大目町

第３図　遺跡位置図


平岡前
中庄司
川 西
川東
南田中屋敷
89.40
西川口
89.30
阪 村
西 岸
現阿弥陀寺
川 南
鳥居前
野 神
91.20
宮ノ前
89.60
90.30
90.40
山室前
89.60
90.60
阿弥陀寺
89.30
射場前
89.40
八坂神社
90.20
90.20
地垣内
89.20
柴ノ前
89.20
柿ノ木町
89.45
前 田
91.00
野 瀬
91.40
西白髪
88.85
東白神
88.90
明 巌
89.20
庄 境
90.10
堀 町
円堂町
西前田
伊 町
森 北
0
200m


北トレンチ西壁断面
鏡　山
西トレンチ北壁断面
東トレンチ北壁断面
中央断割りトレンチ
墳頂土壙
北壁
拡張区
西壁
南壁
南トレンチ西壁断面
20m
0
北トレンチ西壁断面
撞木山
東西トレンチ封土南壁断面
東トレンチ西断面

第4図　遺構全体図

坂田郡において、条里の大がかりな再構成がおこなわれる平安後期（10、11世紀）においては、加田の地でも条里区割がおこなわれている。平安時代後期には、旧来、田畠等に利用されていなかった山野、狭い渓谷などが、開墾され、耕地が全国的に拡大しており、坂田郡の条里の再構成時には、水利の悪い加田にも条里田畑が生まれたのである。

17世紀の初頭（慶長年間）、水不足の解消のため、加田の領主豊島作右衛門[③]は、加田の集落の東の亀岡、松岡の２つの丘陵の谷間に神田溜池を造り、それにより、加田二十町歩の田を養われたという。しかし、それによっても、水不足が完全に解消しなかったことは、前述の永久寺からの導水を見ても明らかである。

加田に残る寺は、鎌倉時代に創建の起源をもつものと、室町時代に起源を持つものがある。

鎌倉時代創建のものは興善寺、得法寺、妙立寺、阿弥陀寺などで、室町時代のものは安明寺、雲西寺、薫徳寺、心縁寺があげられる。

得法寺は、創建時は天台宗であったが、室町時代に浄土真宗に改宗している。妙立寺も創建時は天台宗であったが、鎌倉後期に日蓮宗に改宗しており、日蓮宗に改宗したころ、加田の鎮守である八坂神社の神宮寺になったとされている。

加田の、小字名には寺に関係のある名称が多い。以下あげてみると、「阿弥陀寺、寺町、堂の前、西禅坊、東禅師堂、古堂、皆別当、寺田、仏堂、焔魔堂」などである。

阿弥陀寺については、小字「堂の内」に所在する塚（鏡山）が、阿弥陀寺の鐘楼の跡と伝えられ、小字「堂の内、阿弥陀寺」を中心に大規模な伽藍を有していたと伝えられる。

この阿弥陀寺の系譜を引く現阿弥陀寺（天台宗）は少し離れた加田の集落内に所在し、小堂を一宇残すのみである。本尊は、寄木造の阿弥陀如来立像で、その製作技法から、鎌倉時代（14世紀）のものと考えられている。

加田には、長浜より息長村岩脇に通ずる街道（北国街道の脇街道）があり、そこに一里塚が設置されたとの伝承があるが、はっきりとした位置は特定できない。

3．遺　構

(1) 鏡　山

堂の内という小字を有する一町方画の水田内には、地元で鏡山（かがみやま）、撞木山（しゅもくやま）と呼んでいる２箇所の小墳丘がある。

鏡山の方は、現水田面から約70㎝の高さを持ち、主軸が東北方向を向く楕円形で、現水田面に接する基底部で測ると、長軸約5.5ｍ、短軸約3.0ｍである。鏡山造築時の旧地表面は現水田面より約50㎝の深さにあり、鏡山の墳丘の裾も現水田下にもぐり込んでいる。

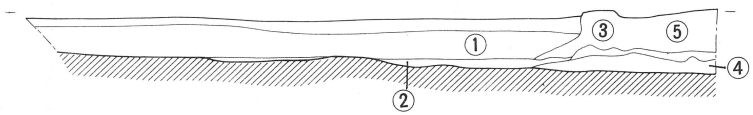
以上のことから鏡山の造築時の高さは1.2ｍ程度あったと思われる。

鏡山の封土は、下層（にぶい橙色砂質土）と上層（灰色砂礫層）の２層に分かれる。両層とも締まりは悪く、特に下層はサクサクしており、築造時によくつき固めながら盛上げたという状態とはいえない。

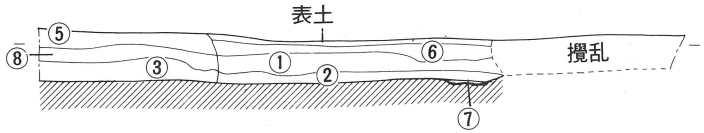
上層からは、白瓷系陶器椀（山茶椀）６個体、白瓷系陶器皿１個体が出土している。

墳丘の南部の、現水田下の旧地表面上から土師質皿51枚が直径１ｍ程の範囲内に集中して置かれた状態で出土した。墳丘の土層断面より観察すると、土師質皿は旧地表面に直接置いて、その上に封土をかぶせたことが確認された。（拡張区部分）

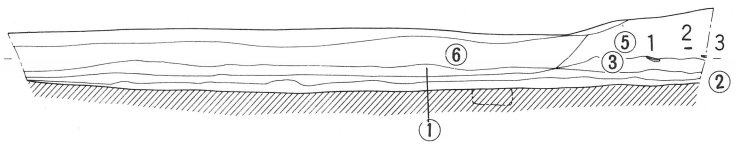
鏡塚西トレンチ北壁断面



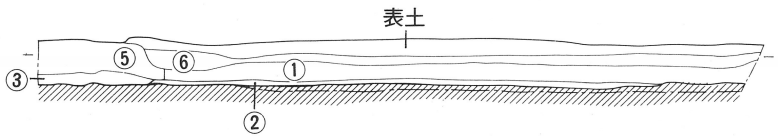
鏡塚東トレンチ北壁断面



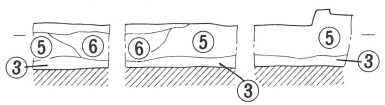
鏡塚南トレンチ西壁断面



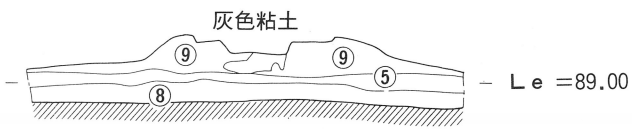
鏡塚北トレンチ西壁断面



鏡塚拡張区断面



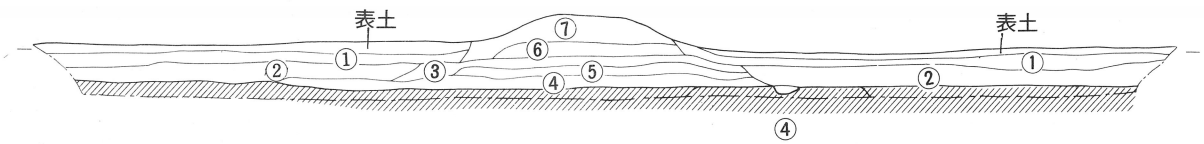
鏡塚中央断割りトレンチ断面（南東より



鏡塚封土、土質及び土色

① 青灰色粘土（稠密でない）
② 暗灰色粘土（やや褐色がかる）
③ 茶灰色砂質土
④ 暗灰色粘土（木質含む）
⑤ にぶい橙色砂質土（サクサクしている）
⑥ 青灰色粘質土（やや稠密である）
⑦ ⑤よりやや灰味がかる。
⑧ ⑤よりやや薄い。
⑨ 灰色砂礫層

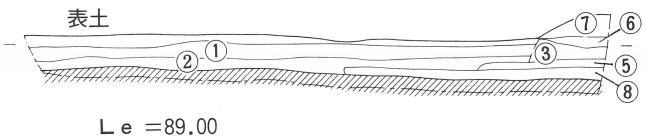
撞木塚東西トレンチ封土断割り断面



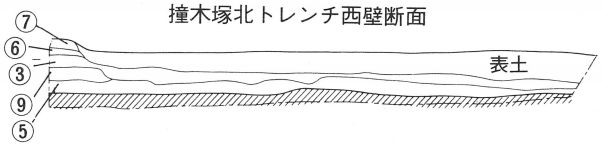
撞木塚封土、土質及び土色

① 青灰色粘土
② 淡青灰色粘土（稠密でない）
③ 淡茶灰色粘土
④ 橙色粘土（締りよく固い）
⑤ 褐色粘土（締りよく固い）
⑥ にぶい黄灰色砂質土（非常に固い）
⑦ にぶい橙色粘質土（パサパサしている）

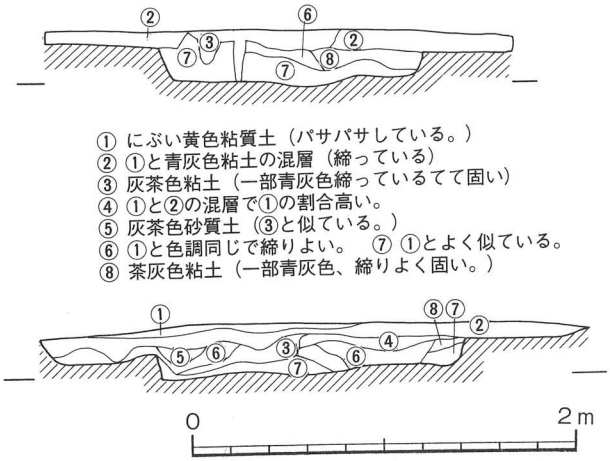
撞木塚南トレンチ西壁断面



撞木塚北トレンチ西壁断面



第５図　土層断面図



第6図　鏡塚墳頂土壙埋土断面

墳頂部の土壙は、地元の人の話によると、数年前まで柿の木が立っていたようで、その根の跡であると考えられる。

(2) 撞木山

撞木山、鏡山の南西約24ｍのところに所在する。現地表上に現われた部分は、長辺12.5ｍ、短辺3.3ｍの長方形で、高さは約0.5ｍである。

しかし、鏡山と同様、現水田下に裾部が約60㎝もぐり込んでおり、築造時は旧地表面から約1.1ｍの高さを有していたと思われる。

撞木山の封土のうち、最上部のにぶい橙色粘質土は締りが悪くパサパサしている。第２層目のにぶい黄灰色砂質土は、かなりよくつき固められたらしく、非常に締りがよい。第３層、第４層も第２層ほどではないが、よく固められて、締りもよい。

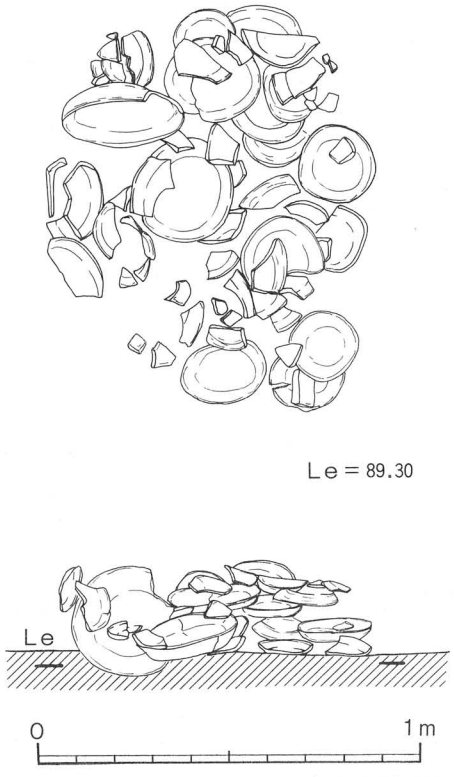
また下層部にいくにつれて、封土上面の幅が広がっており、最下層においては幅12.5ｍを測る。

出土遺物は、鏡山に比べて少なく、また細片が多い。注目されるものとしては、第２層（黄灰色砂質土）から、大きな玉縁を有する白磁椀が出土している。

(3) 小　結

鏡山の封土は、つき固めながら築造したようにはみえず、一気に土を盛上げて築造したものであろう。

封土から出土した白瓷系陶器[4]椀（山茶椀）と白瓷系陶器皿の年代については、ほとんどが底部のみの残片であるため明確に年代決定をしがたいが、12世紀末の生産窯出土陶片に類似している。

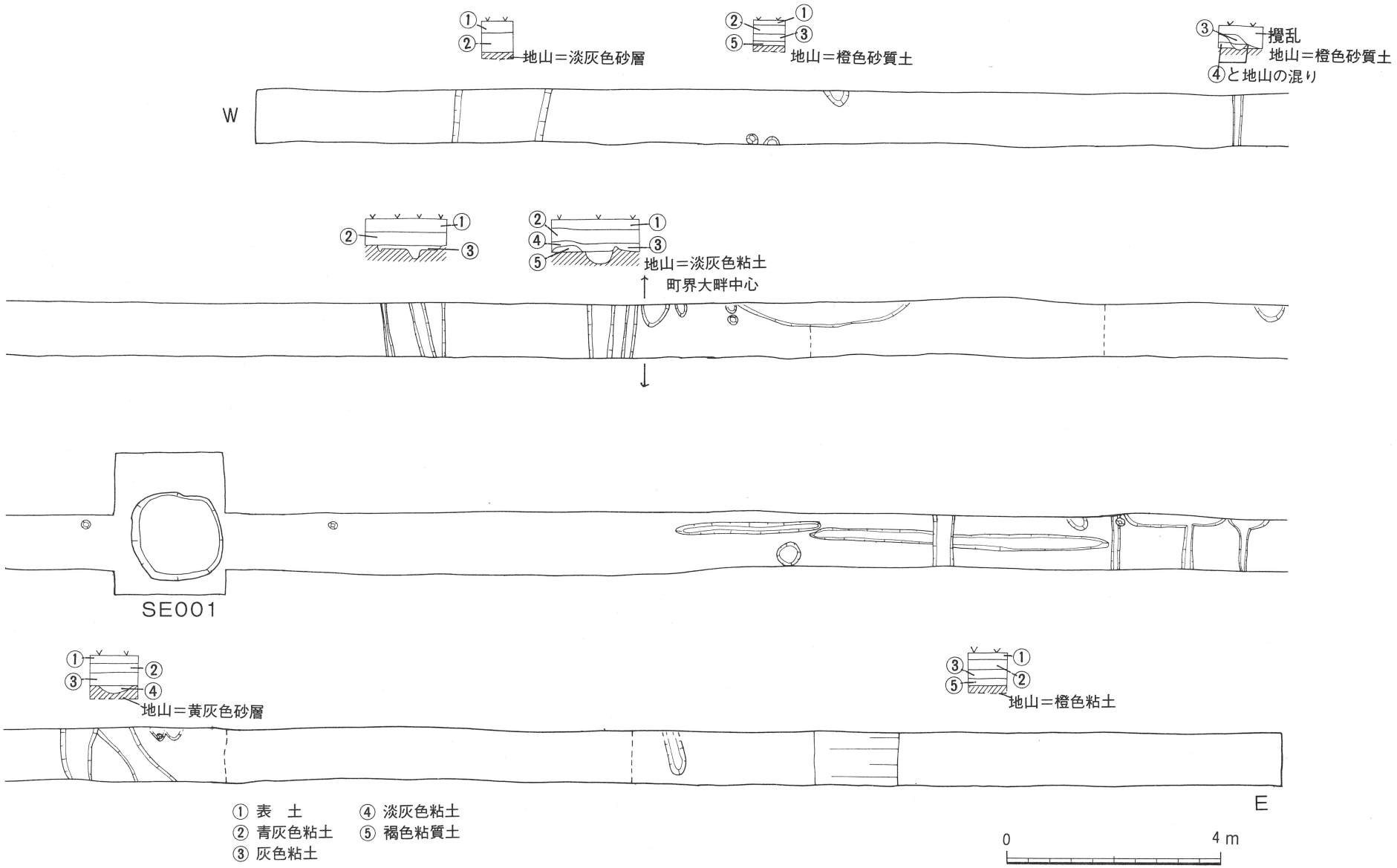


第7図　鏡塚基底部土師器皿出土状況（拡張区）

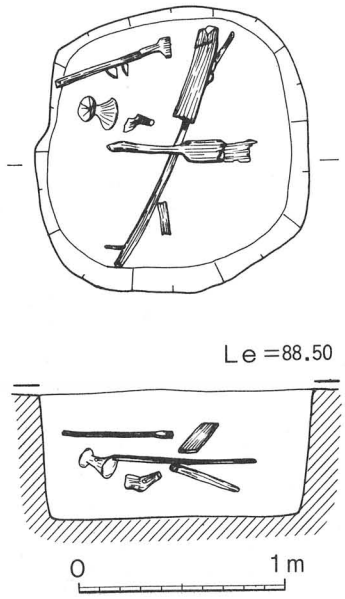
基底部から一括して出土した、土師質皿は墳丘築造前に、墳丘の立地面である旧地表面に敷並べられており、その上に封土を盛って墳丘を築造している。土師質皿の封土下への埋納については、塚を築くさいの祭祀行為と思われる。

土師質皿のうち大半は、口径が10㎝内外、器高は1.5㎝程度のもので、口径が15㎝を越えるものは２点だけである。土師質皿は口縁内外面がヨコナデ調整され、他は未調整である。これらの土師器の年代は12世紀末[5]と思われる。

撞木山は鏡山と違い、封土を版築状につきかためながら築造している。遺物は少なく実測可能なものとしては、白磁椀１点のみである。これは、12世紀後半から13世紀[6]中葉のものである。



第８図　遺構全体図（第２トレンチ）



第９図　ＳＥ001遺物実測図

以上のことから、この２つの塚は、12世紀末頃あいついで築成されたことが分かる。

(4)　排水路敷設線に設けたトレンチ

第１トレンチ、第３トレンチ、第４トレンチ、第５トレンチについては、第３トレンチにおいて、遺物を含まない自然河川跡を検出した外は、遺物包含層も遺構も検出できなかった。

本報告においては、遺構の確認された第２トレンチ、第６トレンチ、第７トレンチの遺構、遺物について述べてみたい。

第２トレンチ

第２トレンチは、鏡山、撞木山の所在する小字「堂の内」から西隣の「上必入」にかけて、現況条里の一町方画の北辺部に設けられており、幅約１ｍ、長さ約91ｍを測る。遺構面は地表面下50～60㎝の地点に広がっている。

遺構は、耕作時のスキ痕、シケヌキの跡などと共に、現況の条里町界大畔の西側に隣接して、旧来の町界を区画したと思われる溝と畔が検出されている。

ＳＥ001は、トレンチのほぼ中央部にある井戸跡である。開口部は、ややひずんだ円型を呈し、直径は1.4ｍ程度である。壁面は垂直に近い角度で掘込まれており、深さは60㎝を測る。埋土は灰色シルト一層である。基底部からの涌水は著しく、地山は灰色砂礫土である。

ＳＥ001は、浅い井戸であるが数多くの種類の遺物が出土している。以下述べてみると木器では、木製グワ（２本）、高床倉庫で用いる階段（１段のみ残存）、土器では、弥生土器（甕、壺、鉢、器台、高杯）、石器では砥石、投弾（つぶて）が出土している。

第６トレンチ

第６トレンチは、小字「東中々」の条里の一町方画の北辺部に沿って廻っており、幅約1ｍ、長さ約150ｍを測る。溝跡（ＳＤ001）を検出部分については幅を２ｍに広げて拡張区としている。

トレンチの北部（中々山の南裾を廻っている部分）では、地表下約50～60㎝の遺構面でシケヌキ、土壙、ピットなどを検出しているが、各遺構から遺物は出土していない。しかし、トレンチ北部には、遺構面直上に薄い遺物包含層があり、奈良時代の須恵器杯身、土師器甕、古墳時代の須恵器杯蓋が出土している。

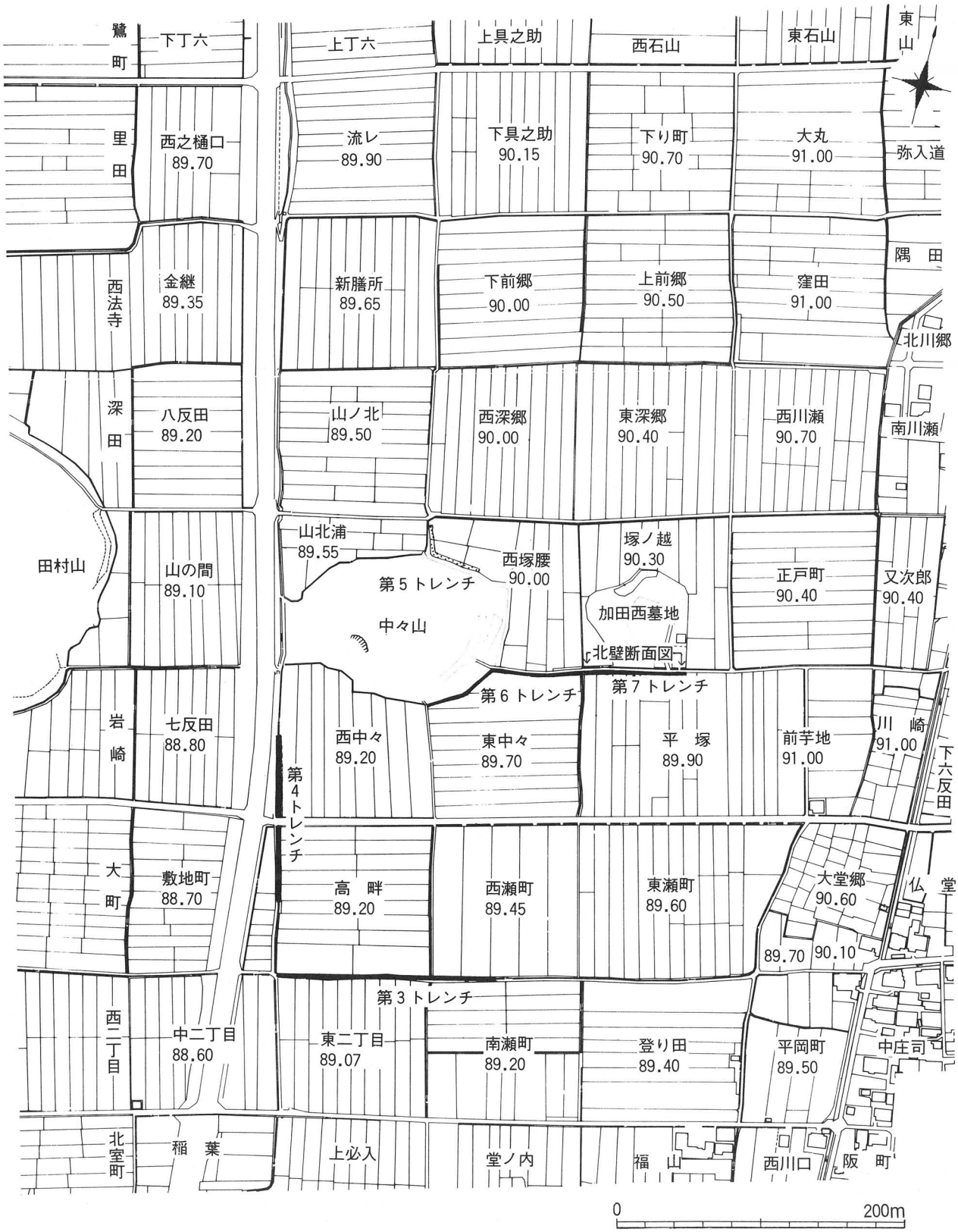
溝ＳＤ001については、調査区が狭いせいもあり全容がはっきりしないが遺構面は南方向へ傾斜しており全面的に遺物が分布している。特に遺物が多いのは、西半部で、土器溜りが10箇所程みられる。このことから、ＳＤ001は、第６トレンチ拡張区を東北東方向から西南西方向へ横ぎっており、その岸に土器が堆積していたと考えられる。

出土遺物は、弥生土器（壺、甕、高杯、鉢など）が多量に出土している。

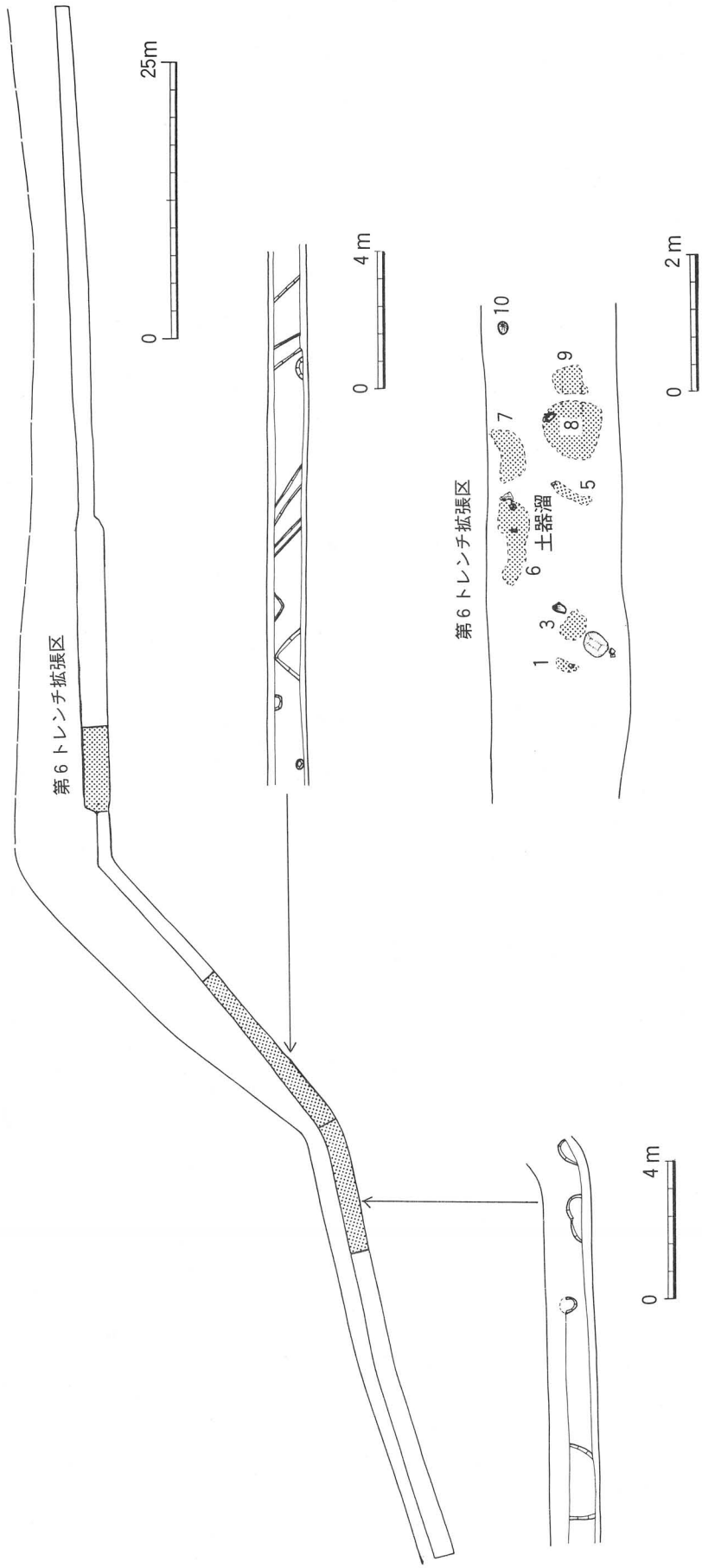
第７トレンチ

第７トレンチは、第６トレンチの東の延長上に位置する幅約２ｍ、長さ約75ｍのトレンチで小字（平塚前）の南辺に沿って設けられている。

トレンチの北に隣接する高さ５ｍ程の頂部の平担な小丘陵が（平塚）で、加田西地区の墓地として、江戸時代から埋葬がつづいている。


鷺町
下丁六
上丁六
上具之助
西石山
東石山
東山
里田
西之樋口
89.70
流レ
89.90
下具之助
90.15
下り町
90.70
大丸
91.00
弥入道
西法寺
金継
89.35
新膳所
89.65
下前郷
90.00
上前郷
90.50
窪田
91.00
隅田
北川郷
深田
八反田
89.20
山ノ北
89.50
西深郷
90.00
東深郷
90.40
西川瀬
90.70
南川瀬
山北浦
89.55
塚ノ越
90.30
田村山
山の間
89.10
西塚腰
90.00
第5トレンチ
中々山
加田西墓地
北壁断面図
正戸町
90.40
又次郎
90.40
第6トレンチ
第7トレンチ
岩崎
七反田
88.80
西中々
89.20
東中々
89.70
平塚
89.90
前芋地
91.00
川崎
91.00
下六反田
第4トレンチ
大町
敷地町
88.70
高畔
89.20
西瀬町
89.45
東瀬町
89.60
大堂郷
90.60
仏堂
89.70
90.10
第3トレンチ
西二丁目
中二丁目
88.60
東二丁目
89.07
南瀬町
89.20
登り田
89.40
平岡町
89.50
中庄司
北室町
稲葉
上必入
堂ノ内
福山
西川口
阪町
0
200m

第10図　遺跡位置図



第11図　遺跡全体図（第６トレンチ）

第７トレンチの遺構面は、地表下約50㎝の地点に広がっている。

遺構は、畔痕、シケヌキ痕とともに、弥生土器が出土する溝ＳＤ002が検出された。しかしＳＤ002の全容は、ＳＤ001同様はっきりしないため、壁面の断面図をもとにしてＳＤ002の規模を明らかにしたい。

北壁断面においては、トレンチ西端から東へ18ｍの地点において溝の東の肩がみられる。溝底は、西端で標高89.07ｍ、東の肩では、89.40ｍであり、西から東へダラダラとのぼり勾配をとる。

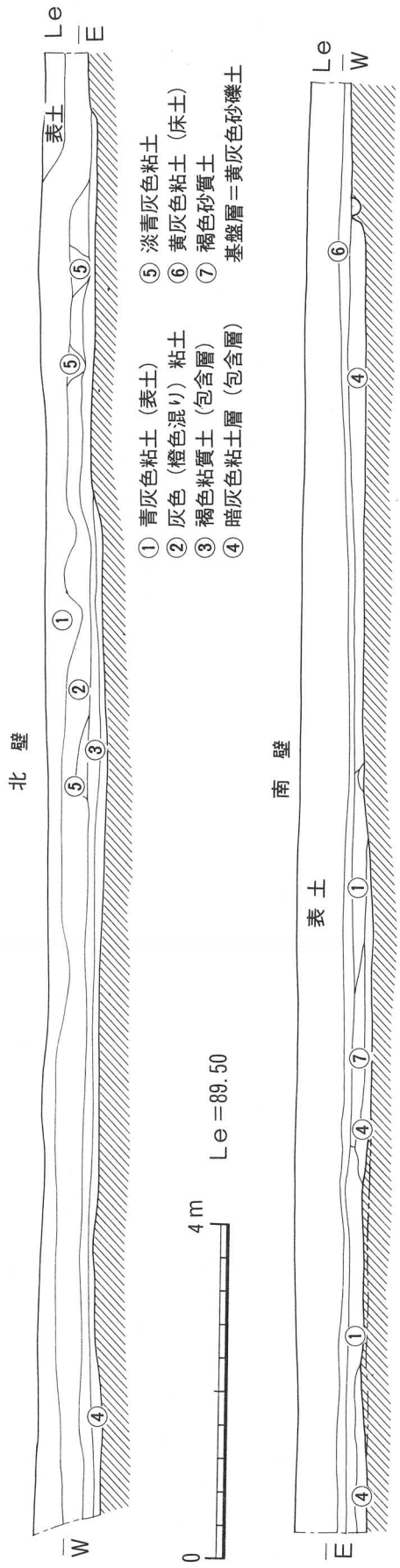
南壁においては、西端から東へ1.6ｍの地点で西の肩が現われている。

このことから、ＳＤ002は、西北方向から南東方向へ流れる溝であることが分かる。

出土遺物は、弥生土器（壺、甕、器台、高杯など）が、ＳＤ002全般から多量に出土するが、特に西端付近から集中的に出土している。

(5)　トレンチ小結

ＳＤ001とＳＤ002については、幅２ｍの細長いトレンチで検出したため、遺構の全容や流水の方向を十分



第12図　第７トレンチ河川土層断面図

把握することができなかった。

出土遺物については、ＳＥ001出土のものは、土器、木器、石器とも残りがよく、土器の調整もよく分かるが、ＳＤ001、ＳＤ002出土土器は全体に磨耗著しく、調整のわかりにくいものが多い。これは、ＳＤ001、ＳＤ002出土遺物が上流から流れ下って来たものが多いからである。

遺物のくわしい観察は「遺物観察表」にゆずり、遺構出土遺物については、主要なものをピックアップして述べてみたい。

ＳＥ001

図版20-1（以下20-1と略）は、尾張系⑦Ｓ字状口縁甕の中で最も古いタイプのものである。

他の甕（20-2、3、4）のうち（20-2、3）は口縁が「く」の字状に外反するもので（20-3）は外面が、叩き目と刷毛目。（20-4）は外面すべて叩き目が残る。

鉢類（20-9、10、11）はいずれも口縁端部が、外方に鈍い稜を残し、直立する形態のものである。

これら土器の年代は、上述の特徴から、弥生第Ⅴ様式でも最も新しいもので庄内式土器の直前⑧に位置するものである。

木器のうち、木製ワクは２例とも身部の上面に段をつけ、土がすくいやすいようにしている。

木製ハシゴは一段だけの出土であるが、階の部分に固く、使いべりしにくい「フシ」の部分をあてるなど、工夫がこらされている。

ＳＤ001

ＳＤ001の遺物については（22-42）のパレス壺⑨の出土が目を引く、口縁内面と体部外面に赤彩されており、浅井和宏氏⑩の分類によるＣ類にあたる。Ｃ類は、東海地方西部では、欠山期の土器に併行して現れる。

長頸壺22-41は、第Ⅴ様式の最も新しい段階に見られるものである。

ＳＤ002

器台、高杯、鉢類が多くＳＥ001、ＳＤ002にあった「く」の字状口縁の甕が見られない。

鉢は、口縁端部外面と肩部外面に列点文を有するものであり、同じ弥生Ⅴ様式の範疇の中で、ＳＥ001やＳＤ001の土器より、やや時代の朔るものであると考えられる。

4．おわりに

金剛寺遺跡においては、２時期の遺構が確認された。

弥生時代遺構については、生活用具が多く出土したＳＥ001の周辺に住居跡のある可能性もあるが、今回は確認されなかった。

ＳＤ001、ＳＤ002出土遺物は、出土状況から考えて、上流である大辰己、鴨田遺跡方面から流れ下って来たもので、溝の存在期間は、出土遺物が弥生Ｖ様式最末期に限定されることから、短期間であったと思われる。

塚については、10～11世紀の坂田郡条里の再構成を含めて、古代末期の山野開墾の波が加田の地に及ぶ中で築成されたものと思われる。

長浜平野には数多くの塚（小墳丘）が実在しているが、それらの年代を把握することは、古代、中世の宗教、経済史を研究するうえで重要なポイントとなろう。

註

① 『国道８号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会　1973）

② 角上寿行、田中勝弘『県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ　―長浜市金剛寺遺跡―』（滋賀県教育委員会　財団法人滋賀県文化財保護協会　1984）

③ 青木吉蔵『神田古文化史』（長浜古文化協会　1953）

④ 田口昭二『美濃窯における白瓷と山茶椀』（美濃陶磁歴史館報Ⅱ　1983）

⑤ 横田洋三『平安京左京四条三坊十三町―長刀鉾町遺跡―』（平安京跡研究調査報告第11輯　財団法人古代学協会　1984）

⑥ 横田賢次郎、森田勉『大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―』（九州歴史資料館　研究論集４　1978．４）

⑦ 赤塚次郎「Ｓ字甕について」（『欠山式土器とその前後』第３回東海埋蔵文化財研究会資料　1986）

⑧ 用田政晴、奈良俊哉、吉田秀則『県営かんがい排水事業関連遺跡調査報告書Ⅱ－３、―長浜市大辰己遺跡―』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　1985）

⑨ 浅井和宏「パレス壺について」（『欠山式土器とその前後』第３回東海埋蔵文化財研究会資料　1986）

⑩ ⑨に同じ

第１表　金剛寺遺跡出土土器観察表

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
弥生甕 20－1 13－1	口径18.8cm	口縁端部ごく浅く凹むS字状口縁を呈する体部外面は縦方向のハケ目のち、五条の櫛描文を施す。口縁外面ヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ、頸部体部コビによるタテナデ	淡褐色	1mm前後の砂を多く含む 良好	第2トレ50m付近 SE001（上層） 860602
弥生甕 20－2	口径22.8cm	口縁部は「く」の字状に開く。端部の断面は三角形。端部外面は外方へつまみ出している。頸部外面は強くヨコナデされる。体部外面は板ナデ。体部内面ヨコナデ。口縁部内面はヨコ方向に刷毛目が施される	外　灰黄褐色 内　淡橙色	1mm前後の砂を多く含む 良好	第2トレSE001 最下層 860611
弥生甕 20－3	口径21.4cm	口縁部は「く」の字状に開く。口縁端部は外方へつまみ出している。最大体部径はほぼ中央にもつ。外面体部下半部は縦方向のハケ目。体部中央から上位まで左下りのタタキ。口縁部直下は右下りのタタキ目 内面体部は左上りのナデ。口縁部左下り頸部は左方向のハケ目	褐色　外　スス多量に付着 内　スス下半に付着	1～2mmの砂を多く含む 良好	第2トレ SE001
弥生甕 20－4 13－2	底部径6.6cm	外面底部は右上りのタタキ。他はほぼ水平なタタキ。内面底部は左上りの板ナデ。他は上方へのハケ目。底部と体部は分割成形し接合している	暗黄褐色　外面スス付着	1mm程度の砂含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生小型壷 20－5	最大体部径 10.2cm	外面は左上りのヘラミガキ。内面はナデ	淡赤橙色　外面に朱を施こされた痕跡有	胎土にクサリレキを含む 良好	第2トレSE001 860604
土師器高坏 坏部 20－6	口径27.0cm	口縁部は内弯気味に上外方へのびる。端部は少し外へつまみ出す。内・外面ヘラミガキ。端部内外面はヨコナデ	にぶい橙色 外面に黒斑有	1mm前後の砂粒を多く含む やや軟	第2トレSE001 860609
弥生壷口縁 20－7	口径11.5cm	口縁部は上外方へのびる。端部は少し外へつまみ出す。口縁部外面は上方へナデを施す。肩部は刷毛目。内面はナデ	淡褐色	1mm前後の砂粒を多く含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生甕口縁 20－8	口径15.2cm	口縁端部は上方につまみ上げられ、内傾する狭い面を有する。口縁内外面はヨコナデ調整。頸部外面に刷毛目残す。外面にスス付着する	外　黒褐色（スス付着） 内　暗茶色	1mm前後の砂粒を多く含む 良好	第2トレSE001 860609
土師器鉢 20－9	口径19.4cm	底部は丸底。口縁部は上外方へのび、端部は上方へ立ち上がり内傾する狭い面をなす。外面体部はヘラナデ、内面はヨコナデ、口縁内外面はヨコナデ	外　黒色（スス付着） 内　橙色 内面下部に炭化物付	1mm大の砂粒を少し含む 良好	第2トレ SE001 860609
土師器鉢 20－10 13－5	口径17.6cm	口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面はヨコナデ。外面は斜方向の刷毛目。20－9よりも体部が張っている	外　暗灰色（スス付着） 内　橙色	1mm前後の砂を少し含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生鉢 20－11	口径22.6cm	口縁内外面ヨコナデ。体部内外面ヨコナデ	外　暗褐色（スス付着） 内　淡橙色	1mm程度の砂を多く含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生底部 20－12	底部径6.0cm	外面は刷毛目。内面は板ナデ	外　スス付着 内　明橙色	1mm前後の砂多く含む 良好	第2トレ SE001 860609
弥生甕 20－13	底部径4.3cm	内面は不定方向の刷毛目。外面は成形時の指圧痕を残す	外　淡赤橙色 内　茶褐色	1mm前後の砂粒を多く含む 良好	第2トレ　51m付近 SE001（上層） 860528
弥生底部 20－14 13－7	底部径5.7cm	外面縦方向のハケ目。内面は放射状のナデ底部外面は削って整えている	外　暗灰色　黒斑有り 内　灰黄色	1mmの砂多く含む 良好	第2トレSE001 860609
つぶて 20－15 13－9	直径3.8～ 4.3	全体に風化している。砂岩直径約4cm	灰色		第2トレ450m付近 SE001上層 860602

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
ト石 20−16 13−8	全長10.3cm	使用痕がみられる。粘盤岩	緑灰色		第2トレSE001 860609
弥生高坏 21−17 13−4	口径10.2cm 高　8.8	受部内面横方向のヘラミガキ、外面は板ナデ、中　頸ヨコナデ、脚部外面上位は縦方向のヘラミガキ、下位は横方向のヘラミガキ、脚部下位はやや内弯する	にぶい淡橙色	1mm以下の砂粒少し含む 良好	第2トレSE001 860604
弥生高坏 21−18 13−4	底径13.8cm	外面裾部は横方向のミガキ。脚部は縦方向のミガキ。内面は左方向の刷毛目を施す。裾部下位はやや内弯する	淡褐色	1mmの砂粒を少し含む 良好	第2トレSE001 860604
弥生高坏 21−19		外面は縦方向のヘラミガキ。内面、シボリ目がみられるがヘラケズリでほとんど消えている。脚部下端に外方から穿った3孔がある。脚坏接合部に粗いハケ目を施し接合を強化している	淡褐色	1mm前後の砂粒少し含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生高坏 21−20		脚部外面ハケのちヘラミガキ。内しぼり目が残るがヘラケズリにより消されている。外面はヘラミガキ。脚部下端に外方から穿った3孔がある	外　暗灰褐色 内　明橙色	1mm以下の砂粒少し含む 良好	第2トレSE001 860609
弥生高坏 21−21		脚部外面は3回の単位で縦方向のヘラミガキを施す。脚部下端に外方から3孔を穿つ	外面　暗茶色と暗橙色 内面　暗黄褐色	1mm以下の砂粒を含む 良好	第2トレ50m SE001付近 遺構面真上包含層
弥生裾部 21−22	底径17.0cm	裾部外面ヨコハケのちヘラミガキ。内面上半部横方向のヘラケズリ、下端部ヨコハケ	外面　暗褐色（黒斑有り） 内面　淡橙色	1mm前後の砂粒を多く含む 良好	第2トレSE001 最下層地山直上 860611
弥生高坏坏部 21−23	口径18.2cm	坏部外上位ヘラミガキ、下部ヨコナデ 内上部ヘラミガキのちヨコナデ、下部ヨコナデ。口縁端部は下方へ張り出す	淡灰色	1mm以下の砂粒を少し含む。クサリレキを含む 良好	第2トレSE001 860609
白磁壷 21−24 13−6		ほぼ上方に立ち上る体部。内外面施釉、底部は露胎	外面　釉色緑灰色 素地にぶい橙色	「す」が入っている 底部付近生焼け	第2トレンチ 町界アゼ遺構面直上 表採
土師器甕 21−25 15−4	口径27.0cm	口縁内外面ヨコナデ。体部外面成形時の叩き目の上から刷毛目を施す。内面はナデ	灰黄色	2mm位の砂を多く含む	第6トレンチ遺構面 860704 第1コーナー
土師器坏 21−26	口径18.0cm	外面ヨコナデ。内面には暗文 口縁端部は上方へつまみ出す	赤橙色	白い砂を少し含む	第6トレンチ遺構面 860704 第1コーナー
須恵器坏蓋 21−27 15−7	口径14.2cm	口縁部は外下方に開く。端部内側は内傾する面をもつ 天井部はナデ	青灰色	密 良好	第6トレンチ 860704 第6トレンチ遺構面
須恵器坏身 21−28 15−8	口径13.5cm	はり付け高台 口縁部は少し外反する	内面　にぶい橙色 外面　灰色	2mm位の砂少し含む 焼成不良やわらかい	第6トレンチ 860704 第6トレンチ遺構面
須恵器坏身 21−29 15−10	高台径9.6cm	はり付け高台 高台はやや外に開く	青灰色　断面赤褐色	密 良好	第6トレンチ 860704 第6トレンチ遺構面
弥生甕 21−30	口径14.2cm	口縁部を少し立ち上がらせる。口縁内外面ヨコナデ。体部上端外面は刷毛目を施した後に列点の退化した刻目をしるす	橙色 外面スス付	1mm大の砂少し含む 軟	860708 SD001
弥生鉢 21−31	口径16.1cm	−30と同タイプ	明橙色　外面スス付着	密 良好	第6トレ SD001 860708
弥生甕	口径17.8cm	口縁端部上方につまみ上げる。内面ナデ、	灰黄褐色　外面にスス付着	2mmの礫を含む	第6トレ

器種挿図図版	法　　量	形態・技法の特徴	色　　調	胎土・焼成	備　　考
21−32 16−3		頸部に刷毛目施す。外面口縁ヨコナデ後列点文を刻す。体部細い刷毛目。体部外面上端に乱れた列点文を刻す。		全体に磨耗著しい	８６０７０８ ＳＤ００１
弥生高坏坏部 21−33	口径25.0㎝	全体に磨耗	にぶい橙色	密 良好	第６トレ ＳＤ００１最下層
弥生高坏 21−34	口径28.0㎝	全体に磨耗、剥離、黒斑有り	にぶい橙色	クサリレキを含む 良好	第７トレ ＳＤ００２
弥生高坏 21−35	口径10.7㎝	全体に磨耗、少し外に開く裾部をもつ。上端に円孔を穿っている	淡橙色	密 良好	第６トレ ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生高坏 21−36	脚径13.0㎝	全体に磨耗、剥離少し内弯する裾部をもつ円孔を穿つ	にぶい橙色	くさり礫少し含む あまい	第６トレ ８６０７０４ ＳＤ００１
弥生鉢底部 21−37		体部内面ハケ、底部は円盤充てんにより仕上げる。外面ハケ。脚部内面ナデ外ナデ	外　淡茶色 内　暗黄色	1㎜前後の砂を多く含む 良好	第６トレ ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生高坏 21−38	脚径10.6㎝	全体に磨耗、脚裾部はやや外に開く。中位よりやや上に３孔を穿つ	にぶい橙色	砂を多く含む 甘い	第６トレ ８６０７０８ ＳＤ００１最下層
弥生高坏 21−39	脚径13.3㎝	全体に磨耗、外に大きく開く裾部。裾端部に狭い凹面を有する。脚裾境界部に三方から円孔を穿つ	明橙色	くさり礫、長石を含む	第６トレ ＳＤ００１
弥生高坏 21−40	脚部１３.㎝	全体に磨耗、外に大きく開く裾部。裾部外面にミガキを一部に残す。脚裾境界部に三方から円孔を穿つ	灰橙色　ミガキ部分はにぶい橙色	1㎜程度の砂粒を多く含む	第６トレ ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生壷 22−41 16−1	口径　9.0㎝ 高　16.6㎝	体部は楕円形を呈す。口縁部は上外方に開く。端部付近では少し内弯する。体部外面はヨコ方向のヘラミガキ。口縁部外面は縦方向のヘラミガキ。底部内面はハケ目、他はナデ	外面　にぶい橙色 内面　暗黄色（口縁） 一部黒色（体）	1㎜以下の砂少し含む 良好	ＳＤ００１ 第６トレ ８６０７１１
弥生壷 22−42 16−2	口径　8.6㎝ 高　13.2㎝	底部は凹状の平底を呈す。体部の最大径部は、中央よりやや下位にもつ。口縁部は少し外反し、端部でより下方へ垂下する。端部外面で３条の沈線をめぐらす、端部内面には刺突列点文。肩部には玉条のクシ描文と列点文	にぶい黄橙。外面体部（肩部以下）内面口縁部朱彩（暗赤色）	1㎜前後の砂を少し含む 良好	第６トレ ＳＤ００１ ８６０７０８
弥生甕 22−43	口径14.0㎝	肩部に左上りの叩きを施す。内面はヨコハケのちナデ	赤橙色	不良	第６トレ最上層 ８６０７０４ ＳＤ００１
弥生甕 22−44	口径13.0㎝	口縁端部を上方へつまみ上げる。口縁部外面は左上りの刷毛目、内面は横方向の刷毛目	にぶい黄橙色	2㎜位の砂を含む 良好	第６トレ ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生甕 22−45	口径16.0㎝	口縁端部内面はナデによる凹帯を有す。体部外面に斜方向の刷毛目を有する	外　明橙色 内　暗黄灰色	1～2㎜の砂粒を含むやや軟	第６トレ ８６０７０９ ＳＤ００１
弥生甕 22−46	口径12.8㎝	口縁部外面はナデ。内面はヨコハケのちナデ	淡黄橙色	良好	第６トレ ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生甕 22−47	口径12.2㎝	口縁部はゆるやかに外反する。端部内面に一条の沈線をめぐらす。体部縦のち斜めのハケ目	にぶい赤褐色	1㎜前後の砂を多く含む	第６トレ ８６０７０４

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
弥生甕 22−48	口径22.4㎝	口縁端部を上方へつまみ上げる。体部はヨコハケ及び列点文。内面はハケ目	暗橙色	1〜2㎜大の砂を多く含む	第6トレ 860708
弥生甕 22−49	口径20.4㎝	口縁端部を上方につまみ上げる。口縁内部ヨコナデ。頸部内面ヨコハケのヨコナデ、体部外面ヨコハケ、成形時の指圧痕残る。口縁端部外面に退化した列点文を刻む。頸部外面ナナメハケ、肩部ヨコハケ、体部外面タテハケのち列点文を刻む	暗黄色	1〜5㎜大の砂を少し含む 良好	第6トレ 860708
弥生甕 22〜50	口径21.4㎝	口縁端部を上方につまみ上げる。口縁内面ヨコハケ、口縁端部ヨコナデ、頸部周辺ナナメハケ、肩部ヨコハケ、体部刺突の上よりタテハケ、風化著しい	淡黄色	1〜2㎜の砂を多く含む 良好	第6トレ 860708
弥生壷 22−51	口径19.2㎝	くの字形口縁外面頸部付近タテハケを残す体部内面不定方向のナデ	外　明橙褐色 内　灰褐色	1〜2㎜までのくさり礫、長石を含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生甕 22−52	口径13.2㎝	口縁端部内一条の沈線、口縁内ヨコナデ、体部内不定方向のナデ。体部外タテハケ、下方左上りのハケ目	にぶい黄橙色	1〜2㎜の礫を多く含む	第6トレ 最上層860703 SD001
弥生甕 22−53	口径12.8㎝	くの字形口縁、口縁端部は下方に肥厚する上端はつまみ上げられる。口縁内側刷毛目を施す。体部内側はナデ、外面ハケ	にぶい黄橙色 外面スス付着	1〜2㎜の砂粒を含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生甕 22−54	口径15.6㎝	くの字形口縁、口縁端部は下方に肥厚。口縁体部内外面刷毛目を施す	暗黄色 外面スス付着	1〜2㎜大の砂を多く含む	第6トレ 860708 SD001
弥生甕 22−55	口径16.6㎝	口縁端部下方に肥厚する。内外面に刷毛目を施す。体部上端内面は縦方向にナデる	暗黄色 外面スス付着	1〜2㎜大の砂を少し含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生甑 22−56	底径　4.4㎝	磨耗著しい。底部中央に1孔を穿つ	にぶい灰茶色 断面暗灰色		第6トレ 860708 SD001
弥生甕 22−57	底径　5.0㎝	内面ナデ、外面ハケのちナデ、磨耗著しい	内　灰褐色 外　灰黒色「ススj付着	くさり礫を含む	第6トレ 860708 SD001
弥生甕 22−58	底径　3.6㎝	外面ハケのち一部ナデ。内面板ナデ	暗黄色　外面に黒斑有り	胎土良好 焼成　軟	第6トレ 860708 SD001
弥生甕 22−59 16−5	底径　4.4㎝	内面ナデ、外面ハケ。底部に1孔を穿つ	にぶい橙色 断面灰褐色	焼成は非常に良い	第6トレ 860708 SD001
弥生甕 22−60 16−9	底径　5.1㎝	外面ナデ、内面板ナデを施す	外　灰褐色 内　暗褐色	1㎜大の砂を多く含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生底部 23−61 16−7	底径　6.3㎝	底部外面に粘土ヒモ巻上げ痕有。外面に刷毛目残る。全体に磨耗著しい	外　淡橙色　黒斑有り 内　こげ茶色	1㎜大の砂を多く含む 良好	第6トレ 860708 SD001
弥生底部 23−62	底径　5.0㎝	外面刷毛目、内面板ナデ後指ナデ	灰褐色	2㎜位の礫を含む 良好	第6トレ下層 860708 SD001
弥生底部 23−63	底径　2.7㎝	外面ハケのちナデ 内面ヨコハケのち放射状の刷毛目	外　にぶいはだ色 内　灰褐色	良好	第6トレ 最下層 860708 SD001
弥生甕 23−64	底径　6.0㎝	体部外面ハケ目、内面ナデ 底部外面ヘラケズリ	にぶい黄橙色　外面黒斑有り	1〜2㎜大の砂を少し含む 軟	第6トレ 860708 SD001

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
弥生甕 23－65 13－8	底径　4.9㎝	外面タタキ目残り内面ナデ調整	外　淡茶色 内　淡茶灰色	1㎜大の砂を多く含む 良好	第6トレ ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生底部 23－66 18－1	底径　5.7㎝	外面ナデ、内面刷毛目	外　淡茶色 内　暗灰色	くさり礫を多く含む 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生底部 23－67	底径　3.7㎝	底部外面指圧痕有り	にぶい橙色	密 良好	第6トレ 最下層 ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生甕 23－68	底径　5.4㎝	底部と脚台は一緒につくり、円盤状栓を充てんして仕上げる。底部内外面に刷毛目、脚部内面に指圧痕残る	にぶい橙褐色	1～2㎜大砂を多く含む	第6トレ ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生甕 23－69	底径　7.1㎝	脚台部と体部は一緒につくり、円盤状栓を充てんして仕上げる。脚部内外面に刷毛目を施す	暗茶色	1㎜大の砂を多く含む 良好	第6トレ ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生短頸壷 23－70	口径　8.4㎝	口縁部内外面ヨコナデ、肩部は内面指押え、外面粗い刷毛目体部内外面ナデ	暗黄橙色	1㎜大の砂を少し含む 良好	第6トレ ８６０７０８ ＳＤ００１
弥生器台 23－71	口径17.1㎝	坏部は大きく拡き、口縁端部は折曲げられ垂下し、狭い面をつくる。外面に2条の沈線を刻む。内面は放射状にヘラミガキする内外面とも磨耗著しい	にぶい橙色	密 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生壷 23－72	口径24.6㎝	口縁端部は折曲げられ垂下し面をつくる。外面に4条の凹線を刻む。口縁内面には小さな刺突孔による列点文とクシ書を交替に使って、あやすぎ状の文葉を描がく。内面磨耗著しい	にぶい橙色	石英、長石を含む （1～2㎜） 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生長頸壷 23－73	口径　6.8㎝	端部外面は強い横ナデにより凹んでいる。外面縦方向のミガキ	外面にぶい赤褐色（丹塗り） 内面にぶい黄橙色 断面は黒灰色	密 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生壷 23－74	口径17.7㎝	口縁端部垂直に上下に肥厚、口縁端部外面クシ描き文、内面ヘラによる幾何文を刻む	にぶい赤橙色	緻密 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生壷 23－75		内面タテ方向のナデ、外面ナデのち丹塗り	外面丹ぬり赤褐色 内面にぶい橙色	細砂を少し含む 良好	第7トレ ８６０７１８ ＳＤ００２
弥生壷 23－76	口径　8.9㎝	口縁端部は上外方につまみ出される。内外面ヨコナデ調整	灰黄白色	長石を多く含む 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生底部 23－77	底径　4.4㎝	全体に磨耗、底部外面に指圧痕が残る	にぶい橙色	2㎜の砂を含む 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生底部 23－78 18－5	底径　5.0㎝	内面ハケ目を放射状に施す。外面ナデ調整	灰黄褐色	1～2㎜の砂を含む 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生底部 23－79 18－4	底径　3.4㎝	底部外面に指圧痕あり、内面ナデ調整	にぶい橙色	密 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生底部 23－80 18－3	底径　6.0㎝	内面ナデ、外面ハケのちナデ、全体に磨耗著しい	外　にぶい橙色 内　黒灰色	密 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生甑 23－81	底径　3.8㎝	内面不定方向のハケ、外面ハケのちナデ一部ハケを残す	橙色	密 良好	第7トレ ＳＤ００２
弥生底部	底径　6.0㎝	内面渦巻状に刷毛目を施す。外面磨耗	にぶい黄橙色	1～3㎜の砂を含む	第7トレ

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
23−82				良好	SD002
弥生底部 23−83	底径 5.0cm	内面ナデ、外面一部ハケ目残る。全体に磨耗著しい	外面橙色、内面にぶい黄橙色	密 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23−84	底径 5.0cm	内外面共、磨耗著しい	にぶい橙色	5mm位の礫を少し含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23−85 18−2	底径 5.0cm	全体に磨耗、一部に黒斑残る	にぶい橙色 一部黒色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23−86	底径 3.0cm	底径は3.0cmと非常に小さい。内面に放射状の刷毛目を刻む	淡黄橙色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23−87	底径 3.6cm	体部のタチアガリは非常に低い。体部下端にヘラケズリされる	淡黄灰色	砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生底部 23−88	底径 8.2cm	外面不定方向のナデ、内面底部に指圧痕残る	内面暗灰色、外面橙色	1〜8mmの小石を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生脚台 23−89	底径 7.6cm	脚、体境界部は粗くユビナデされ凸凹ができる。これは、円盤状栓を充てんする際、接合の強度を高めるためである。脚部内面には成形時の指圧痕が残る	にぶい赤褐色	2cmのレキ多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生脚台 23−90 18−12	底径 8.0cm	同　上	暗灰橙色	2cmまでのレキを含む 良好	第7トレ SD002
弥生脚台 23−91 18−11	底径 7.4cm	脚台部内面渦巻状ハケ体部内面板ナデ、外面ハケのちナデ。脚、体境界部外面に粘土を補強して接合力を高めている	にぶい橙色	1〜2mmの礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生脚台 23−92 18−16	底径 6.7cm	脚台部内面は横方向の刷毛を引き回し、外面は縦方向の刷毛	にぶい赤褐色	2mmの砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生脚台 23−93	底径 6.1cm	台部内面横方向のハケ、外面はナデ。体部内面横方向の板ナデ	外面淡黄灰色 体部内面黒色	1〜2mm程度の礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生脚台 23−94 18−13	底径 7.5cm	ほぼ平坦な底部より脚台がはじめに外傾し再び内傾する形で外方にはり出している。端部は丸くおさめる。外面ハケ、脚部内面ナデ	淡橙色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生脚台 23−95 18−14	底径 7.0cm	平坦な底部よりほぼ垂直に体部が立ちあがる。脚台は若干内傾ぎみに外方へはりだし端部は接地面と平行となる。外、内面共にナデ	にぶい灰褐色	1〜2mm程度の砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生脚台 23−96 18−15	底径 6.6cm	ほぼ平坦な底部より脚台がまっすぐ外方にはりだしている。端部は丸くおさめる 磨耗著しい	橙色	1〜2mmの砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生壷 24−97	口径20.5cm	口縁部はやや外反ぎみにななめ上方にのび下端に粘土をたして面をつくり、クシ描き文、きざみ目を施す。内外面ともにヘラミガキ	にぶい黄橙色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24−98	口径18.0cm	底部、脚部欠損、口縁はほぼまっすぐななめ上方にのび下端に粘土をたして大きく垂下させ面をつくり、クシ描文を施し浮文を付ける。全体に磨耗しているため不明	赤褐色	くさり礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24−99	口径17.1cm	底部、脚部欠損、口縁はやや外反ぎみにななめ上方にのび端部は上下につまみだすた	淡赤褐色	密 良好	第7トレ SD002

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
		めにほぼ垂直な面をもち、クシ描文を施す 内・外面ともにヘラミガキ			
弥生高坏 24－100	口径18.5cm	底部、脚部欠損、口縁はまっすぐななめ外方に立ちあがり端部は若干下方につまみだし、ほぼ垂直な面を持つ。内部刷毛後ミガキ端部回転ミガキ、坏部外面は左上りのハケ目	にぶい黄橙色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－101	口径18.5cm	底部、脚部欠損、口縁はほぼまっすぐになめ上方に立ちあがり端部は上・下ともにつまみだし、下方におじぎする形となっている。内、外面ともにヘラミガキ	赤褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－102	口径18.3cm	底部、脚部欠損、口縁は大きく外反してななめ上方にたちあがり端部は下方をつまみだしほぼ垂直な面を持ち、クシ描文を施す	外面赤褐色（丹塗り）内面にぶい橙色	砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－103	口径19.7cm	底部、脚部欠損、口縁はやや外反ぎみになめ上方にのび端部は下方を若干つまみだし垂直な面を持つ。 内・外面共にヘラミガキ	にぶい橙色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－104	残高　3.2cm	坏底部のみ残存中央部に円盤状栓を充てんしている。底部下に脚台へ続く破損の跡がある。底部内面に1cmに6本の割りあいでヨコハケ目、外面はハケのちナデ	にぶい明橙色	1～2mmの砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－105	残高　3.4cm	底部のみ残存。厚めの円盤状栓を充てんしている。全体に磨耕著しい	にぶい橙色	くさり礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－106 18－8	脚部径 12.3cm	口縁部欠損、脚部はラッパ状に広がり裾は端部が内弯する。脚部4箇所穿孔するが、うちの1つは位置がずれており埋めもどしている。脚部内面はナデ、外面はヘラミガキ	にぶい黄橙色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－107 19－4	口径26.0cm	口縁部のみ残存、内弯する擬口縁より、口縁が外反して立ち上がる。全体に磨滅しているため調整不明	黒灰色とにぶい赤褐色	細砂を多く含む 不良	第7トレ SD002
弥生高坏 24－108	口径26.6cm	口縁部のみ残存、内弯ぎみの体部よりやや外反してななめ上方に口縁がたちあがり端部は丸くおさめる。全体的に磨滅しているため文様等は不明	乳白色	1～2mm位のくさり礫細砂を多く含む	第7トレ SD002
弥生高坏 24－109	口径26.5cm	口縁部のみ残存、口縁は体部よりほぼ直線的に外方へのびる。端部は内側に若干つまみだしている。全体的に磨滅しているため文様等は不明	淡い赤褐色	長石を含む 良好	第7トレ SD002
弥生器台 24－110 17－5	口径19.8cm 器高　5.8cm 脚部径 11.4cm	脚台は長い円錘状で裾端部はやや内弯している。受け部は接合部よりほぼまっすぐにのび端部は丸くおさめる。受け部内面はナデ、脚部に3ヶ所のすかし孔あり、裾部内面に不定方向のハケ目	内面　明橙褐色 外面　淡橙灰色	2mmまでのくさり礫、長石を多く含む	第6トレ SD002
弥生高坏 24－111 18－9		坏底部・脚柱部のみ残存、坏底部は円盤状の栓を充てんする。脚柱は若干細めでほぼ垂直に下がり裾でラッパ状に広がる。 坏部内・外面脚部外面にヘラミガキ、脚部内面ナデ	にぶい橙色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－112		底部・脚柱部のみ残存。坏底部は円盤状栓により充てんされる。脚柱はななめ外方にまっすぐのびる全体的に磨滅しているため文様等は不明	橙色	長石を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－113		底部・脚柱部のみ残存。ほぼ垂直に下方へのびる脚柱よりほぼ直角に外反して体部が立ちあがる。底部は平坦で円盤状栓を充てんする	にぶい黄灰色	密 良好	第7トレ SD002

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
弥生高坏 24－114		脚柱部のみ残存。平坦な底部よりななめ外方に脚柱がほぼまっすぐハの字状に広がる脚柱内面にしぼり目あり外面に一部黒斑があるが全体的に磨滅が著しくその他は不明	淡橙色	密 不良	第7トレ SD002
弥生高坏 24－115		脚柱部のみ残存。平坦な底部よりほぼ垂直に脚柱がのび裾部はハの字状に広がり先端に近づくほど薄手になる。全体的に磨滅しているための文様等は不明。脚内面にシボリ目の跡あり	橙色	2㎜位の砂を含む やや不良	第7トレ SD002
弥生高坏 24－116		脚台の一部のみ残存。ほぼ垂直に下方へのびる脚柱より裾部がハの字状に広がる。粘土を二重巻きして太くしている。裾部外面に一部ハケ目、他は磨滅のため不明	淡橙色	細い砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－117		底部・脚柱部のみ残存。ほぼ平坦な底部よりやや外反ぎみに脚柱がななめ外方にはりだしている。接合部外面に粘土を補強している。脚部外面の一部にヘラミガキ痕残る。全体に磨耗著しい	灰褐色	砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－118	底径 12.0㎝	脚台部のみ残存。裾に向かってやや外反ぎみにハの字状にひらき端部はつまみ出して丸くおさめる。外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はハケのちナデ	淡橙色	くさり礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－119	残高　7.3㎝	脚台の一部のみ残存。脚柱から裾部に向かってなだらかに外反していく、肉厚は脚柱部はわりと厚く裾に向かうほどうすくなる外面ヘラミガキ、内面はナデ	淡灰褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－120	残高　9.9㎝	底部・脚台の一部のみ残存。脚柱部はほぼ垂直に下方へのび、裾がハの字状に広がる体部は脚柱よりななめ前方にまっすぐのびる。脚柱部内面にシボリ目残る。外面ヘラミガキ、内面はヨコハケ	淡灰褐色	密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－121		脚柱部はハの字に開く、脚柱部内面にシボリ目残る。外面全面ヘラミガキ、内面坏部底部はミガキと思われる。脚部内面はナデ内面裾部にナナメハケ目、残存部下位に円孔3箇所を穿つ	にぶい橙色	2㎜位の砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－122		脚柱部は円筒形で裾部はハの字に開く。 脚柱部外面はミガキ、坏部内面ミガキ残存部下位に3箇所円孔を穿つ	淡橙色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－123		脚柱部は円筒形、脚柱部外面はヘラミガキ内面はナデ、残存部下位に三方向から円孔を穿つ	にぶい橙色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生高坏 24－124	底径 14.8㎝	脚部はハの字に開く。外面磨滅が激しいがミガキの痕有り。内面ハケ目、残存部上位に円孔を穿つ	淡橙色	密 良好	第7トレ SD002
高坏 24－125	脚部径 16.2㎝	脚裾部はハの字に開き、中位で段をつけて大きく開く。外面はたて方向のミガキ、内面はナデ、脚部上位に円孔を穿つ	にぶい赤褐色一部灰褐色 （黒斑）	くさり礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－128	口径（推） 15.5㎝	口縁は外に開き、端部は真上につまみ上げ丸くおさめる。肩部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲する。口縁端部外面に列点文を施す。全面ナデ	灰褐色	砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－129	口径（推） 14.9㎝	口縁は外に開き、端部は真上につまみ上げ丸くおさめる。外端面に列点文あり、肩部にクシ描文。その下方に列点文がある。他内外面ナデ	明褐色	くさり礫、長石を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－130	口径（推） 17.6㎝	肩部から口縁部にかけてくの字状に屈曲し、口縁は外に開き、端部は真上につまみ上げる　外端面に列点文の退化した刻み目あり肩部に6、7条のくし描き直線文、その下	黄橙色	くさり礫、長石を多く含む 良好	第7トレ SD002

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
		方に列点文の退化した刻み目がある。他内外面共ナデ			SD002
弥生甕 25－131	口径15.0cm	口縁部は外弯しのびる。端部は上方へつまみ出す			
弥生甕 25－132	口径18.0cm	口縁部は「く」の字状に開き、端部付近で少し上方へ立ち上がる。口縁端部外面に列点文を施す。肩部にクシ描文があり、その下端に接して列点文有り	にぶい橙色 外面一部にスス付着	くさり礫、長石を含むやや粗い 良好	SD002
弥生甕 25－133	口径19.5cm	肩部から口縁部にかけて、くの字に屈曲し口縁は外に開き、端部は外傾した面をもって丸くおさめる。外面にすす付着。口縁部に列点文、肩部にクシ描文、その下方に列点文がある。他全面ナデ	明橙色	くさり礫、長石を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－134 19－1	口径16.5cm	肩部から口縁部にかけて、くの字に屈曲し顎をもって短く内方へつまみ、端部は丸くおさめる。端面には列点文、肩部にクシ描文、その下方に列点文がある。他全面ナデ	にぶい橙色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－135 19－3	口径19.1cm	肩部から口縁部にかけて、くの字に屈曲し口縁は外に開き、端部は真上につまみだされ、丸くおさめる。口縁端部外面に列点文有。肩部にクシ描文、その下方に列点文を刻む。他全面ナデ	明橙色	くさり礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－136 17－9	口径16.8cm	口縁部と肩部一部のみ残存。肩部より口縁にかけて大きく外反し、それに応じて肉厚になる。端部は少し上につまみあげる。口縁端部外面に刻目有。肩部ハケのちナデ、他全面ナデ	にぶい黄橙色	くさり礫、長石2㎜位のものを多く含む	第7トレ SD002
弥生甕 25－137	口径19.5cm	口縁部とそれに続く肩部の一部のみ残存。肩部より口縁にかけてくの字形に屈曲し、外反ぎみにのび端部は丸くやや下方につまみだし気味である。口縁端部外面に刻目有。肩部外面クシ描文。他全面ナデ	灰橙色	1～2㎜の礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－138 17－9	口径16.7cm	口縁部と肩部のみ残存。肩部より曲線で外反し口縁がたちあがり、端部は上にすこしつまみあげる形で内向して丸くおさめる。口縁端部外面に刻目有。肩部外面に板ナデの痕有	灰褐色	2㎜位の礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－139	口径16.1cm	口縁部と肩部のみ残存。肩部よりくの字形にまがり口縁は外に開き、端部は上につまみあげる形で丸くおさめる。口縁端部外面に、にぶい刻目有。肩部クシ描文、他全面ナデ	淡橙色 外面にスス付着	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－140 19－2	口径12.9cm	口縁部と肩部のみ残存。肩部よりくの字形に屈曲し内弯気味に口縁が立ちあがり、端部は内側をつまみあげられる。口縁部内外面ヨコナデ、肩部外面ハケ、内面ナデ	にぶい橙色	長石を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－141	口径20.7cm	口縁は短く外反し端部は外につまみだしたため外傾する凹面をもつ。口縁外面ナデ。体部外面ハケ目。内面ナデ	にぶい黄橙色	くさり礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－142	口径17.3cm	口縁は外に開き、端部は上方へ折り曲げられる。内外面ナデ	淡黄橙色	くさり礫、長石を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－143	口径16.9cm	口縁は外に開き、端部は上方へ折り曲げられ上端に狭い面をつくる。口縁外面にナナメハケ目、内面にヨコハケ目、端部内外面はヨコナデ	にぶい橙色	砂粒を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－144	口径15.9cm	口縁は外に開き、端部は上方へ折り曲げ、上端は内傾する凹面をつくる。内外面ナデ調整	橙灰色　外面にスス付着	くさり礫、長石を含む 良好	第7トレ SD002

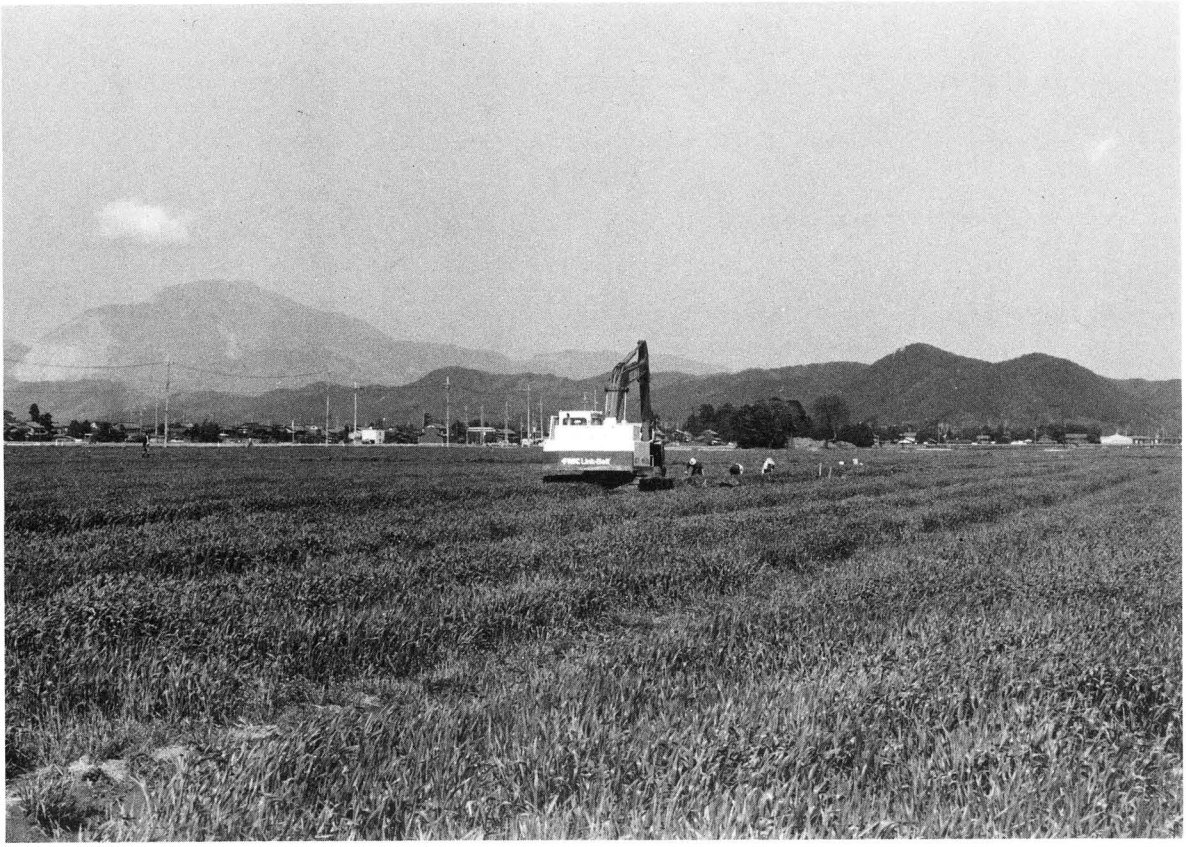
器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
弥生甕 25－145	口径17.7cm	口縁は外に開き、端部は上方へつまみ上げる。端面外面に列点文を刻む。外面にすす付着。内外面ナデ調整	灰褐色	くさり礫、長石を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－146	口径16.4cm	口縁は外に開き、端部は上方につまみ上げ外傾する凹面をつくる。肩部内面に粘土紐巻き上げ痕あり。内外面ナデ調整	にぶい橙色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－147	口径15.2cm	口縁は短く外反し、端部は上方につまみだし、外傾する面をつくる。口縁外面に刻目を施す。内外面ナデ	淡黄褐色 外面にスス付着	砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－148	口径16.8cm	口縁は外に開き、端部は上方へ折り曲げ、上端に平坦な面をもつ。端面外面に刻目有内外面ナデ	淡黄橙色	1～2㎜の礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－149	口径16.6cm	口縁はゆるく内弯し、端部は丸くおさめる。内外面ナデ	にぶい橙色	砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－150	口径16.6cm	口縁は顎をもって上方へ外反し、端部は丸くおさめる。口縁外面にクシ描文を施し、頸部外面はヨコナデ。内面ハケの後ナデ	黄橙色	1～2㎜の砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生壷 25－151 19－8	頸部径 13.4cm	器壁は厚く。頸部ですぼまっており、凹線文に竹管文が組み合されて施文される	にぶい灰褐色	5㎜位の石を刻む 良好	第7トレ SD002
弥生壷 25－152 19－9	口径13.5cm	二重口縁。上方部のみ残存。口縁は外上方に伸び、端部は内方につまみ入れ外傾する面をつくる。内面はナデ、外面はミガキ、口縁下部に竹管文あり	黄橙色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－153 19－6	口径13.2cm	口縁は肩部からくの字状に屈曲し端部は顎をもって短く外反しながら立ち上がる。端部は丸くおさめる。体部内面に指圧痕あり内外面ナデ調整	橙色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－154	口径11.7cm	口縁は上方で強く屈曲し、水平に伸びる。端部は下方へ丸めこむ。内外面ナデ	にぶい橙色	1㎜の砂を含む 良好	第7トレ SD002
弥生壷 25－155	口径13.8cm	二重口縁壷、器壁は厚い。口縁はゆるく外反し、端部は外傾する面をもつ。内外面磨耗著しく調整不明	淡橙色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－156	口径14.0cm	肩部からくの字状に屈曲し、端部はやや内弯ぎみに上方に折り曲げられ上端に水平の面をもつ。外面に列点文、肩部外面にクシ描き直線文を刻む。体部内面に刷毛目の痕有り	淡橙色	緻密 良好	第7トレ SD002
弥生壷 25－157 17－8	口径14.0cm	口縁は弱く外反しながら伸びる。端部は下外方へつまみ出され外傾する面をつくる。端部外面に列点文あり。他はヨコナデ調整	黄橙色	くさり礫、長石を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－158	口径14.3cm	口縁は弱く外反しながら伸びる。端部は下外方へつまみ出され外傾する面をつくる。端部外面に列点文、傾部外面にくし描き直線文を刻む	にぶい黄橙色	1～2㎜の砂多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－159	口径15.0cm	口縁は弱く外反しながら伸びる。端部に外傾する面をもつ。内外面ナデ	にぶい黄橙色	くさり礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 25－160	口径13.4cm	口縁はくの字状に屈曲し、端部は上方に折り曲げられ、外側に面をつくる。端面外面に退化した列点文を刻む。内外面ナデ	灰黄色	1～2㎜位の礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 26－161 17－7	口径17.2cm	肩部はゆるく内弯し、口縁はわずかに内弯ぎみに伸び端部は上方に折り曲げられ、上端に狭い面をもつ。口縁端部外面に退化した列点文有り。肩部にクシ描文その下方に退化した列点文有り。体部内面ヨコハケ、	淡黄橙色	1～2㎜大の砂粒を多く含む やや軟質	第7トレ 860717 SD002

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
		口縁内外面ヨコナデ			
弥生甕 26－162	口径18.8cm	口縁は外に開き、端部外下方につまみ出され、外傾する凹面をつくる。内面はハケのちナデ、外面ナデ	にぶい橙色	1～2mmの砂を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 26－163	口径21.7cm	口縁は弱く外反し、端部は丸くおさめる。内外面ヨコナデ。全体に磨耗著しい	淡黄橙色	くさり礫を含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 26－164 17－4	口径13.7cm	肩部の張りは弱く、口縁は外に開き、端部は丸くおさめる。口縁内外面ナデ、体部内面上位はハケ目、下位ハケ後ナデ、外面緻密なヘラミガキ	外面　淡橙色 内面　黒灰色	くさり礫を多く含む 良好	第7トレ SD002
弥生甕 26－165	口径21.2cm	口縁は外に開き、端部は外下方につまみ出し、外傾する凹面をつくる。口縁外端面に刻目有り。内端面に指圧痕あり。外面はハケ目、内面ナデ	にぶい橙色	2mmの石を少量含む 良好	第7トレ SD002
弥生手焙土器 26－166	最大体部径 20.6cm	張りの強い屈曲をもち、2条の突帯をつけその部位に刺突文を刻む	灰褐色	緻密 良好	第7トレ SD002
土師器皿 26－167 12－9 (167-192)	口径　8.9cm 器高1.15cm	口縁は内弯しつつ、外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面は乱ナデ	淡橙色	密　くさり礫含む 良好	土器溜 860614 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－168	口径　9.0cm 器高1.35cm	底部は平坦にのび、口縁は内弯しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧、およびナデ消し、底部内面は乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器溜 860614 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－169	口径　9.3cm 器高1.35cm	底部は中央に向かって上がり気味に伸びる口縁は内弯しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面乱ナデ	淡黄橙色	密　くさり礫含む 良好	土器溜 860614 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－170	口径　9.1cm 器高　1.2cm	口縁は内弯しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面乱ナデ	にぶい橙色	密 良好	土器溜 860614 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－171	口径　9.6cm 器高　1.6cm	底部は平坦で、中央が上がっている。口縁は内弯ぎみにのびる。端部は丸くおさめる口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面乱ナデ	淡灰褐色	密 良好	土器溜 860614 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－172	口径9.35cm 器高　1.8cm	底部は平坦にのび、口縁は内弯ぎみにのびる。端部は丸くおさめる。外面底部指圧痕およびナデ消し、口縁内外面はヨコナデ、内面調整不詳	淡橙色	密 良好	860619 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－173	口径　9.2cm 器高1.67cm	口縁は内弯ぎみにのびる。強いナデのため凸凹を生ずる。口縁外面はヨコナデ、外面底部は指圧痕およびナデ消し、内面ナデ	淡灰褐色	密 良好	土器溜 860619 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－174	口径　9.4cm 器高　1.6cm	底部は中央に向かって上がりぎみに伸びる口縁は内弯しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、内面ナデ	淡灰褐色	密 良好	土器溜 860614 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－175	口径　8.6cm 器高1.32cm	底部はやや外反し、口縁は内弯しながら外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器溜 860614 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－176	口径　9.5cm 器高1.73cm	底部は強いナデのため凸凹を生ずる。口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。口縁内外面はナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、内面調整不詳	にぶい橙色	密 良好	土器溜 860614 鏡塚埋納土器

器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
土師器皿 26－177	口径 9.8cm 器高 1.52cm	口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－178	口径 9.7cm 器高 1.5cm	底部は中央に向かって上がりぎみに伸びる口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面ナデ	淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－179	口径 9.8cm 器高 1.5cm	底部は平坦から外反ぎみに伸び、口縁は外に開く。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、底部内面調整不詳	淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－180	口径 9.2cm 器高 1.6cm	底部は平坦で、口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧およびナデ消し、内面調整不詳	にぶい橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－181	口径 10.3cm 器高 1.28cm	口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧痕およびナデ消し、内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－182	口径 11.2cm 器高 1.5cm	底部は平坦で、口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部外面は指圧痕およびナデ消し、内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－183	口径 10.2cm 器高 1.2cm	口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は外傾する面をもつ。口縁内外面ヨコナデ	にぶい橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－184	口径 9.4cm 器高 1.55cm	口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面ヨコナデ	橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－185	口径 9.8cm 器高 1.3cm	口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面ヨコナデ	黄橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－186	口径 10.4cm 器高 1.4cm	口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面ヨコナデ	淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－187	口径 10.3cm 器高 1.85cm	底部は中央に向かって上がりぎみに伸び、口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部は指圧痕およびナデ消し、内面調整不詳	淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－188	口径 11.2cm 器高 1.98cm	底部は平坦で、口縁は内弯ぎみに外上方に伸びる。端部は丸くおさめる。口縁内外面はヨコナデ、底部は指圧痕およびナデ消し内面乱ナデ	淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－189	口径 11.7cm 器高 1.9cm	口縁は内弯ぎみに外上方に伸び、端部は丸くおさめる。口縁内外面ナデ	淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－190	口径 12.8cm 器高 2.55cm	口縁は内弯ぎみに外上方に伸び、端部は丸くおさめる。口縁内外面ナデ	にぶい淡橙色	密 良好	土器溜 ８６０６１４ 鏡塚埋納土器
土師器皿 26－191	口径 14.8cm 器高 1.55cm	底部は平坦であり、口縁は内弯しながら外上方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁外面はナデ、底部外面は指圧およびナデ消	淡橙色	密 良好	土器溜 鏡塚埋納土器

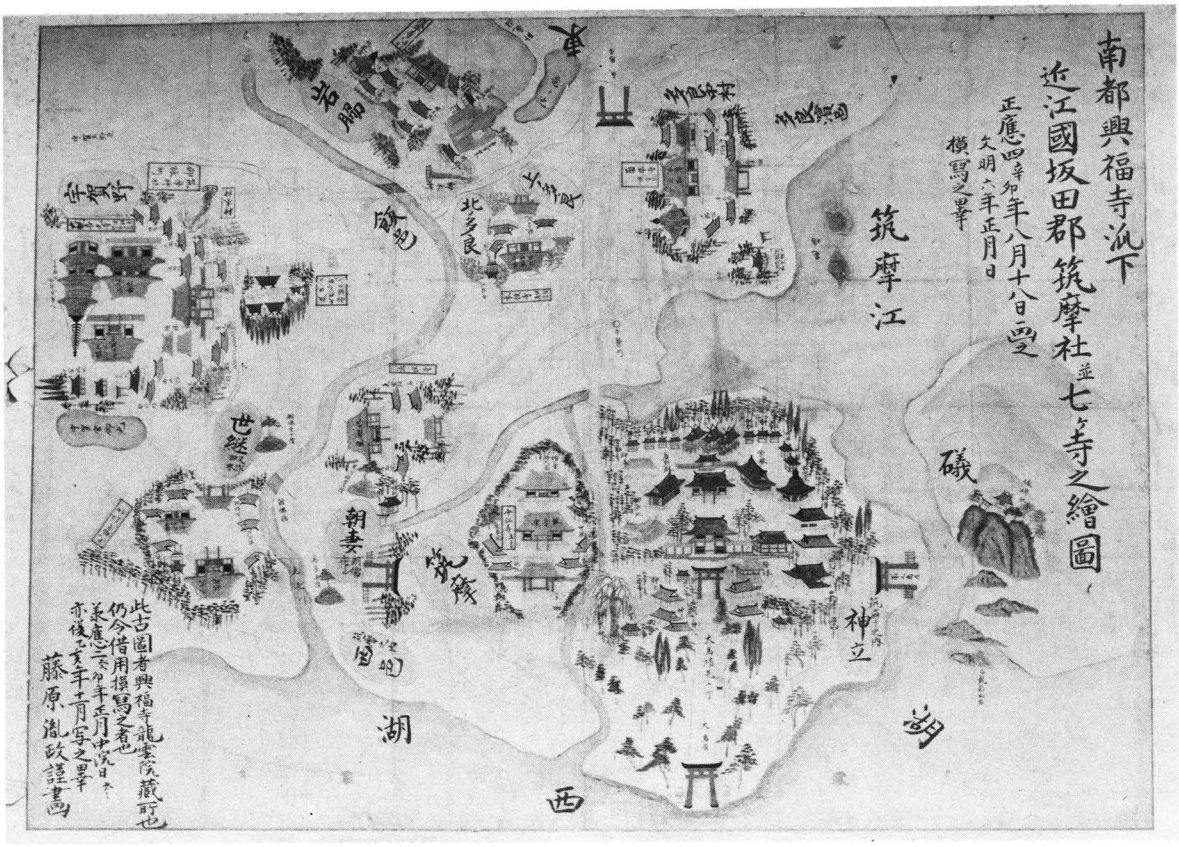
器種挿図図版	法　量	形態・技法の特徴	色　調	胎土・焼成	備　考
		し、内面調整不詳			
土師器皿 26－192	口径16.8㎝ 器高　2.6㎝	底部は平坦であり、口縁は内弯しながら外上方にのびる。端部は丸くおさめる。口縁はまっすぐ外上方にのびる。口縁外面はナデ、底部外面は指圧、およびナデ消し、内面調整不詳	にぶい橙色	密 良好	土器溜 鏡塚埋納土器
山茶碗 26－193 12－4	高台径7.5㎝ 高台高0.6㎝	底部は中央にむかって上がり気味にのび、高台は逆台形で、貼付けである。重ね焼きのあと有り、内面に自然釉がかかっている	淡灰色	密 良好	南トレンチ 鏡塚封土　②
山茶碗 26－194 12－1	高台径7.5㎝ 高台高 0.68㎝	底部は平坦であり外周に断面逆三角形の高台が貼付いている。高台内に糸切痕有。見込みにナデ調整痕有り。畳付にモミ痕有	黄灰色	密（礫を含む） 良好	鏡塚封土
山茶碗 26－195 12－2	高台径8.6㎝ 高台高0.5㎝	底部はやや中央に向かって下がり気味にのびており外周上に断面逆三角形の高台が貼付いている。高台内に糸切痕有	黄灰色	密 良好	鏡塚封土
山茶碗 26－196 12－6	高台径8.3㎝ 高台高0.5㎝	底部は中央にむかって下がり気味にのび外周に断面逆三角形の高台が貼付いている。高台内に糸切痕有。畳付にモミ痕有り	淡灰色	密 良好	鏡塚封土
山茶碗 26－197 12－5	高台径7.6㎝ 高台高0.5㎝	底部は平坦であり外周に断面台形状の高台がはりついている。口縁は内弯気味にのびる。高台内はナデ調整。畳付にモミガラの痕を残す	淡灰色	密 良好	南トレンチ　① 鏡塚封土
山茶碗 26－198 12－7	高台径9.6㎝ 高台高0.6㎝	底部はやや中央にむかって下がり気味にのび外周に断面逆三角形の高台が貼付いている。高台内に糸切痕有	黄灰色	密 良好	鏡塚封土
土師質底部 26－199 15－9	底径部6.2㎝	底部は平坦であり外面は垂直に切り立ってから体部が外上方にまっすぐのびる	淡橙色	粗（砂礫を多量に含む） 良好	撞木山南トレンチ溝 ㊱
山茶碗 （小皿） 26－200 15－6	口径　8.4㎝ 器高　2.6㎝ 底部径5.2㎝	底部は中央にむかってやや上がり気味にのびており大きく外反した体部よりに外反して口縁が立ちあがる。端部は丸くおさめる	灰色	密 良好	撞木塚封土
山茶碗 26－201 15－12	高台径（推） 8.2㎝ 高台高0.6㎝	底部は平坦であり断面逆三角形の高台が外周に貼付いている。畳付にモミ痕有	灰色	密 良好	撞木塚封土
陶器　鉢 26－202 12－8	残高　5.6㎝	まっすぐに外上方にのびた体部より水平に段がつきそれより口縁が内弯ぎみにのび、端部は丸くおさめる。内外面に泥　をかける。瀬戸・美濃産	内外面　茶褐色 断面　灰色	密（2㎜の礫を含む） モグサ土 良好	墳頭部 鏡塚封土
土師器甕底部 26－203	底部径5.0㎝	底部は平坦でありそれから体部が外上方へまっすぐに立ちあがる	橙色	粗（5.0㎜までの砂礫を多量に含む） 良好	鏡塚封土
白磁埦 26－204 15－5	残高　2.7㎝	口縁はまっすぐにのび端部はヘラ削りによる玉縁成形となっている	緑灰色 釉－白色 素地→淡灰色	密	撞木塚第2層 上面 タタキ面 216
木製クワ 27－205	柄　48.5㎝ 柄幅　3.4㎝	身部分に段を有する			SE001
木製クワ 27－206	柄　45㎝ 柄幅　4.0㎝	身部分に段を有する			SE001
木製ハシゴ 27－207		一段のみ残存している			SE001

図　　版



試掘調査風景（西より）

世継の集落と遺跡全景（東より）



筑摩神社並七ヶ寺絵図（筑摩神社所蔵）

T２・小溝

畦畔及び土層

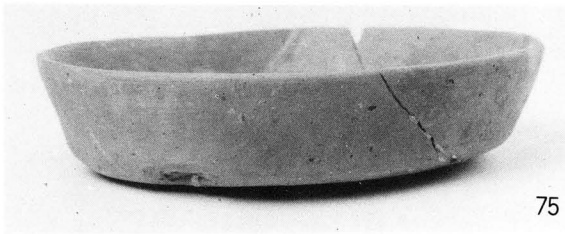
遺構検出状況・ピット

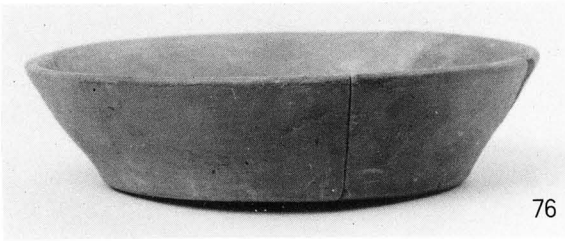
遺物出土状況

遺物出土状況

35

50

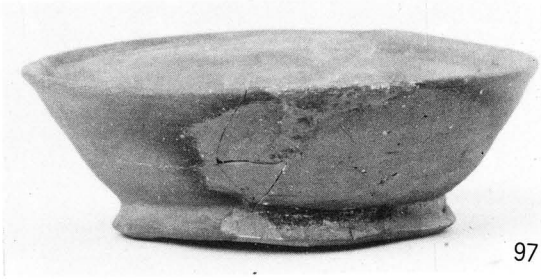

75

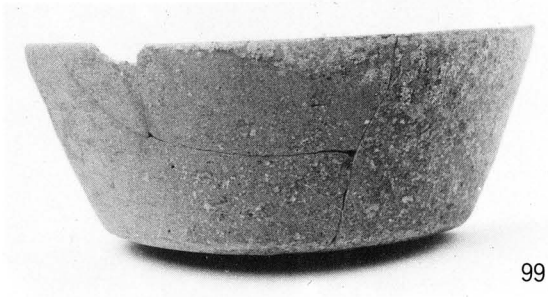

76

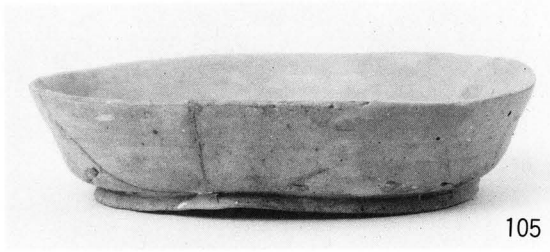
89

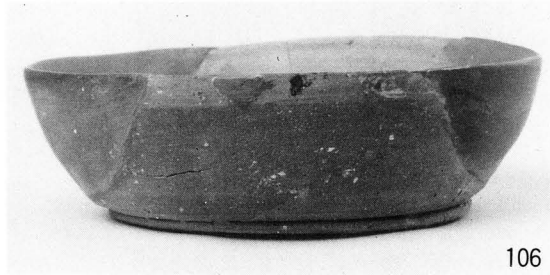
94

98


97


99


105

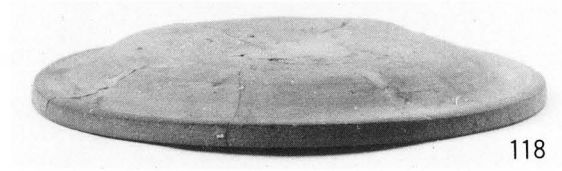

106

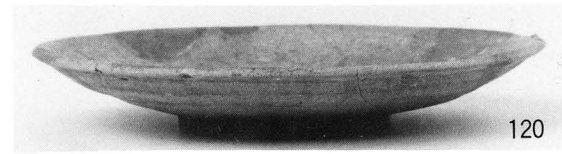
107

108

112

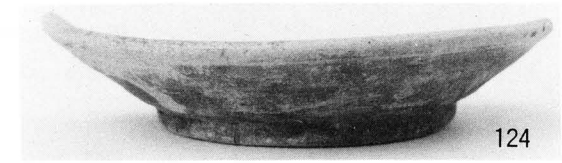
115


118

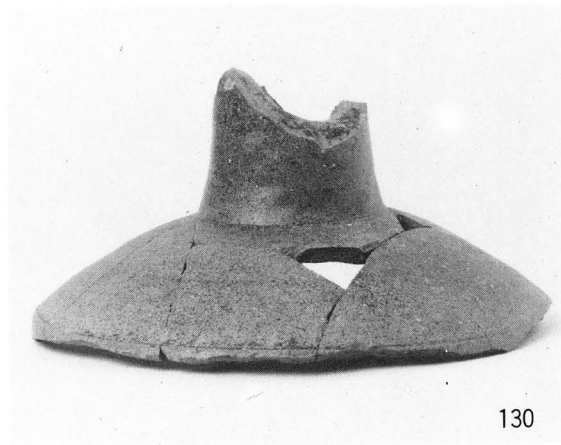

120

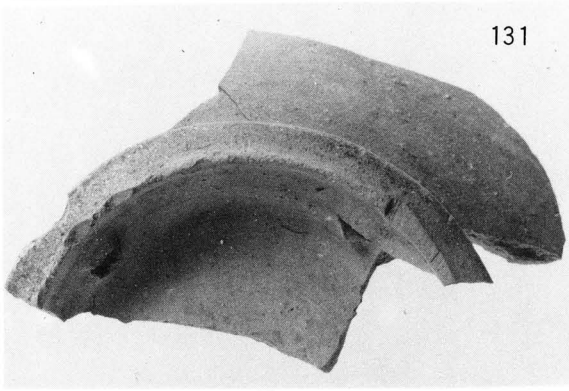
122

121


124

129

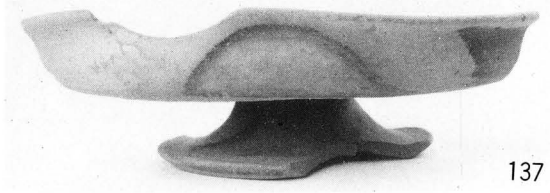

130


131

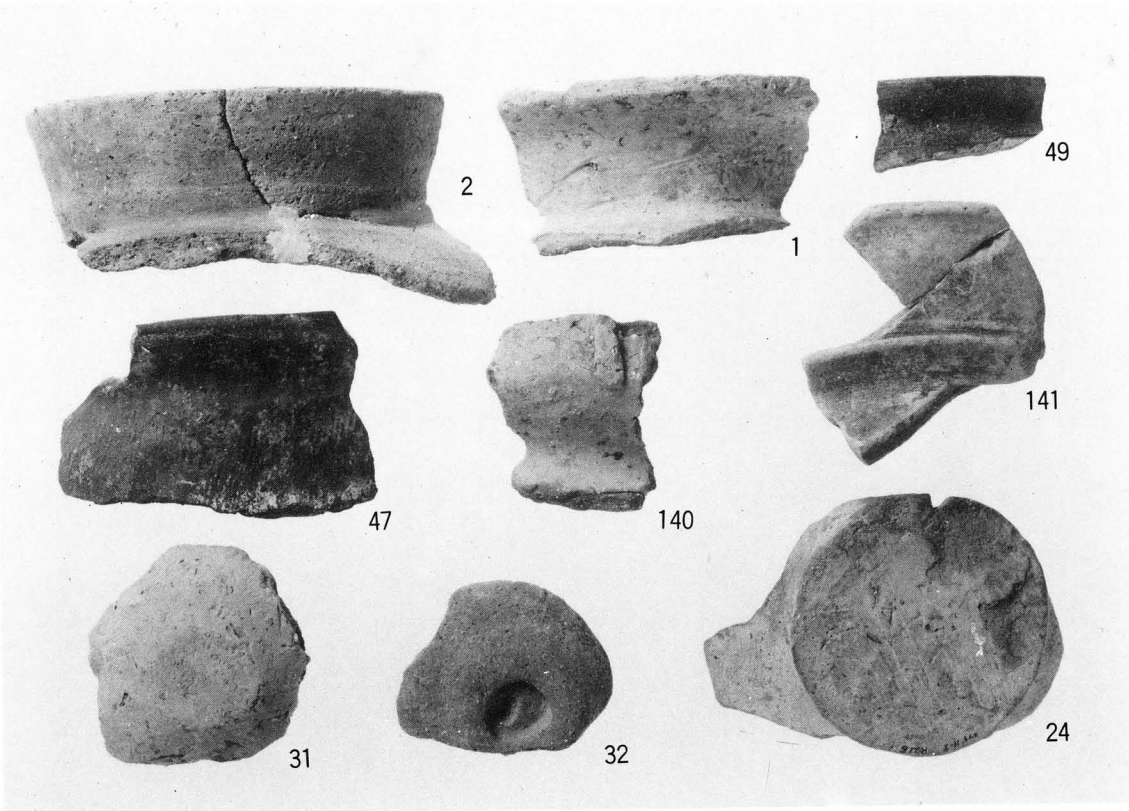
132

135

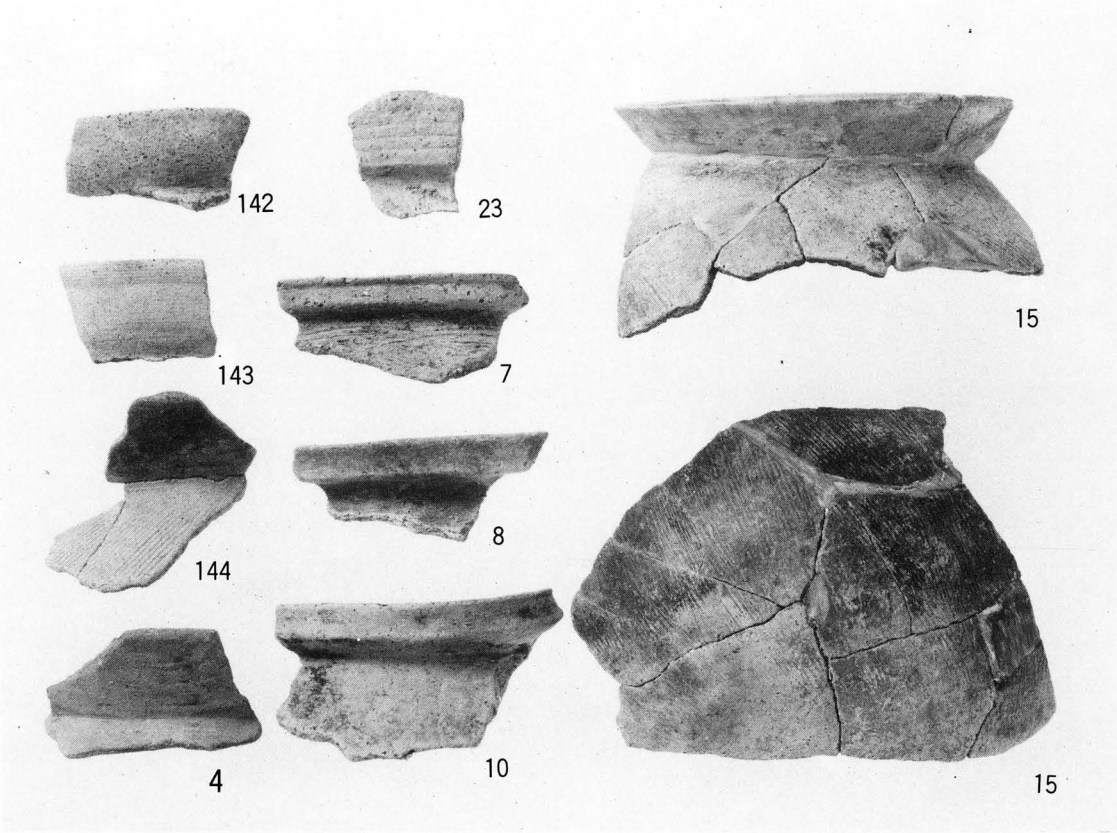
133


137

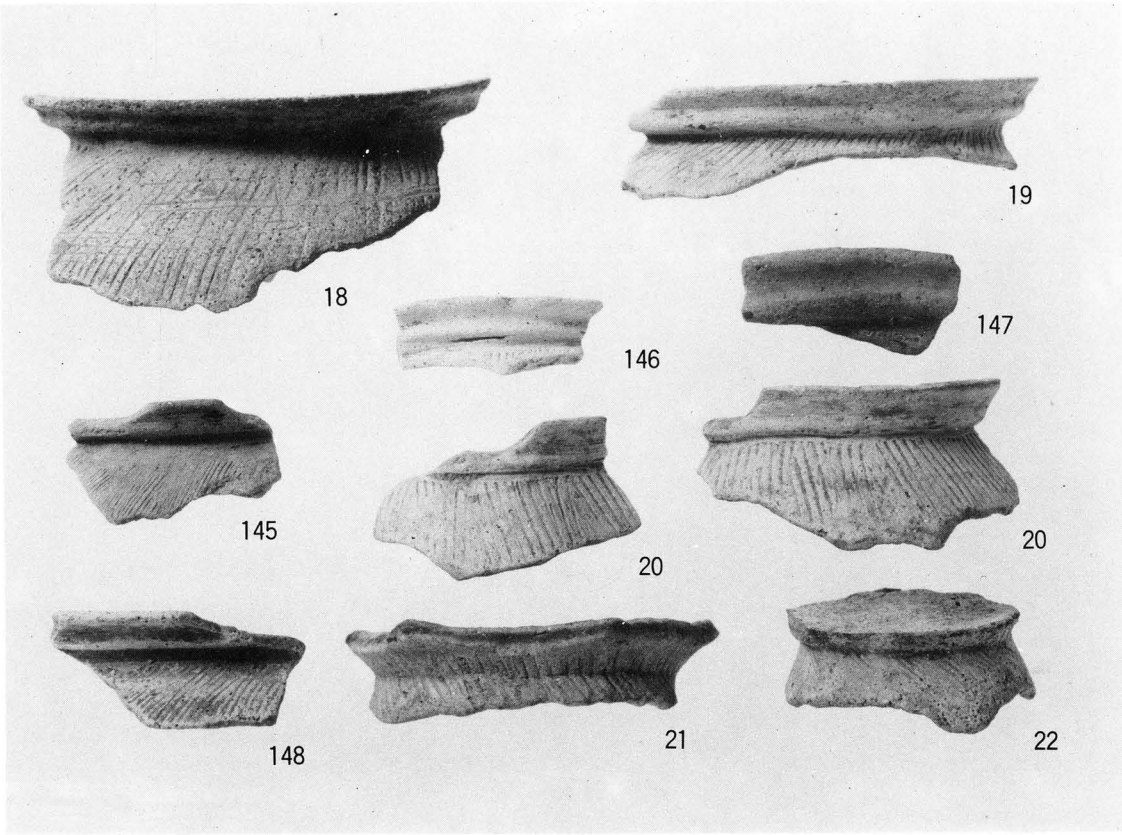
139



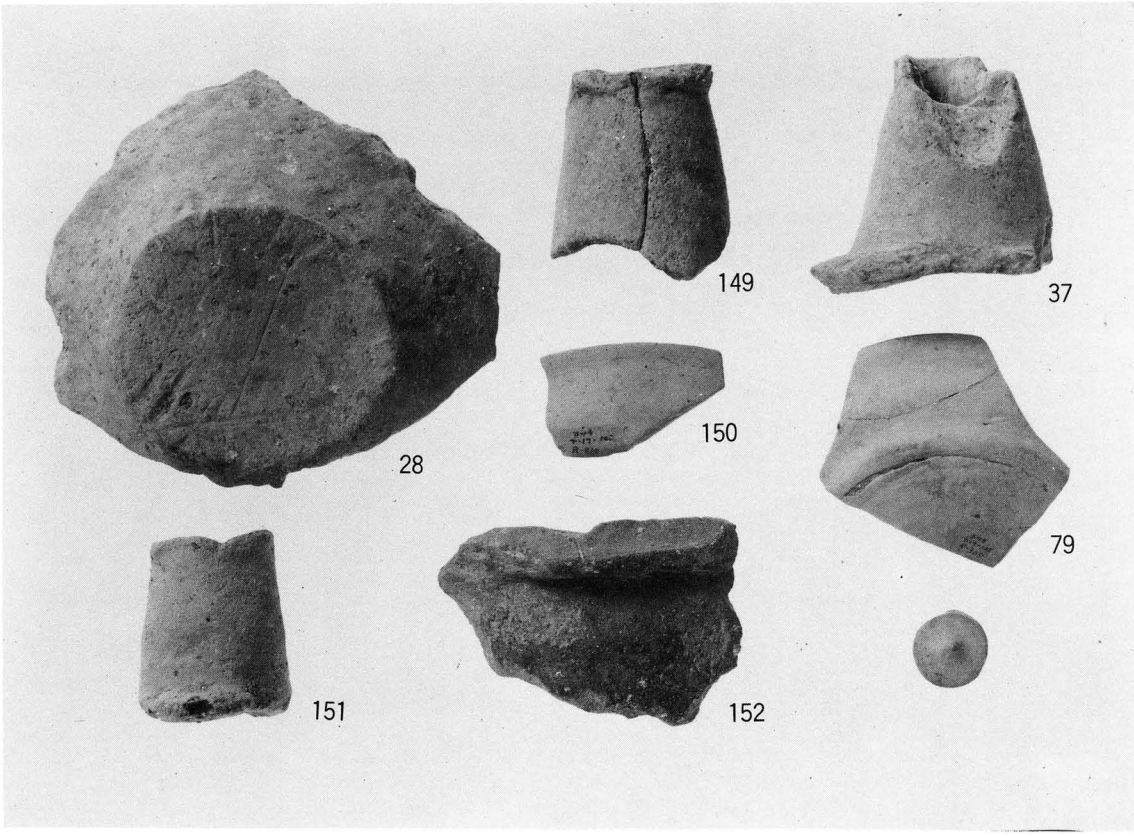
古式土師器



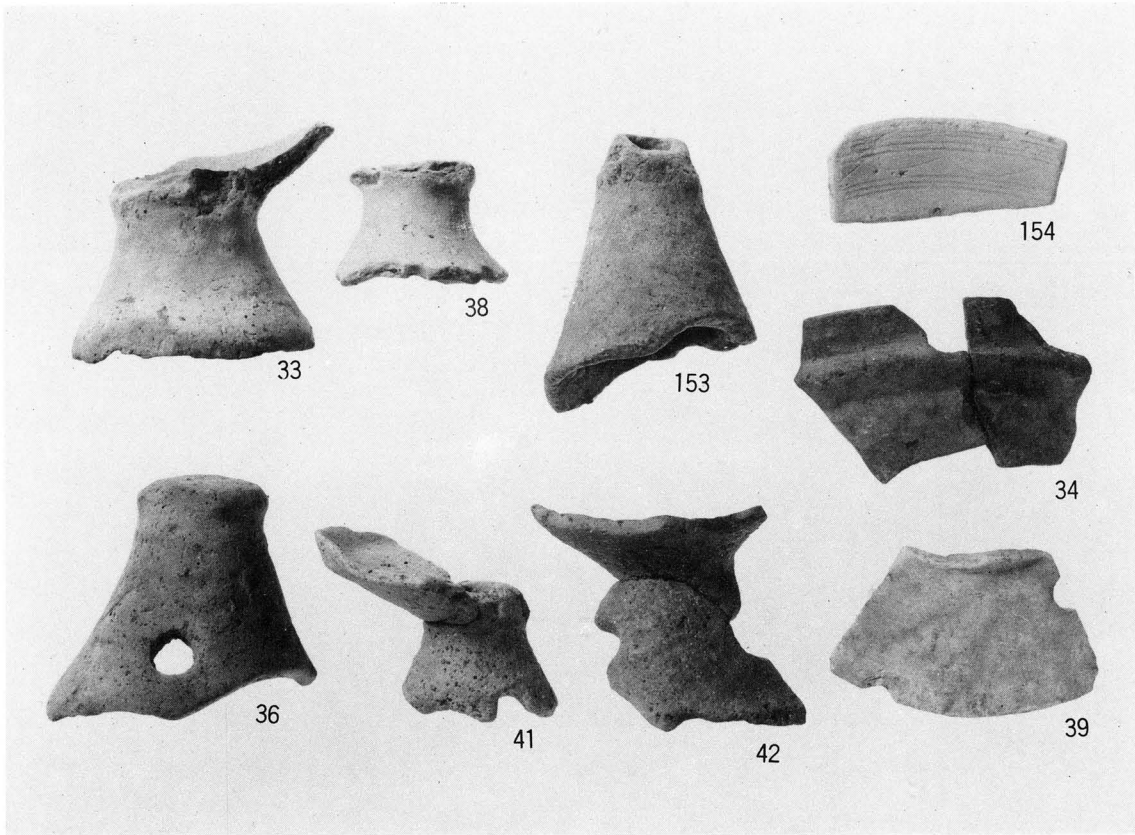
古式土師器



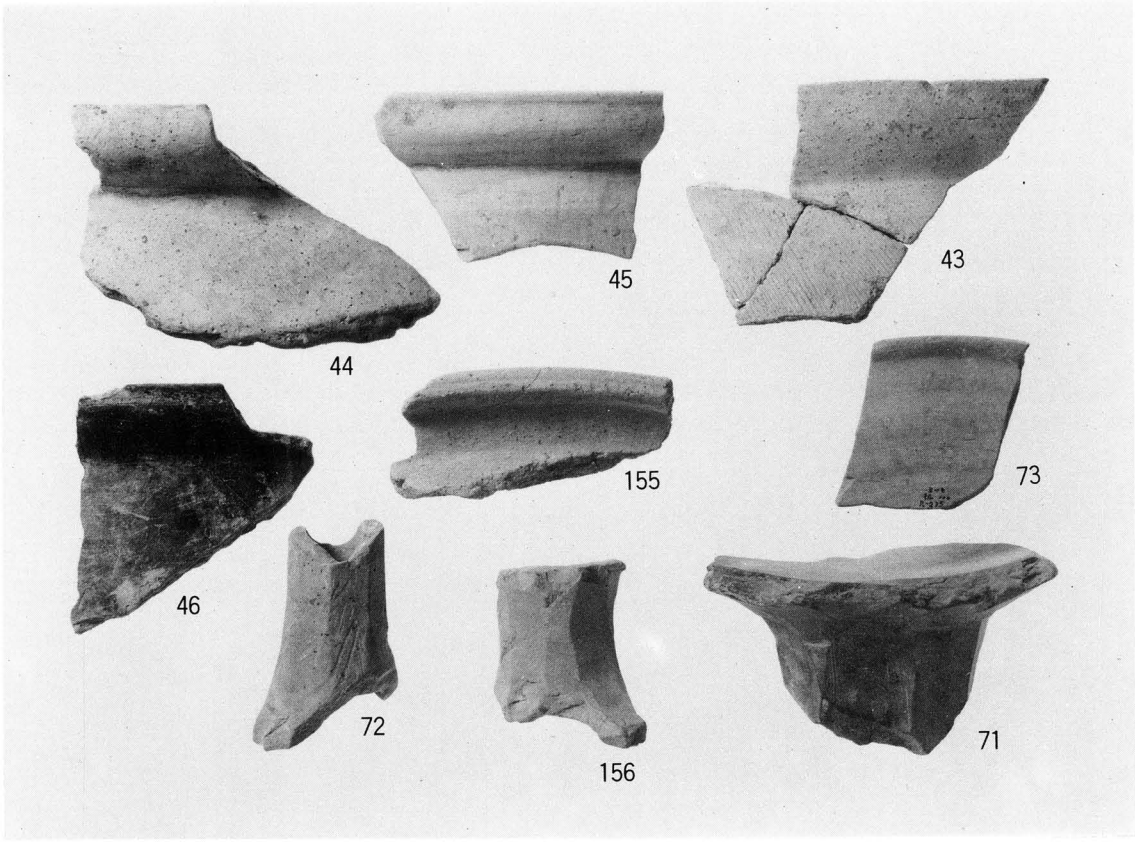
古式土師器



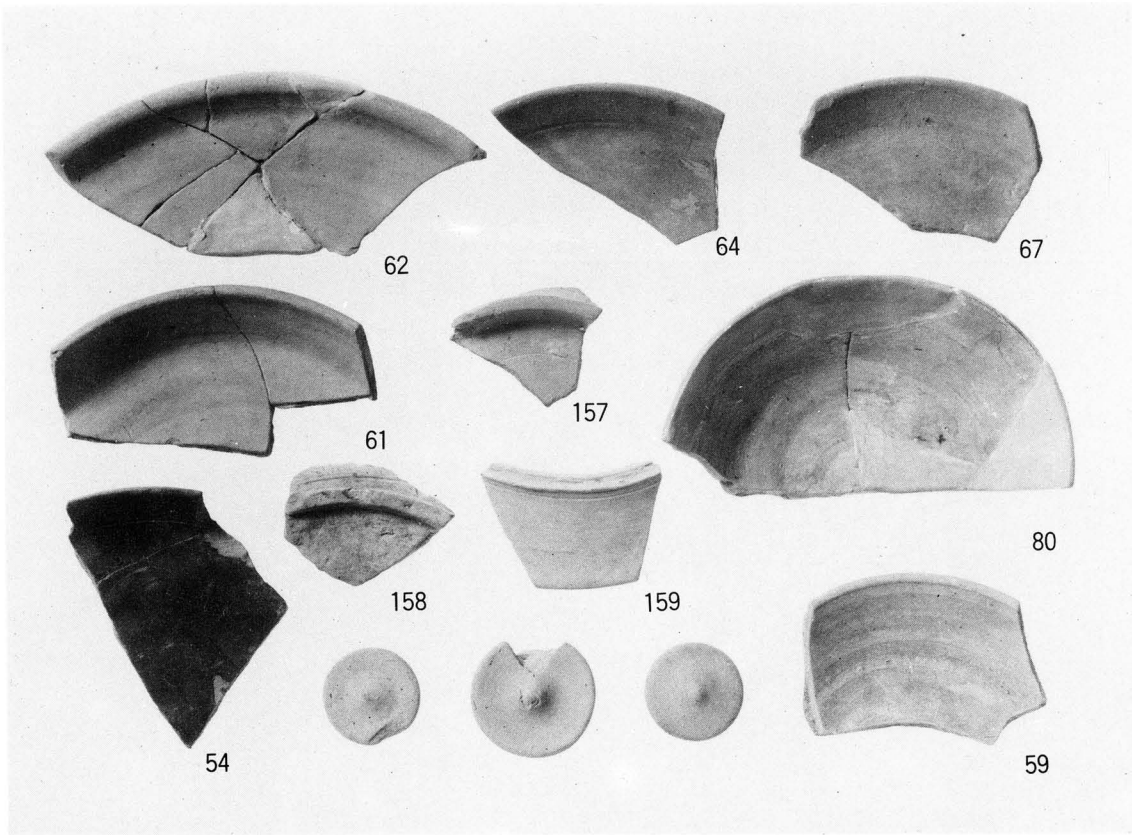
古式土師器・土師器



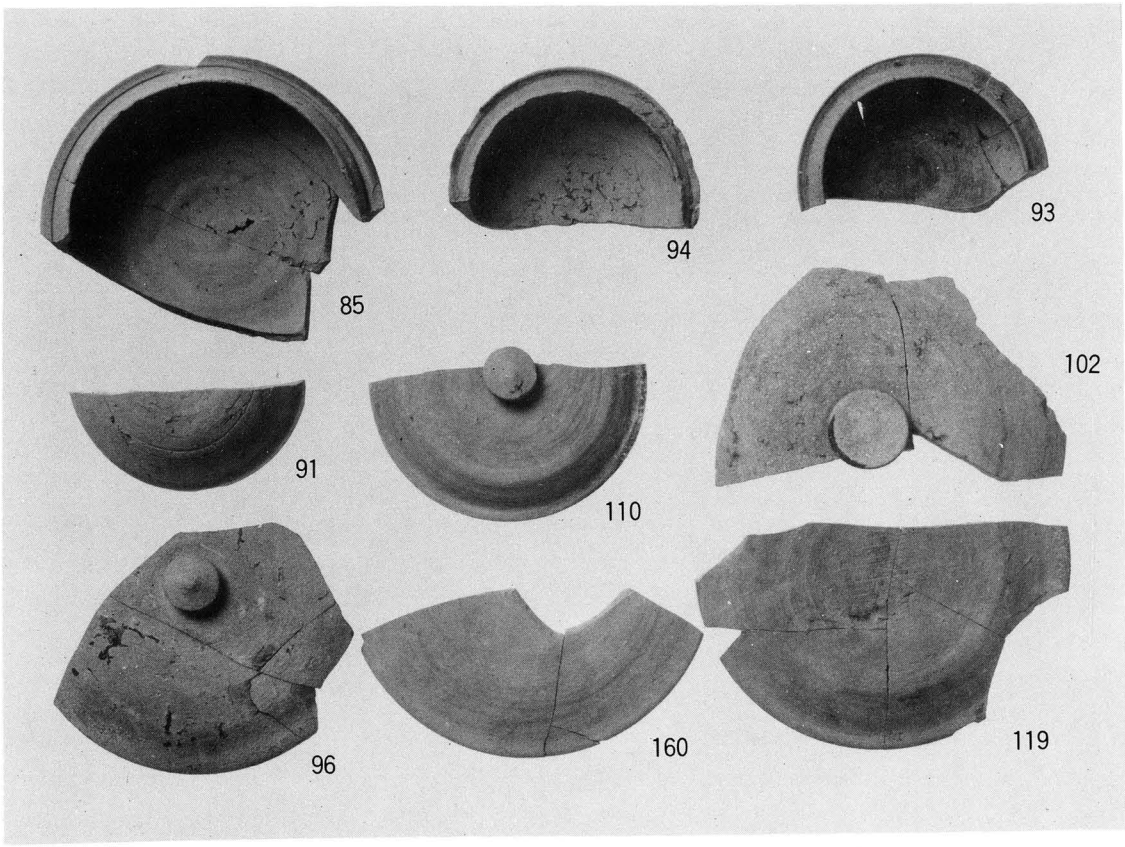
古式土師器



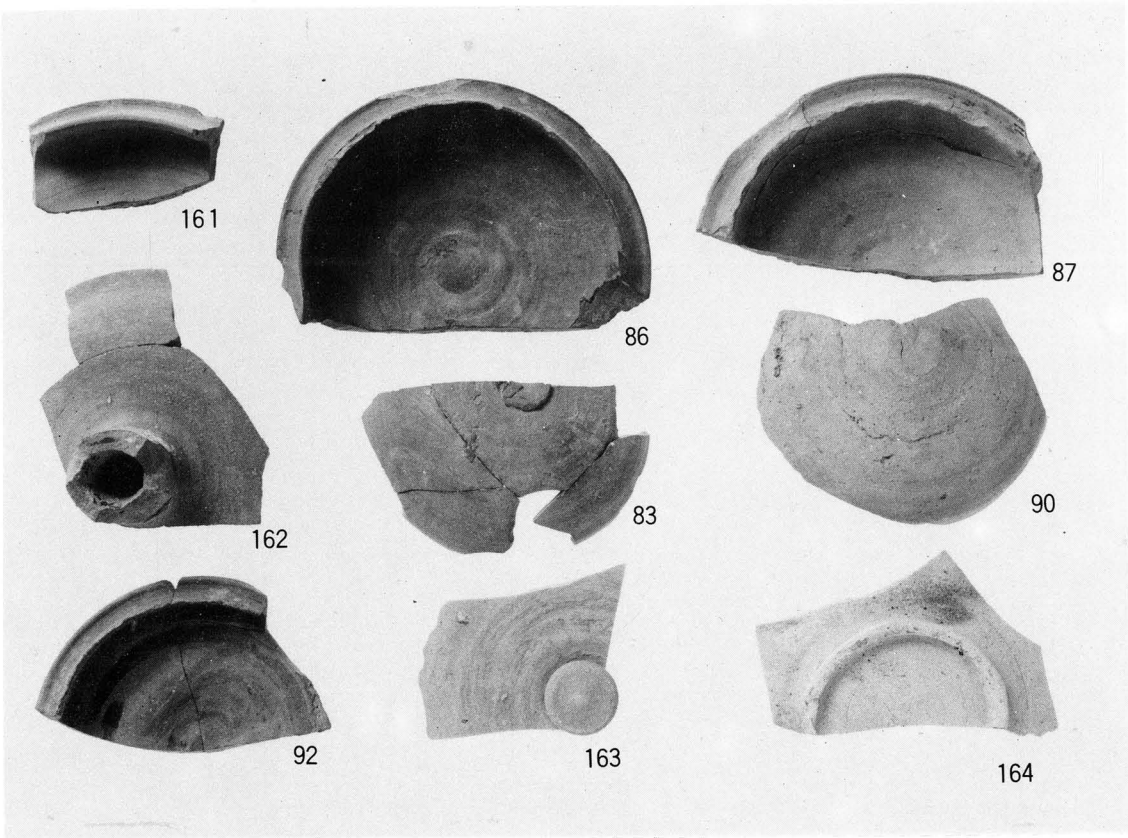
土師器



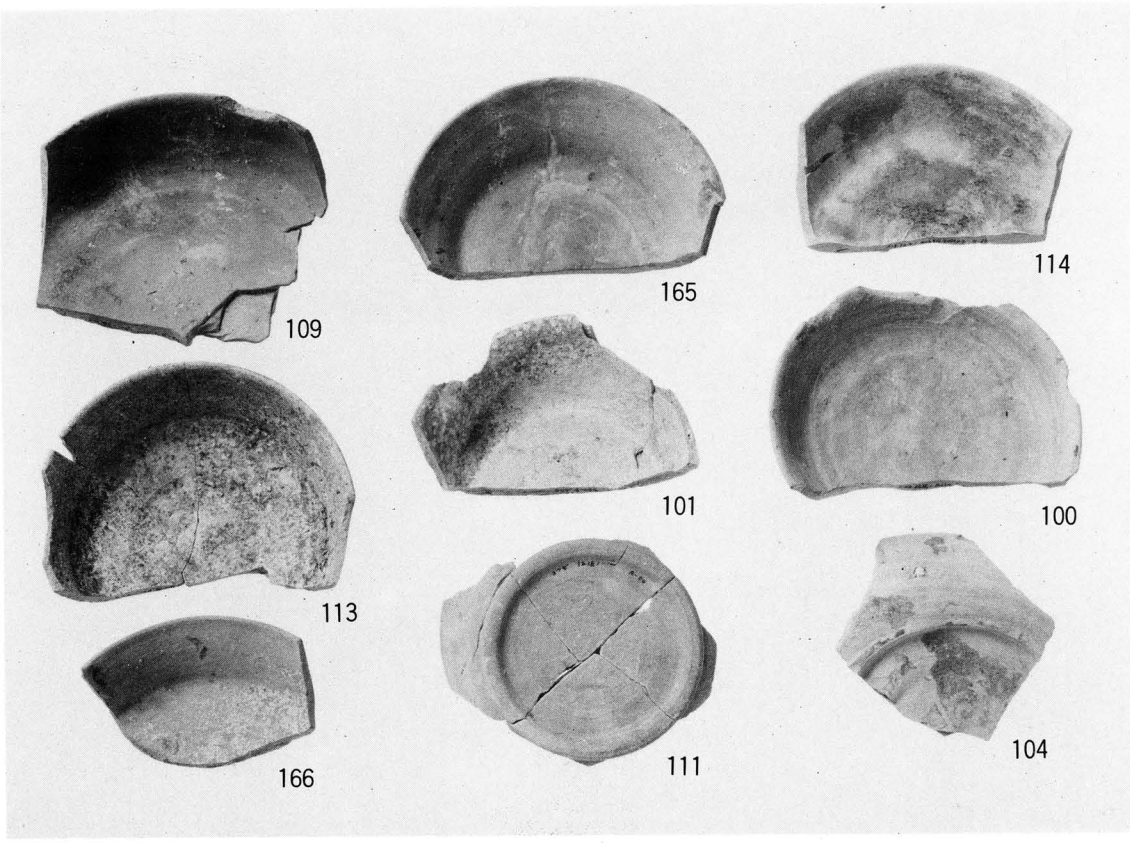
土師器



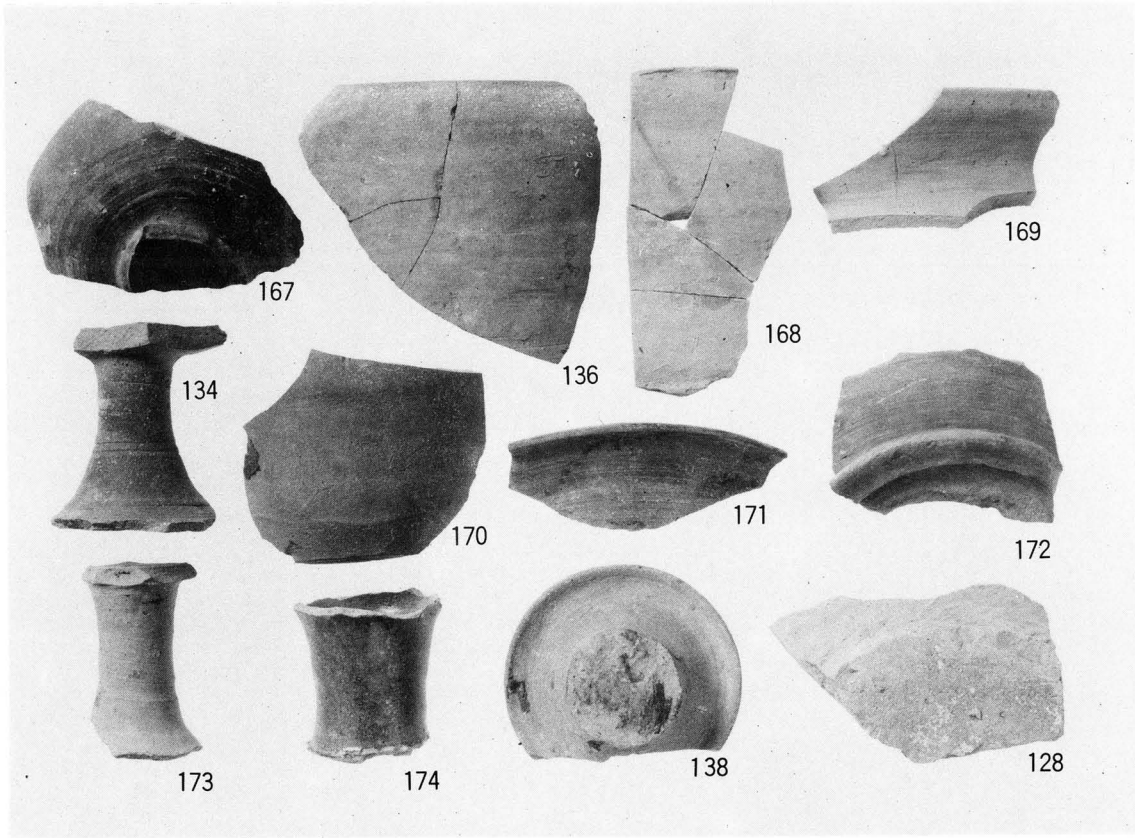
須恵器



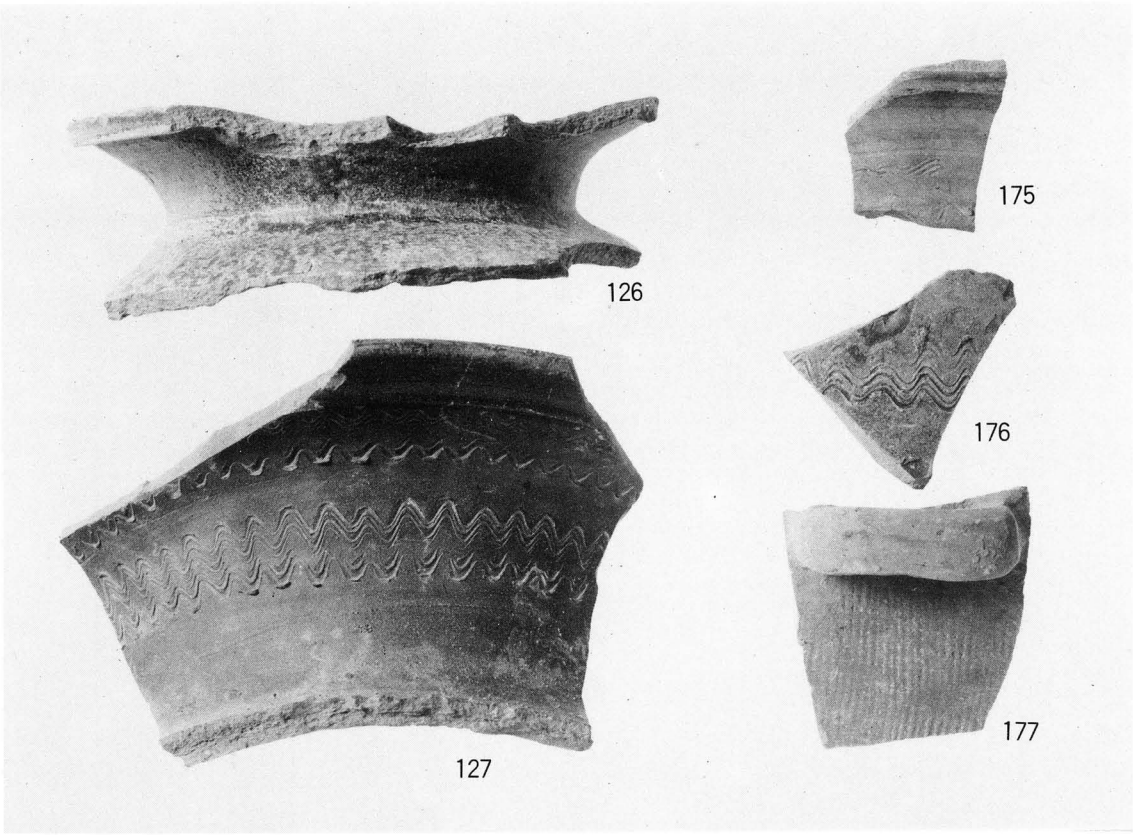
須恵器・灰釉陶器


109
165
114
101
100
113
111
104
166

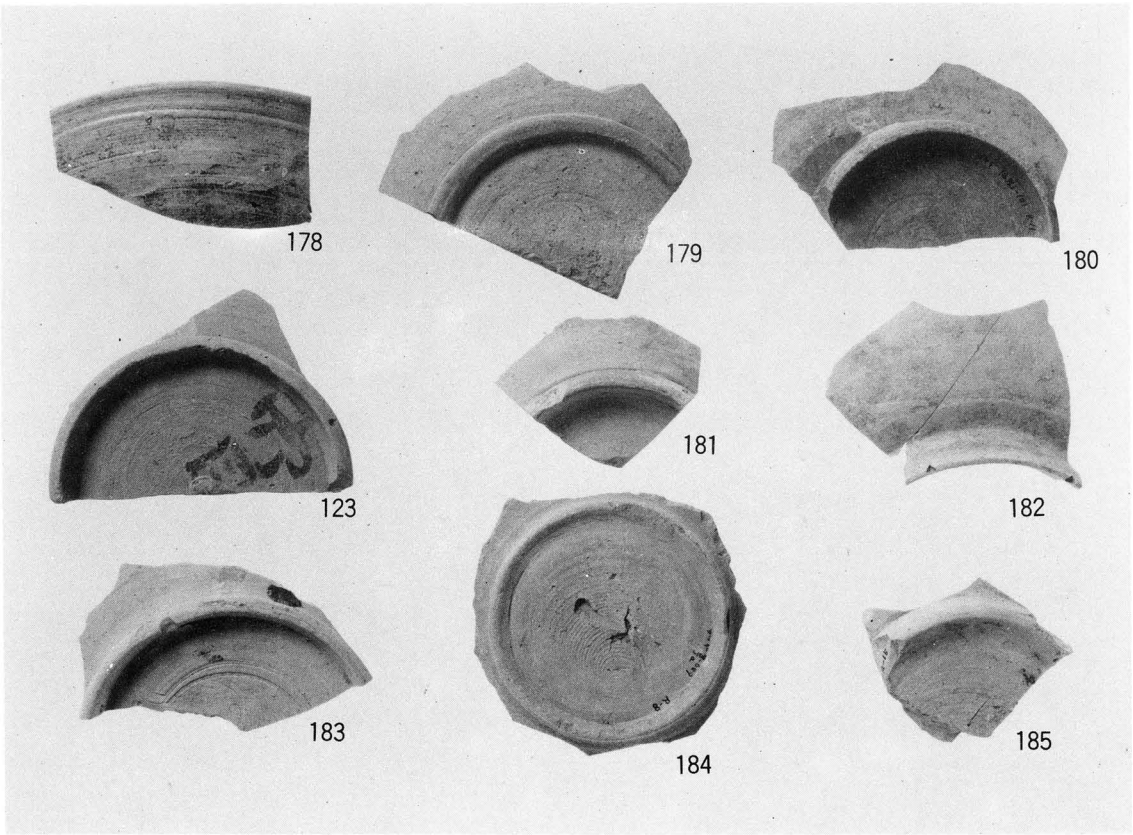
須恵器


167
136
168
169
134
170
171
172
173
174
138
128

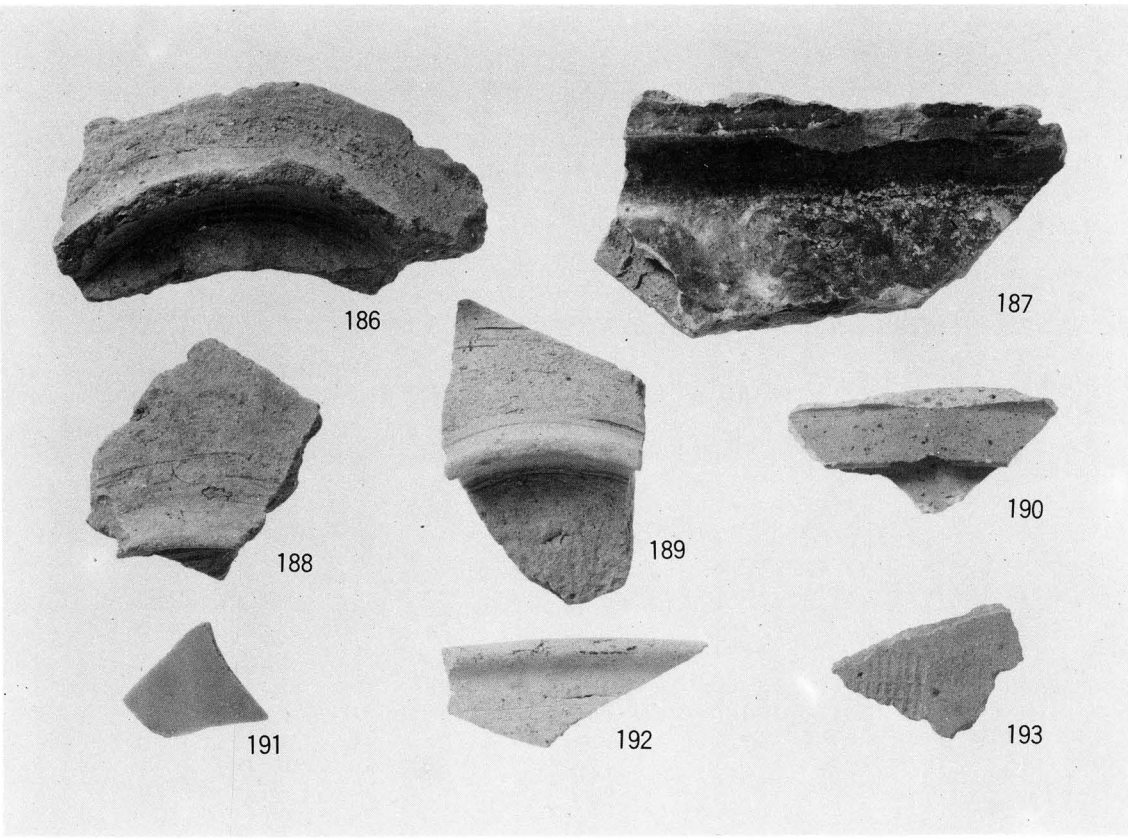
須恵器



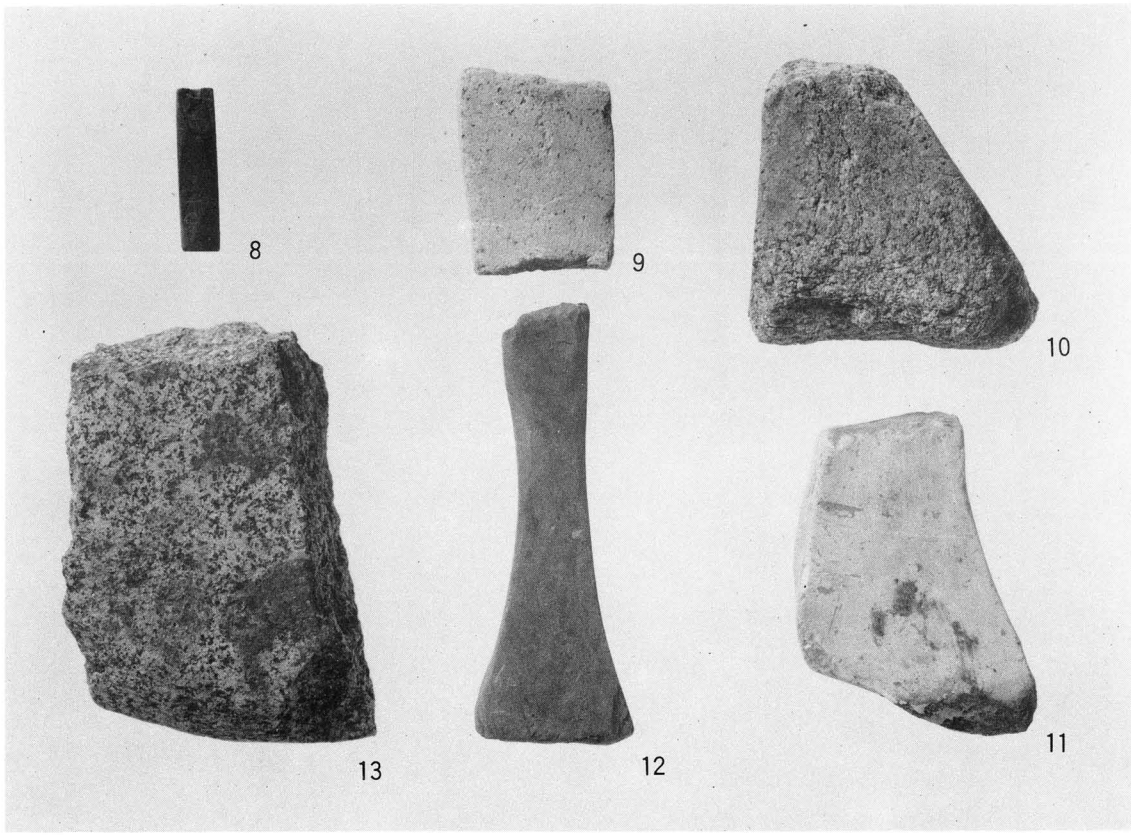
須恵器



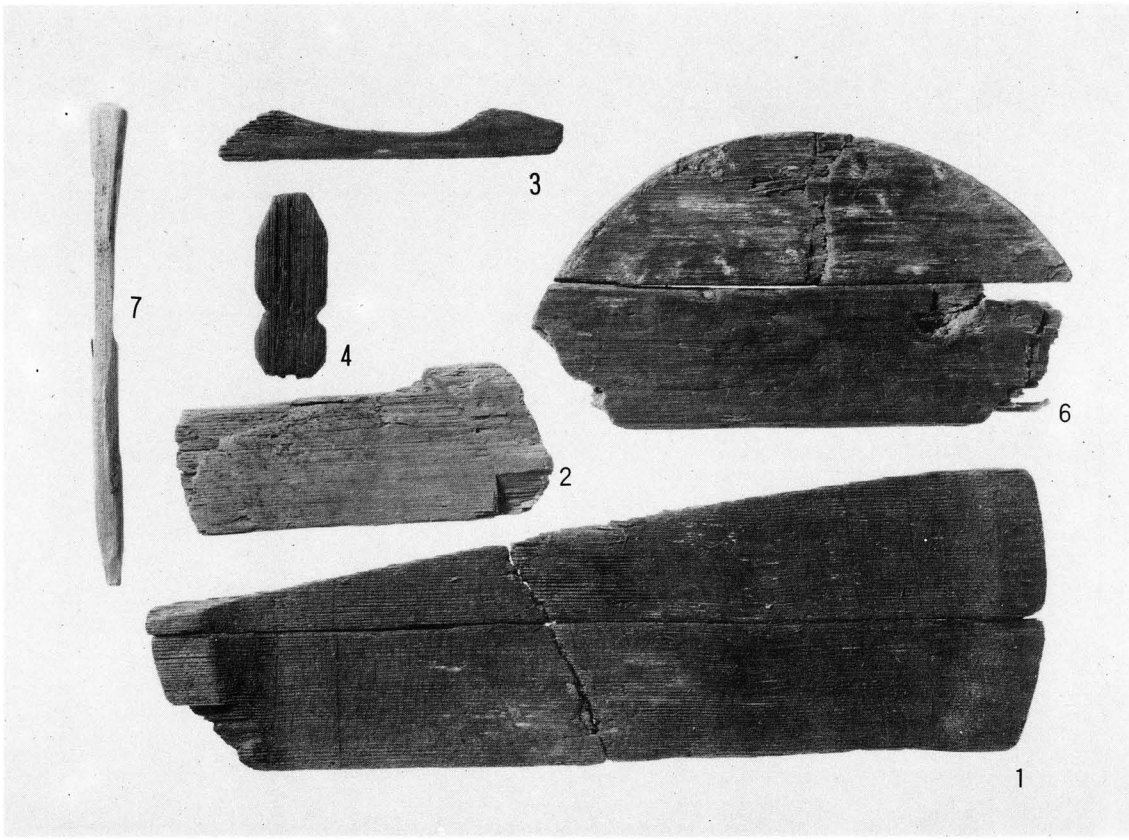
灰釉陶器



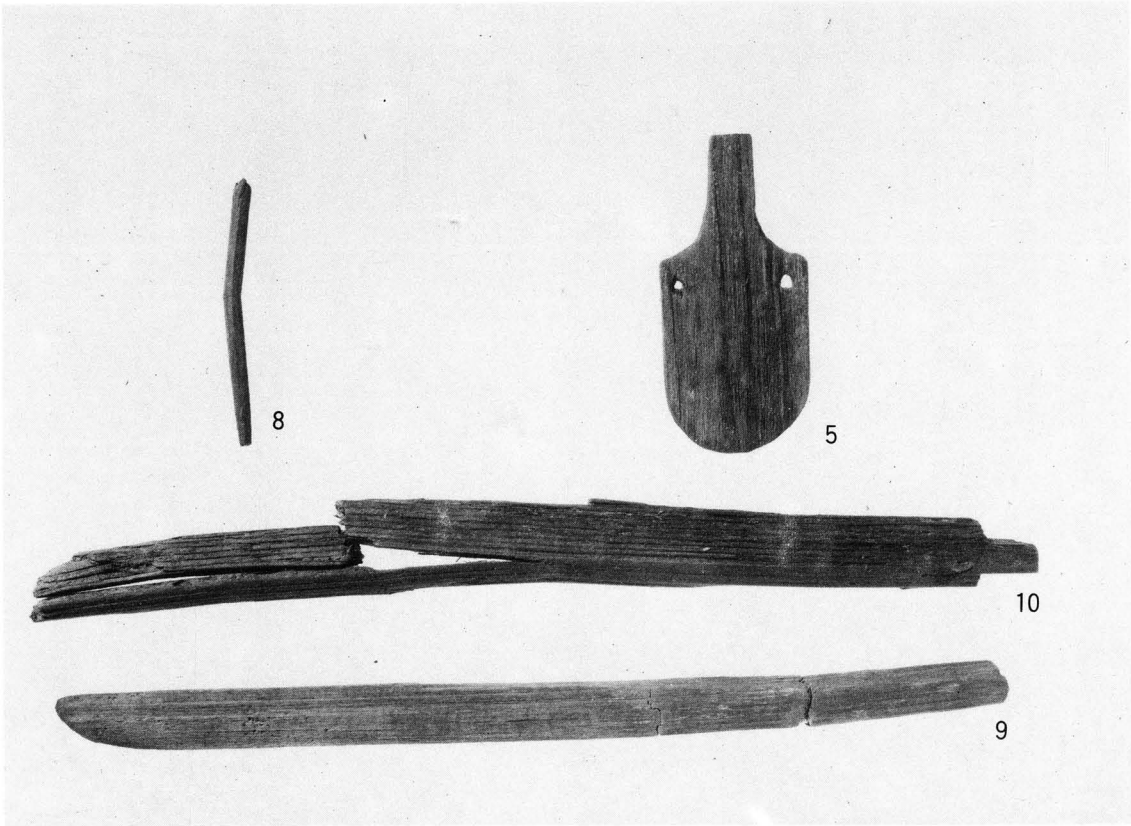
陶器・磁器



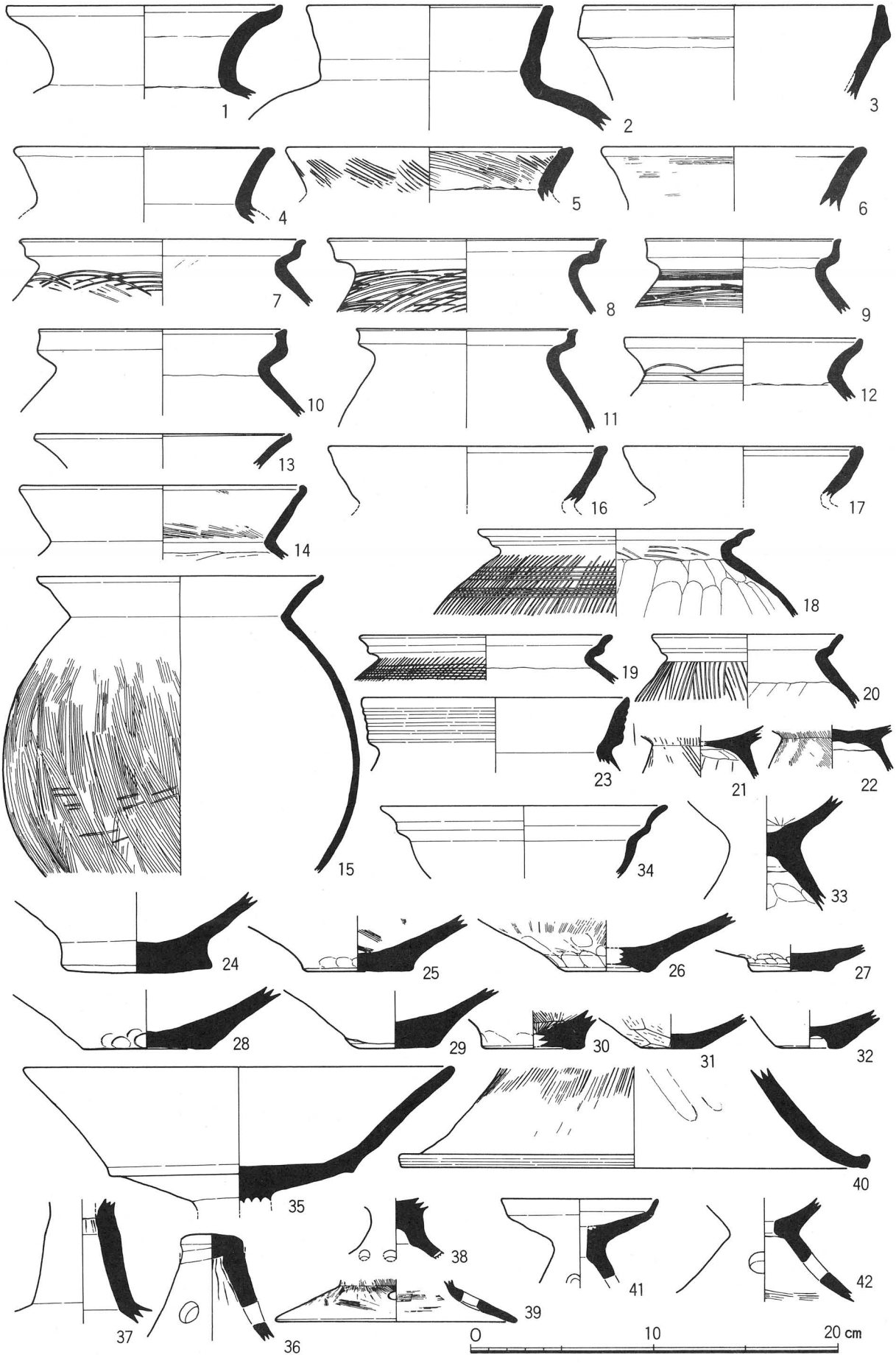
石製品

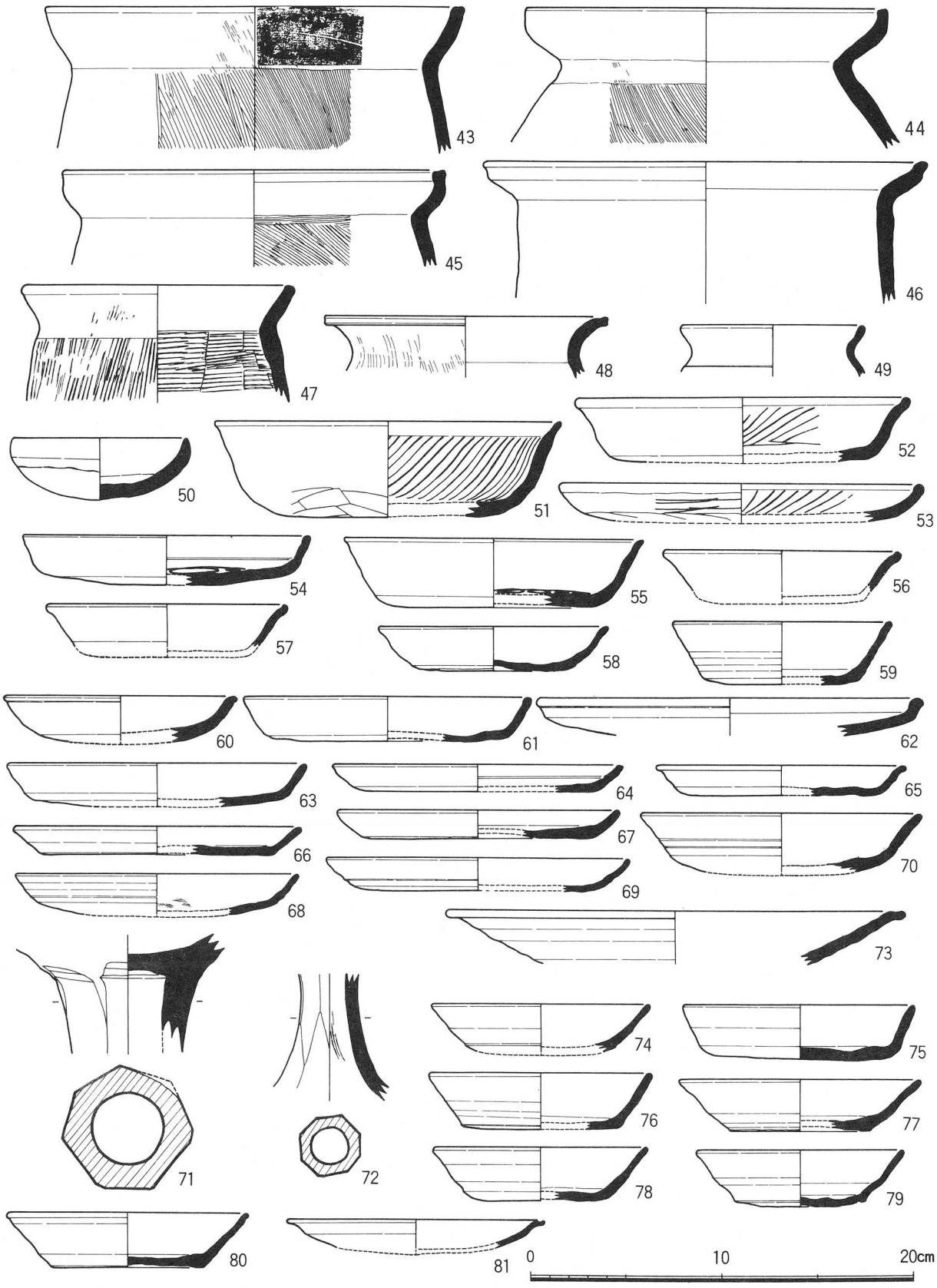


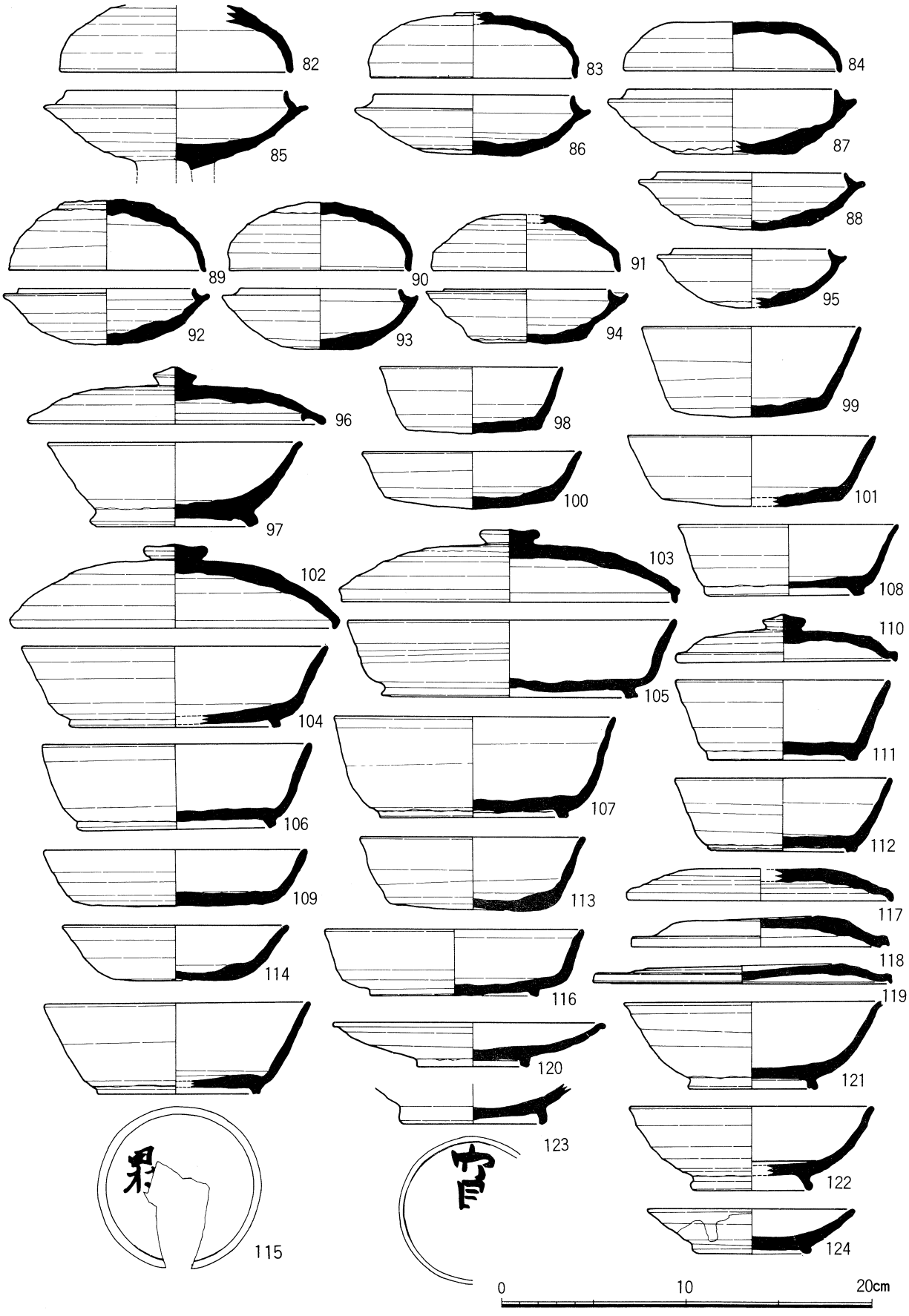
木製品

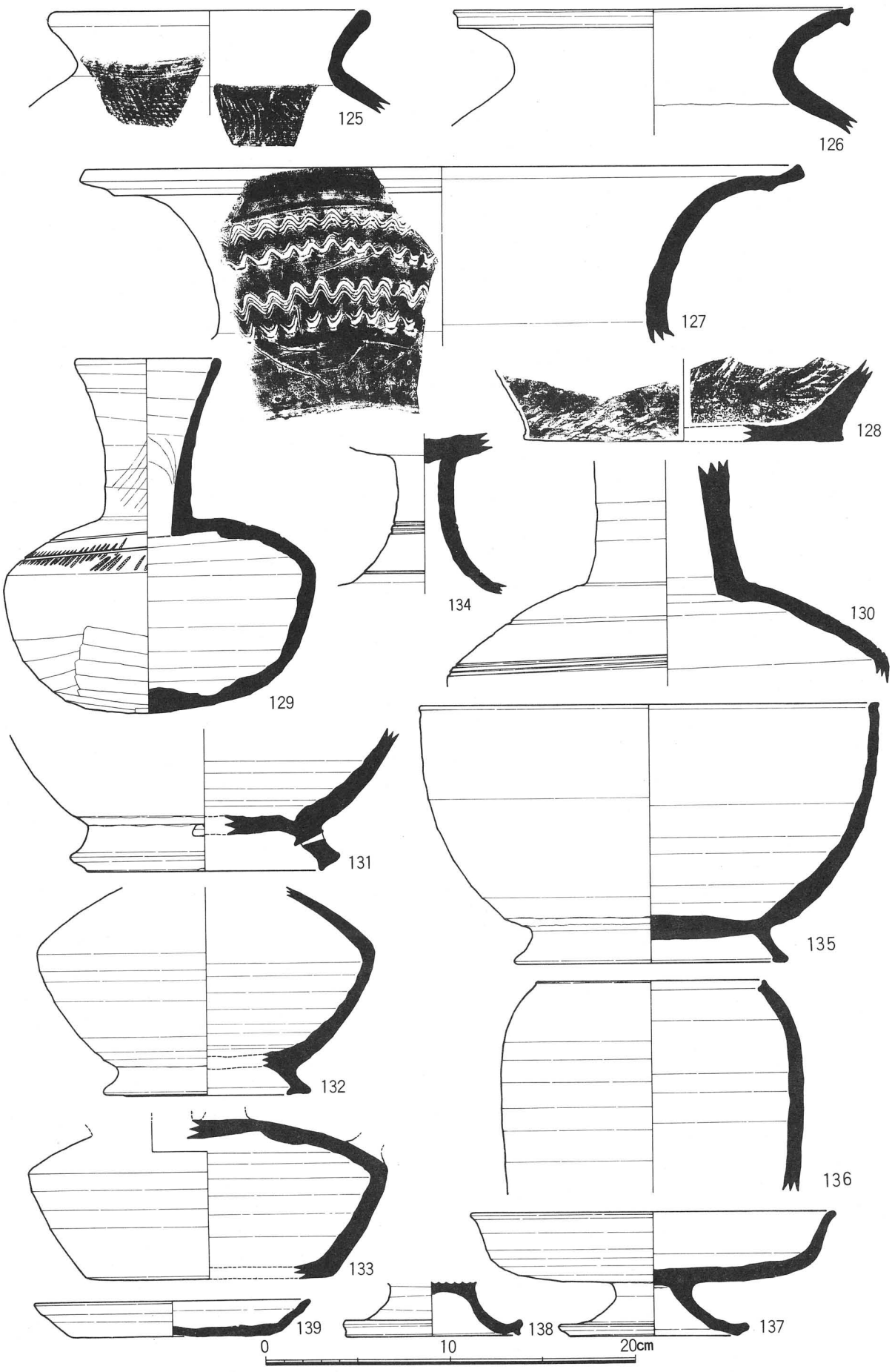


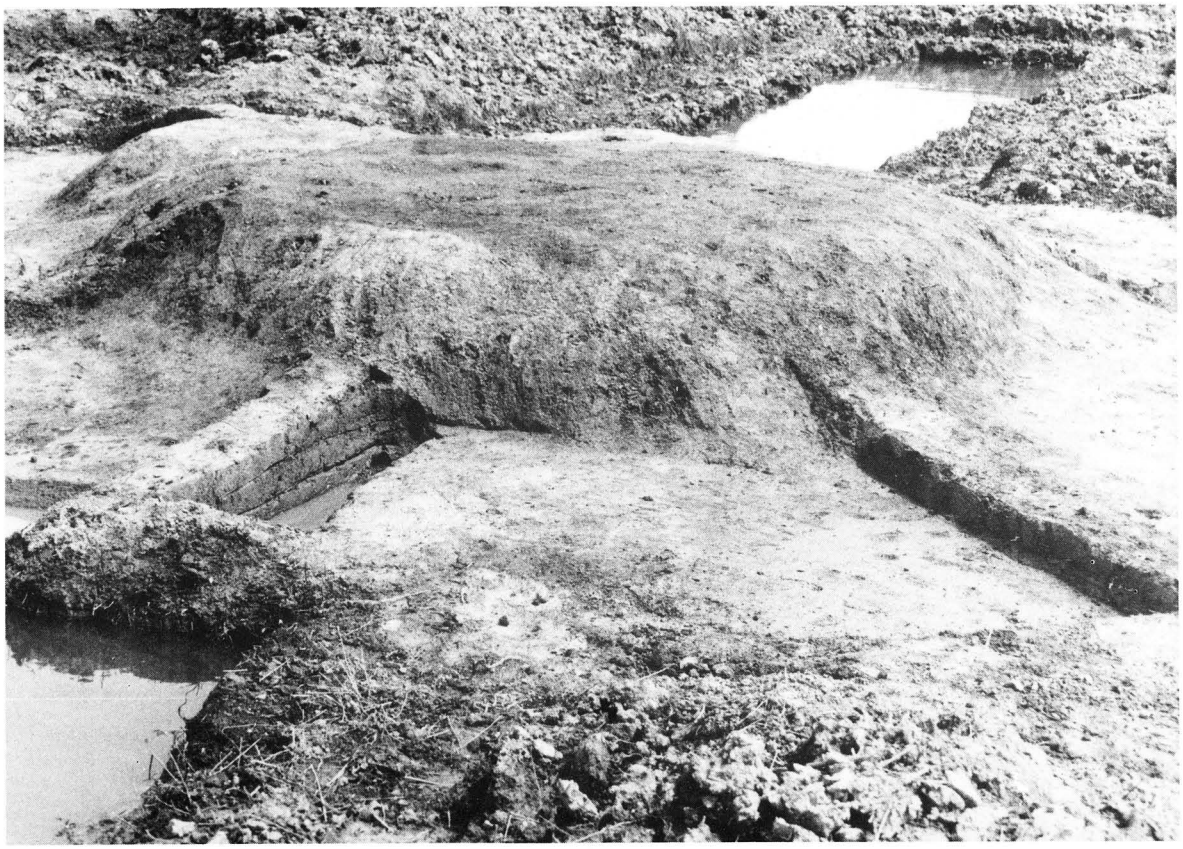
木製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
16
17
14
18
15
19
20
23
21
22
34
33
24
25
26
27
28
29
30
31
32
35
40
38
41
42
37
36
39
0
10
20 cm

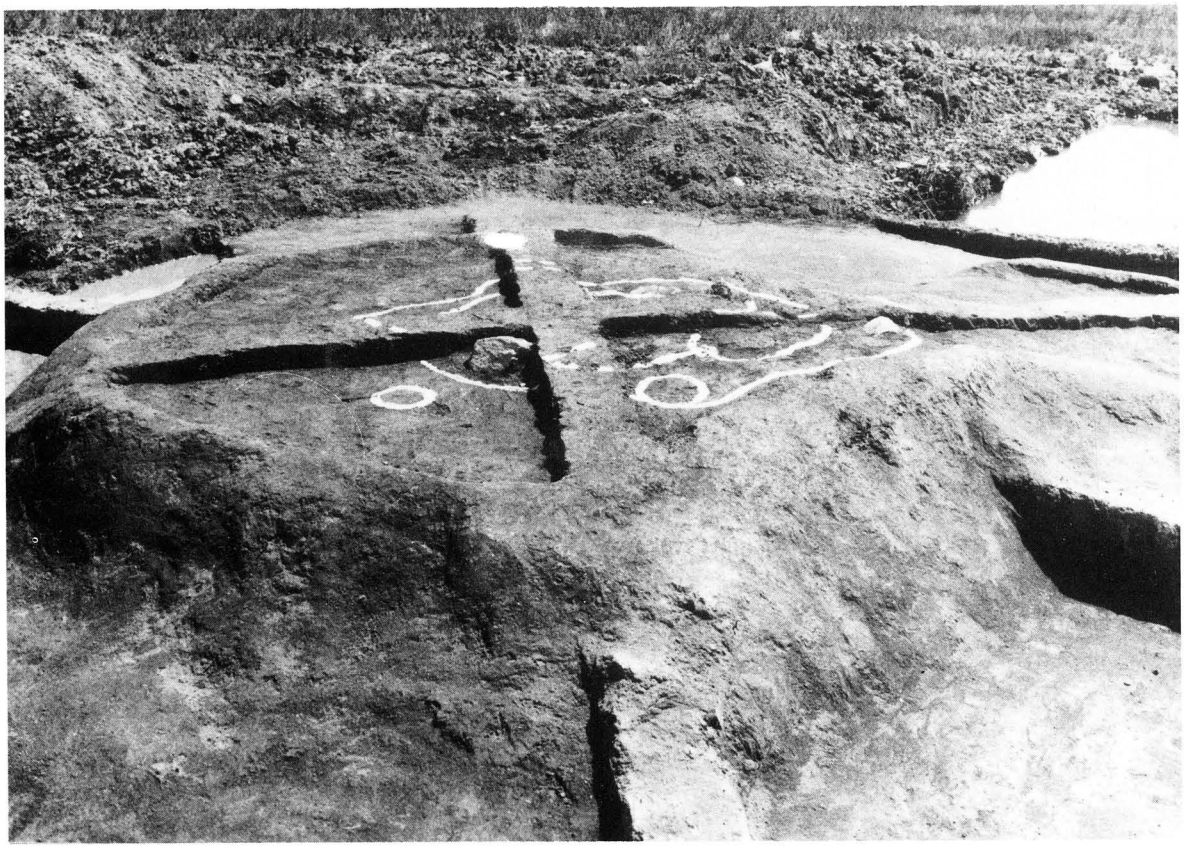

43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
0
10
20cm


82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
116
117
118
119
120
121
122
123
124
115
0
10
20cm

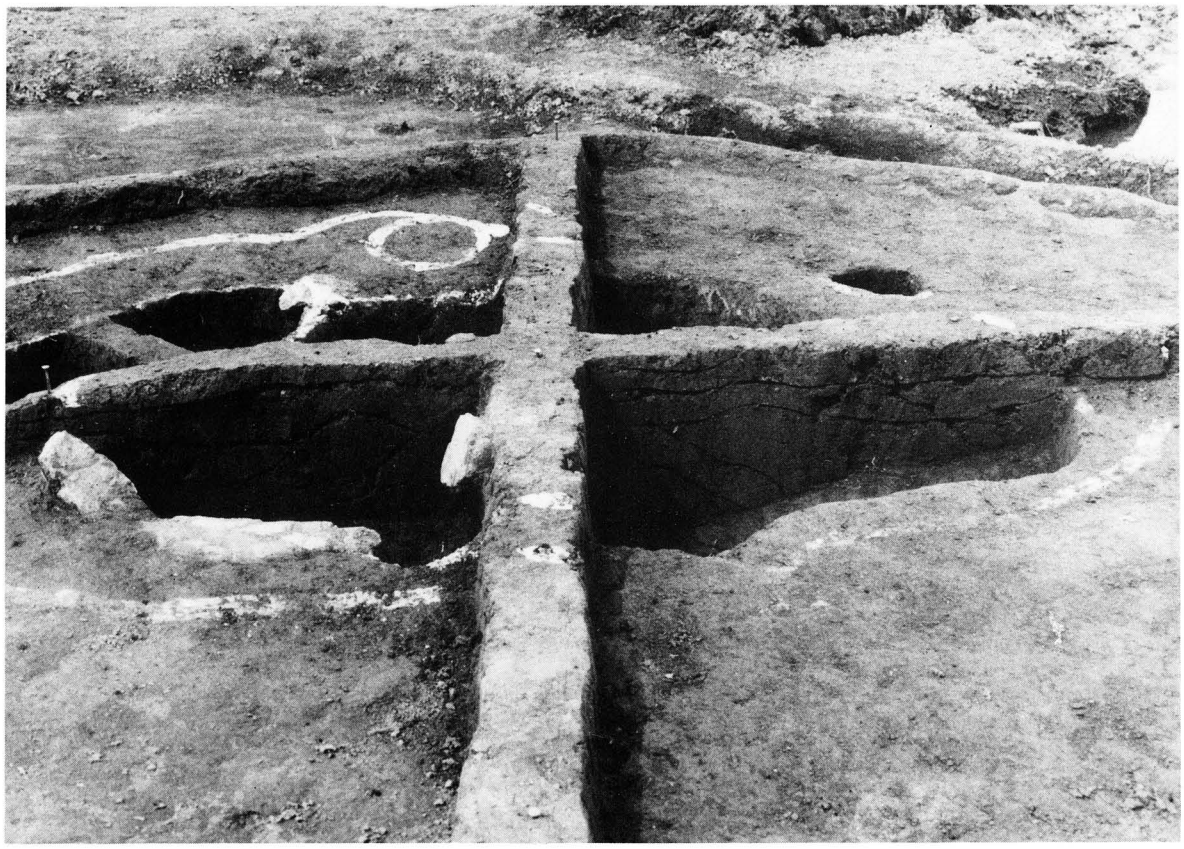

125
126
127
128
129
134
130
131
135
132
136
133
139
138
137
0
10
20cm



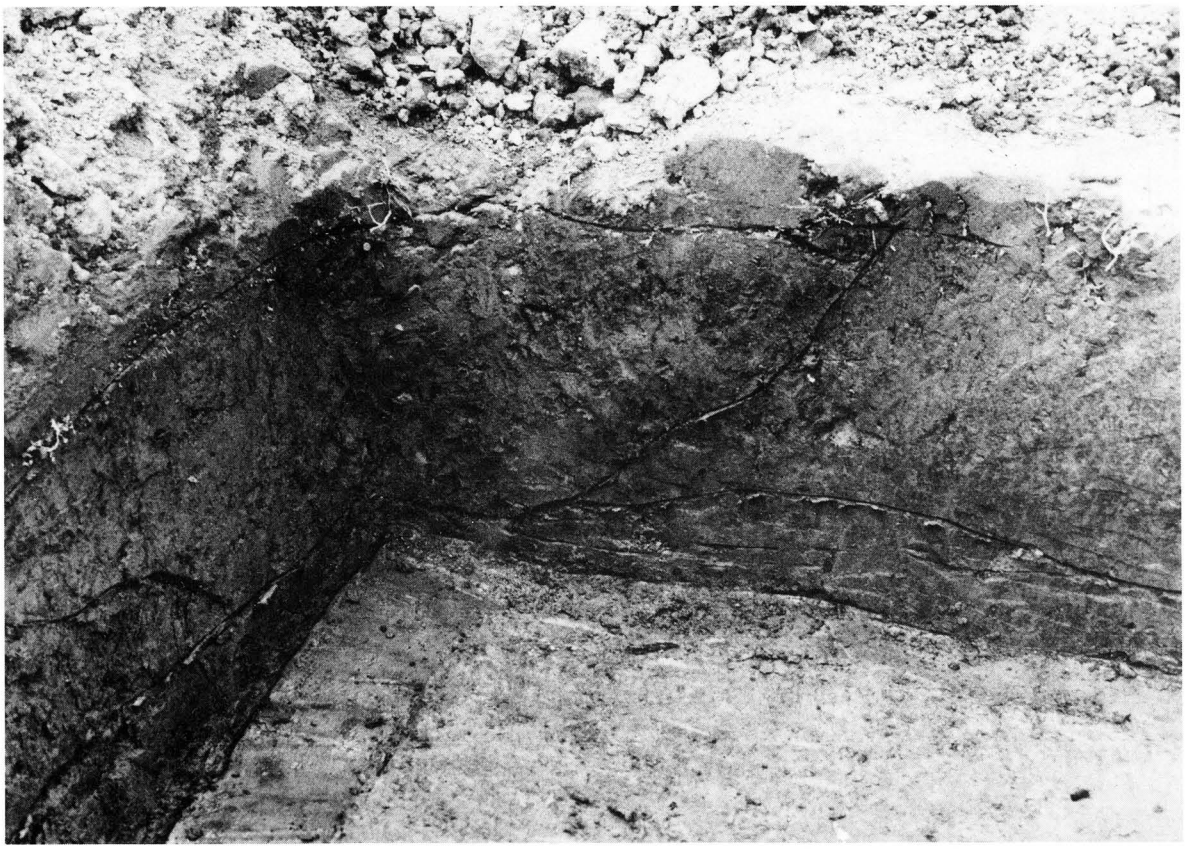
鏡塚全景（南東より）



墳頂部掘下げ状況（北東より）

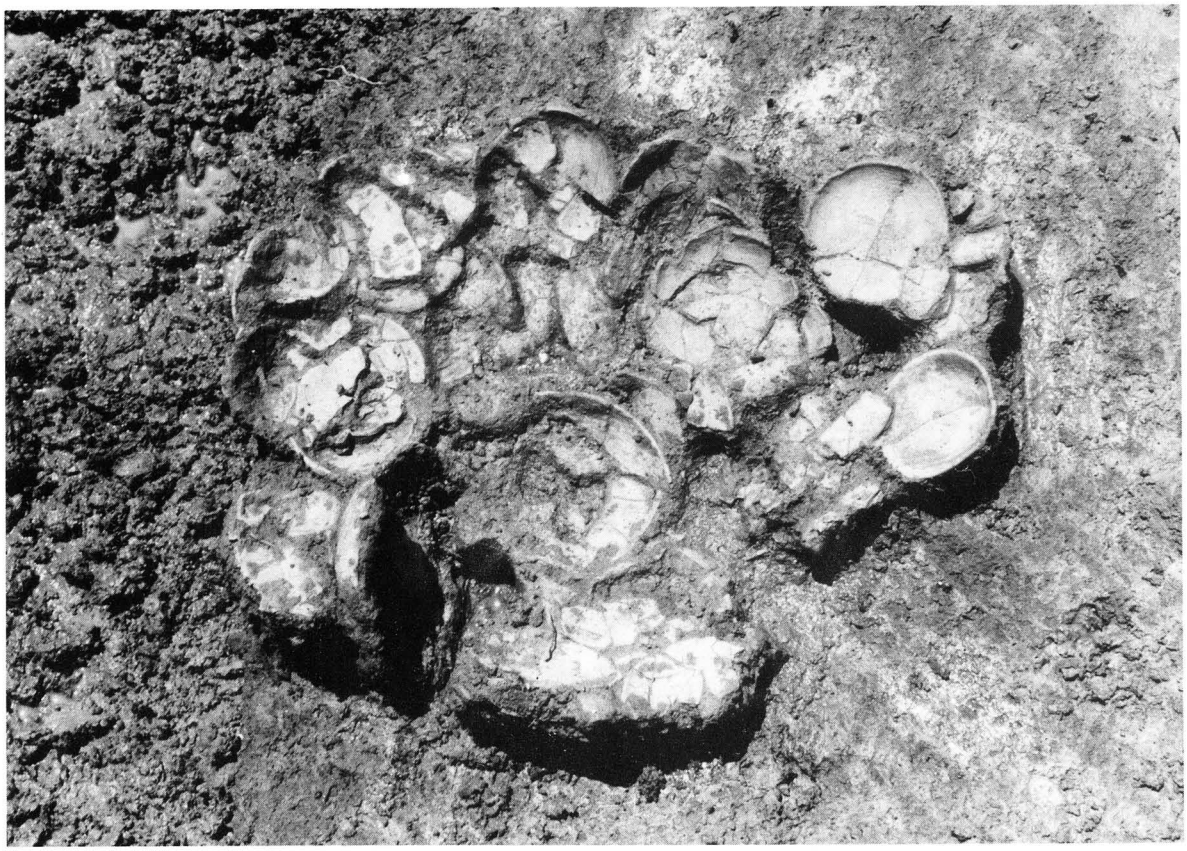


鏡塚墳頂部土壙掘下げ状況（南西より）



鏡塚断割り断面図

基底部土師質皿出土状況



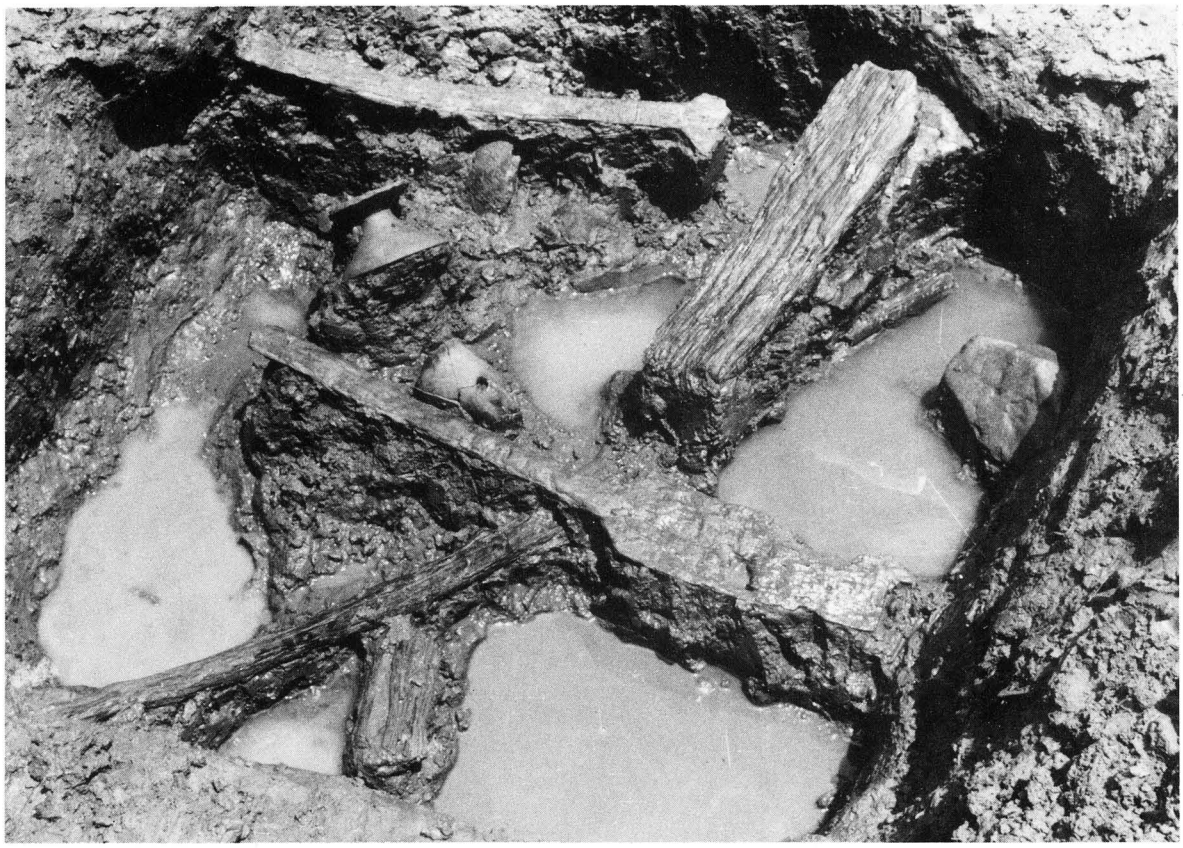
上段の拡大写真

第1トレンチ（北より）

第2トレンチ中央部（西より）

ＳＥ００１遺物出土状況（南より）

ＳＥ００１遺物取上げ後（南より）

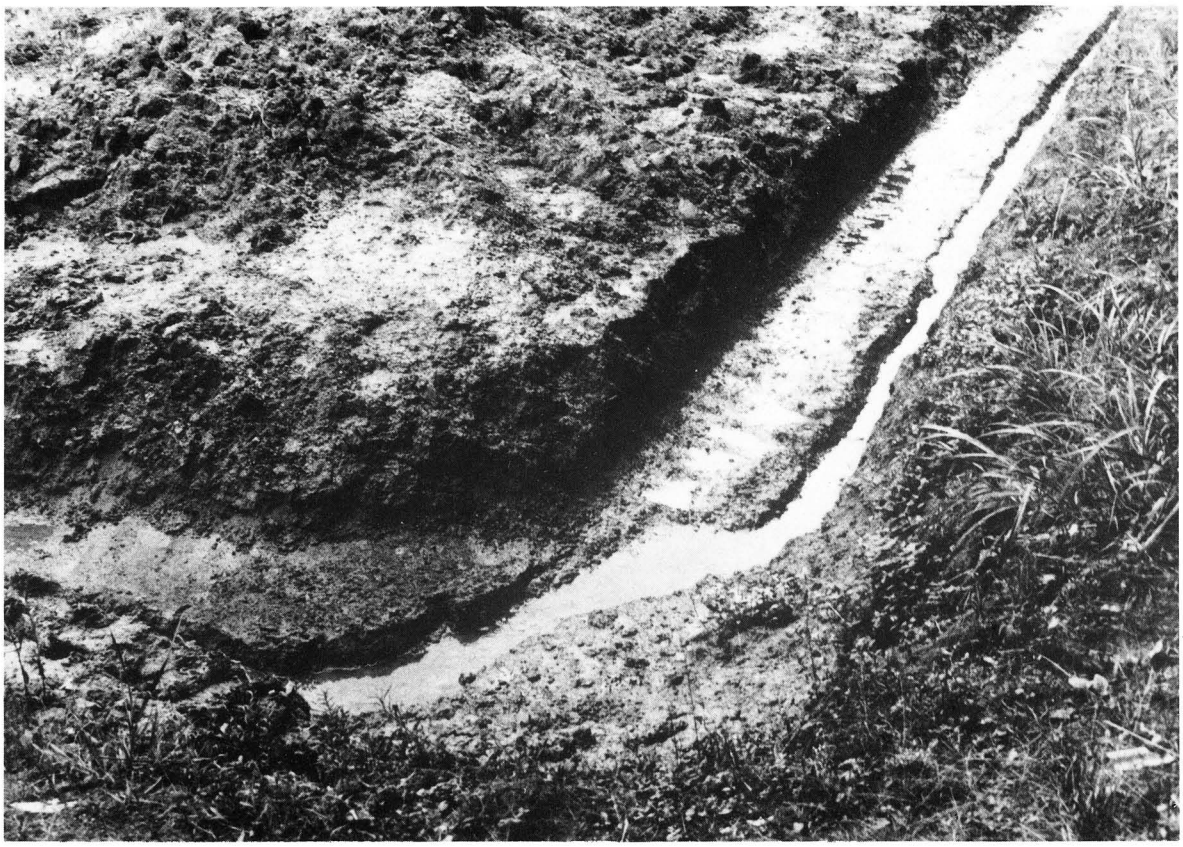


ＳＥ００１遺物出土状況（西より）

ＳＥ００１遺物出土状況（拡大）

第６トレンチ掘削前（東より）

第６トレンチ西部（東より）



第6トレンチ中央部（北より）

第6トレンチ東部自然河川（西より）

第６トレンチ東部自然河川（東より）

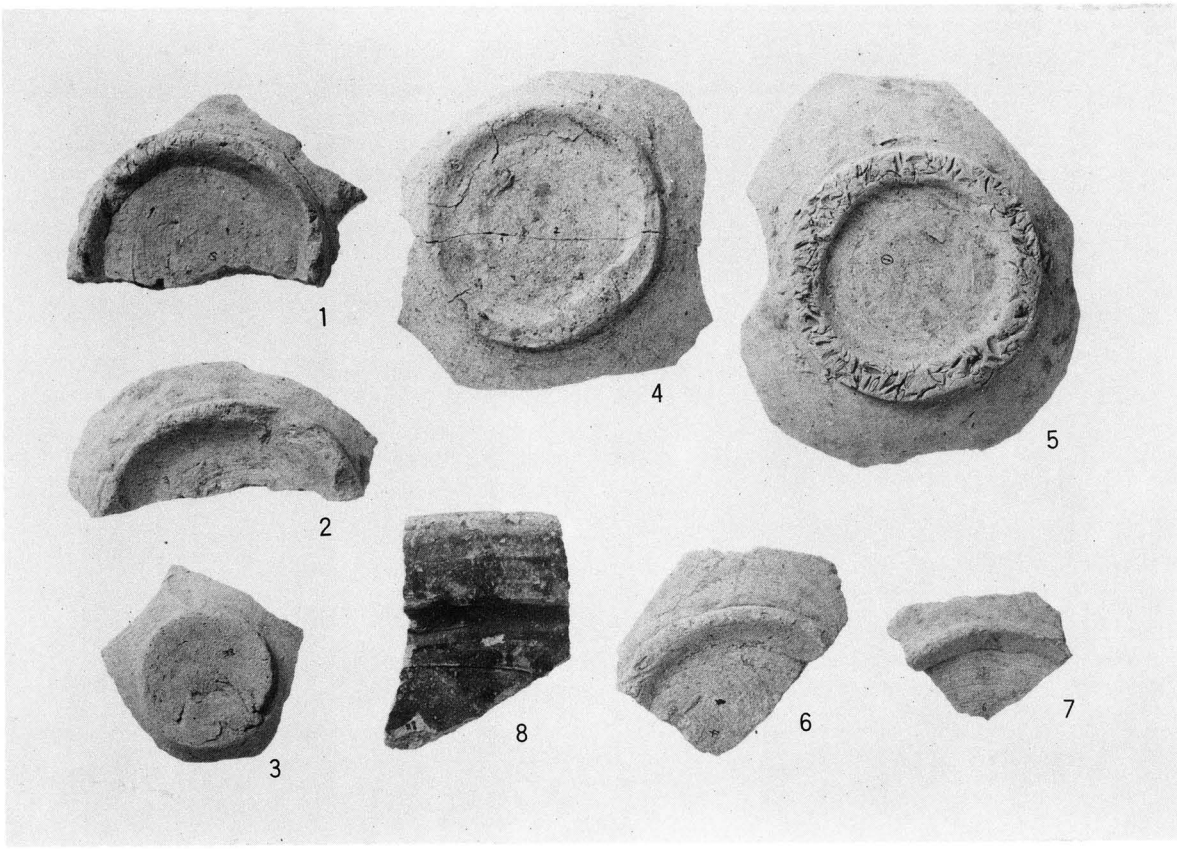
第６トレンチ東端

第６トレンチ自然河川土器出土状況

第７トレンチ掘削前

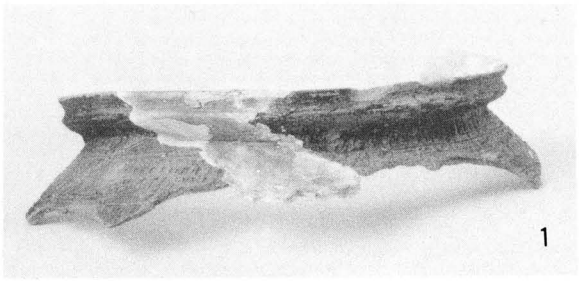
第7トレンチ自然河川（西より）

第7トレンチ東部（西より）



鏡塚封土出土土器

鏡塚基底部出土土師質皿

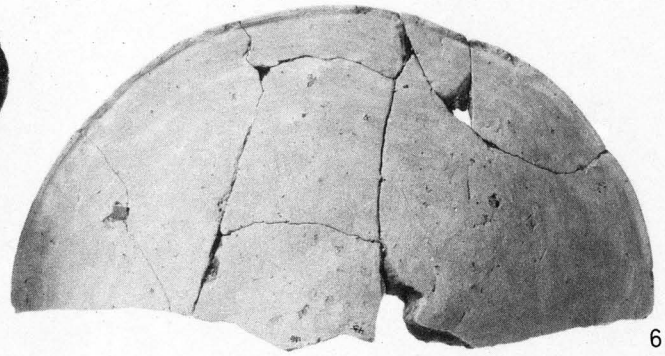

1

2

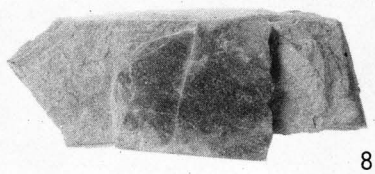
3

4

5

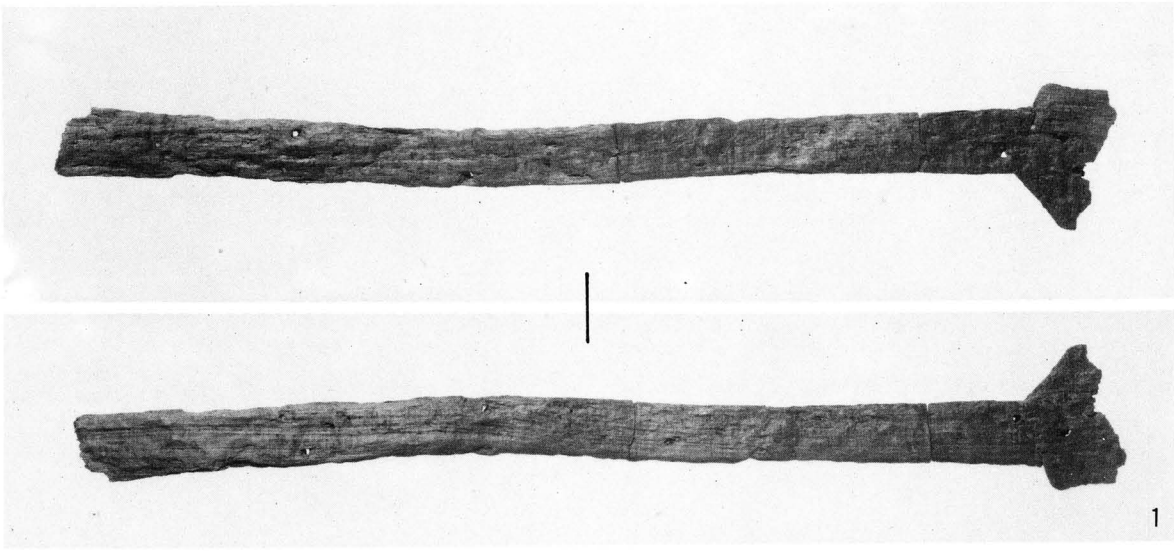

6

7

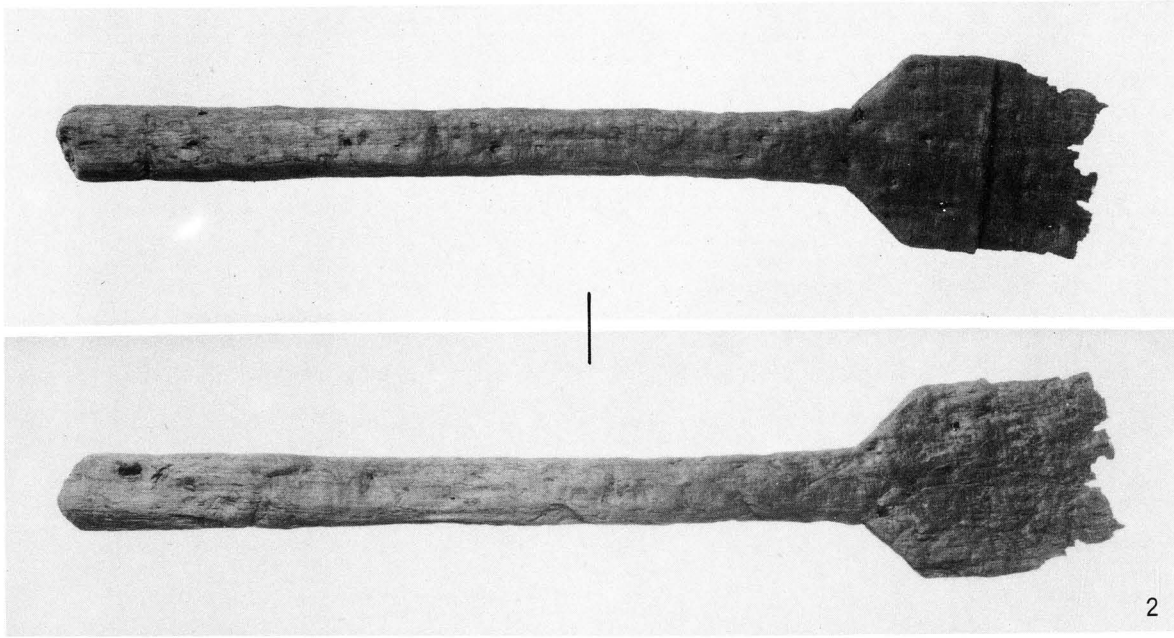

8

9

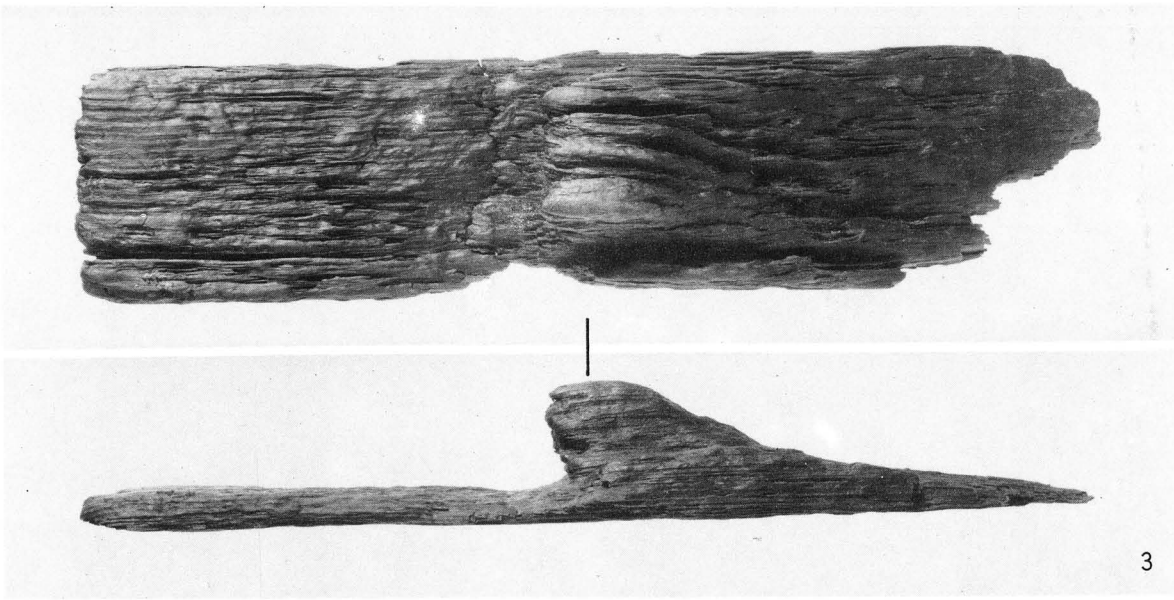
ＳＥ００１出土遺物



1

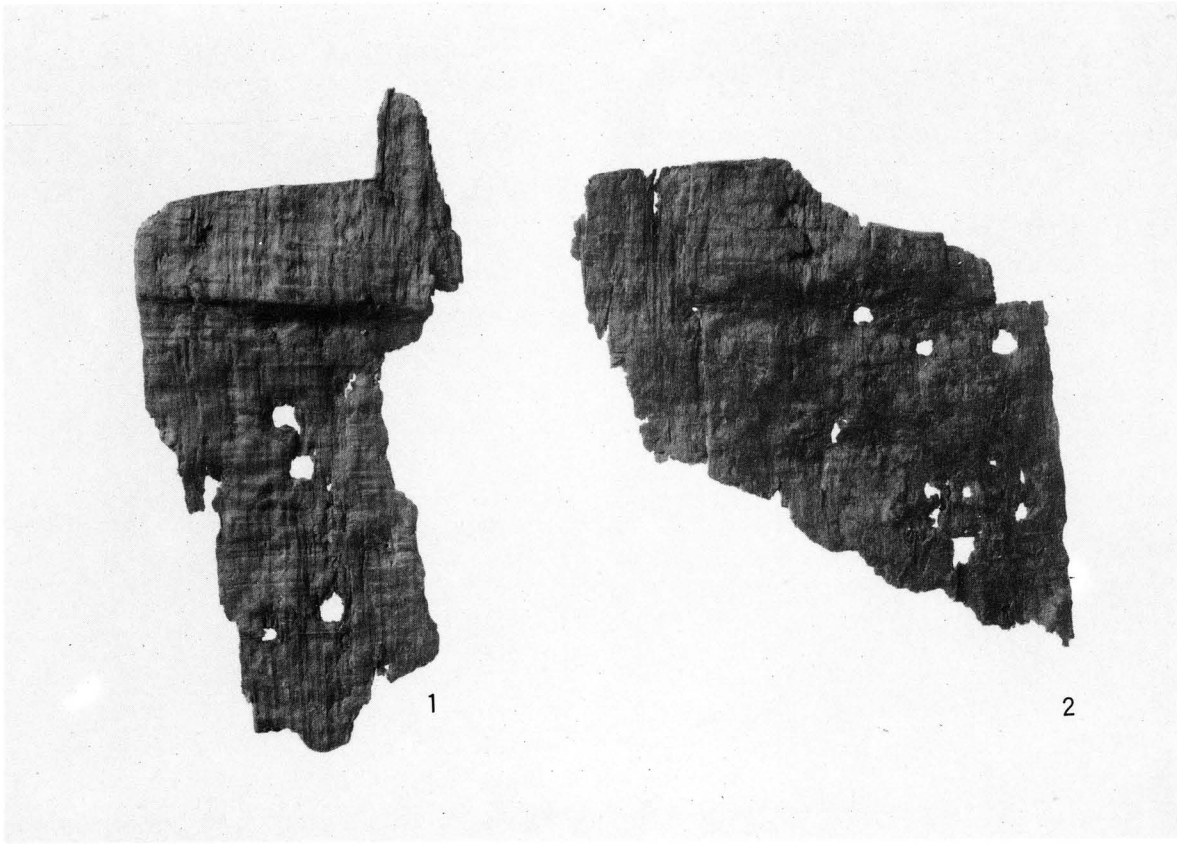


2

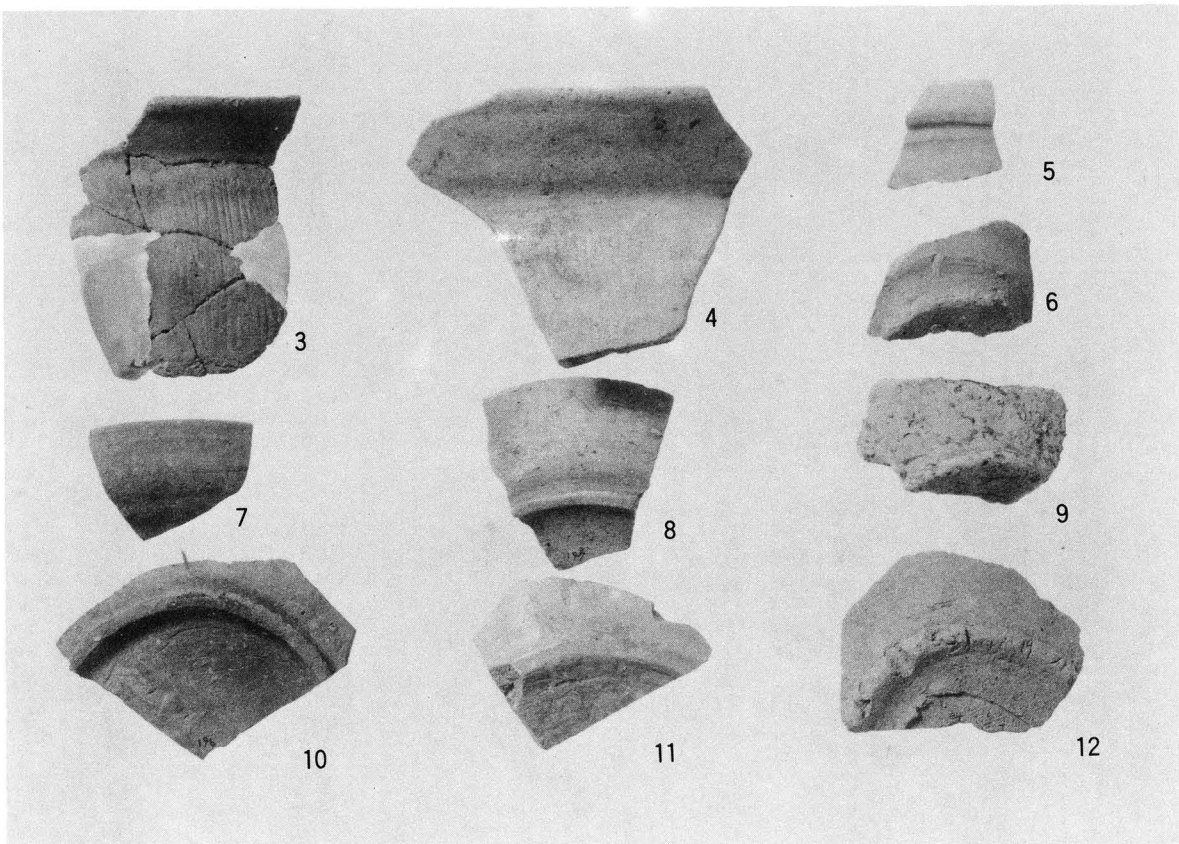


3

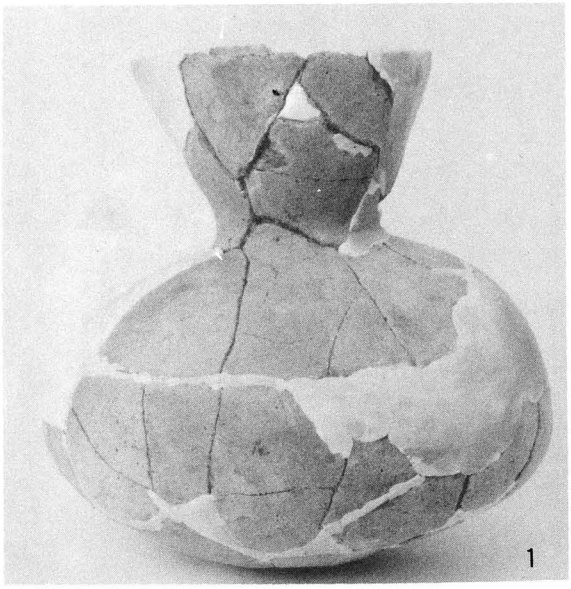
ＳＥ００１出土遺物（木器）



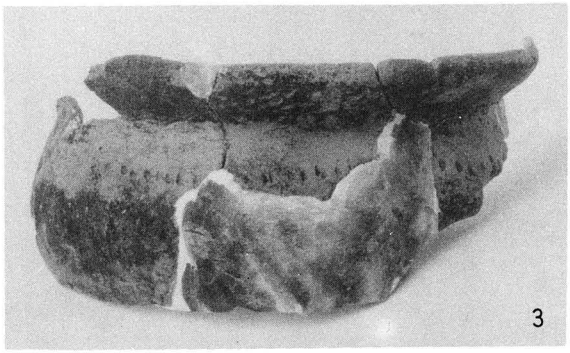
ＳＥ００１出土遺物（木器）

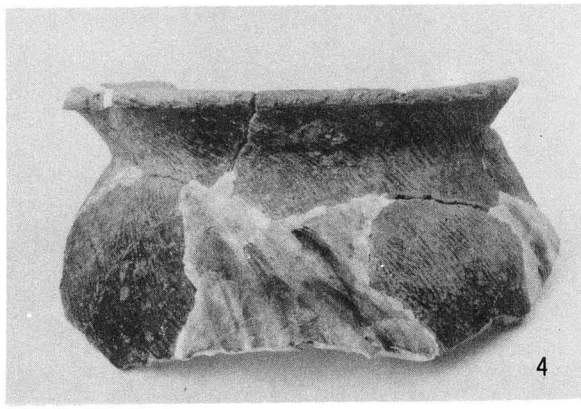


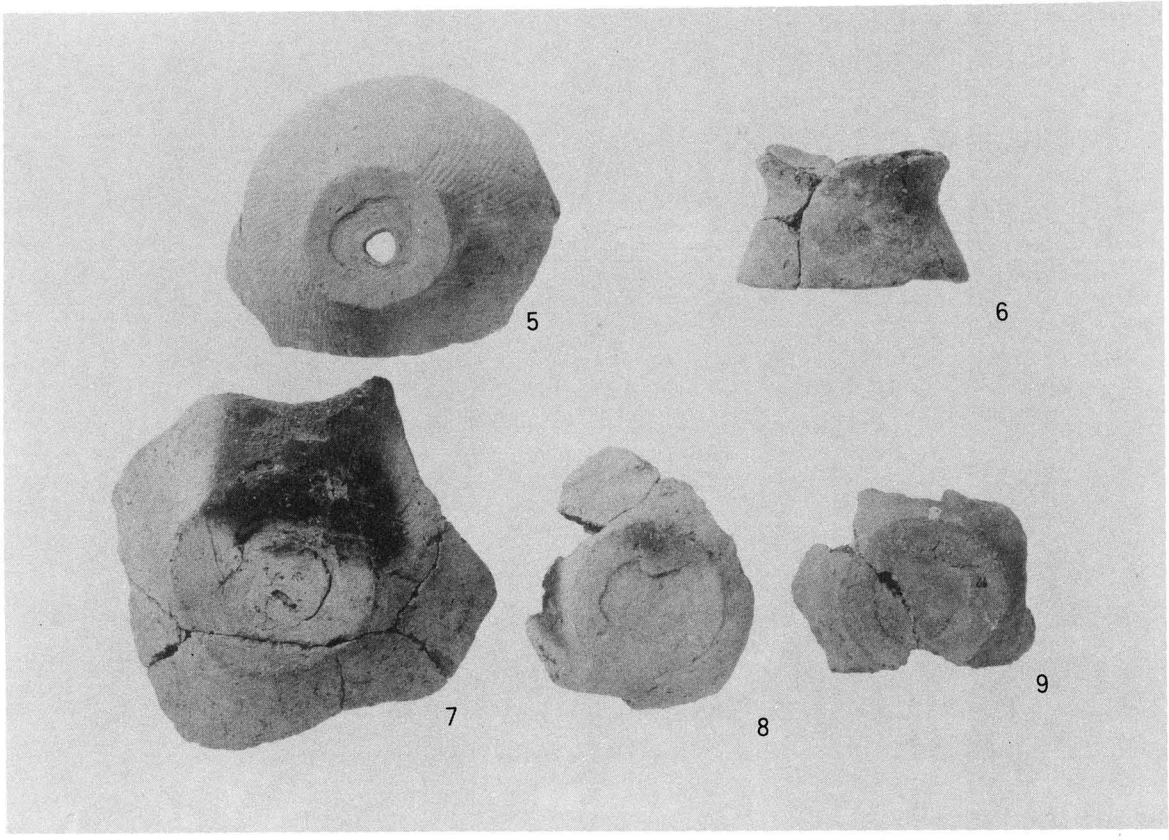
鏡塚、第６トレンチ出土遺物


1

2


3


4


5

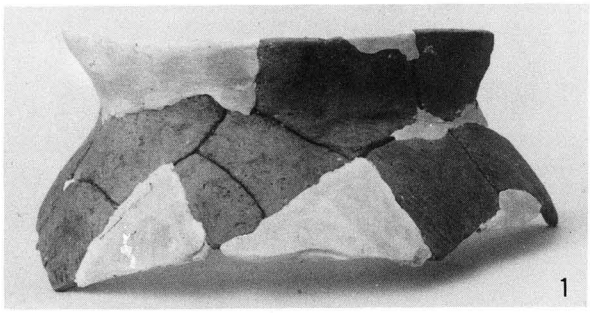
6

7

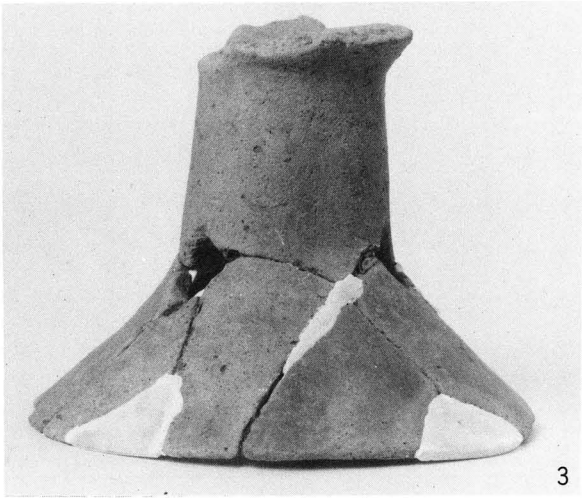
8

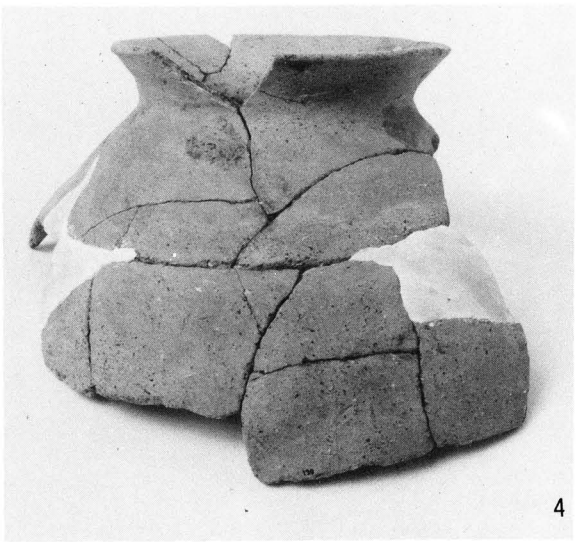
9

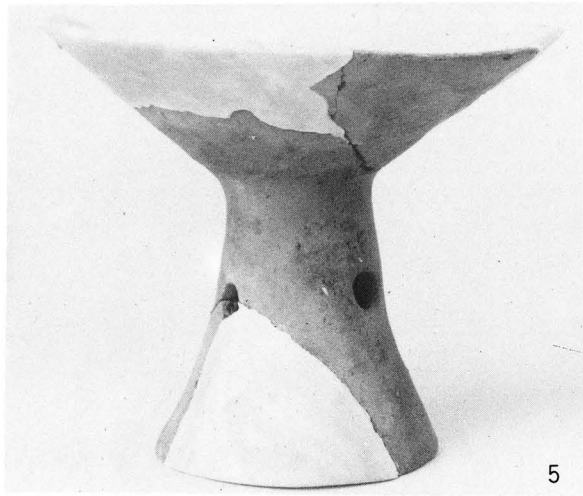
第6トレンチSD001


1

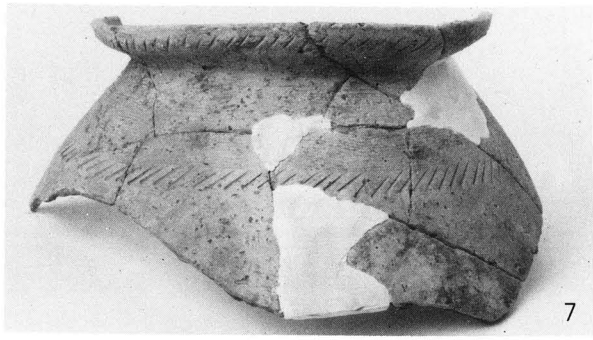
2


3

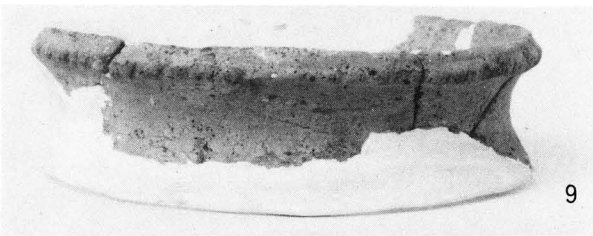

4


5

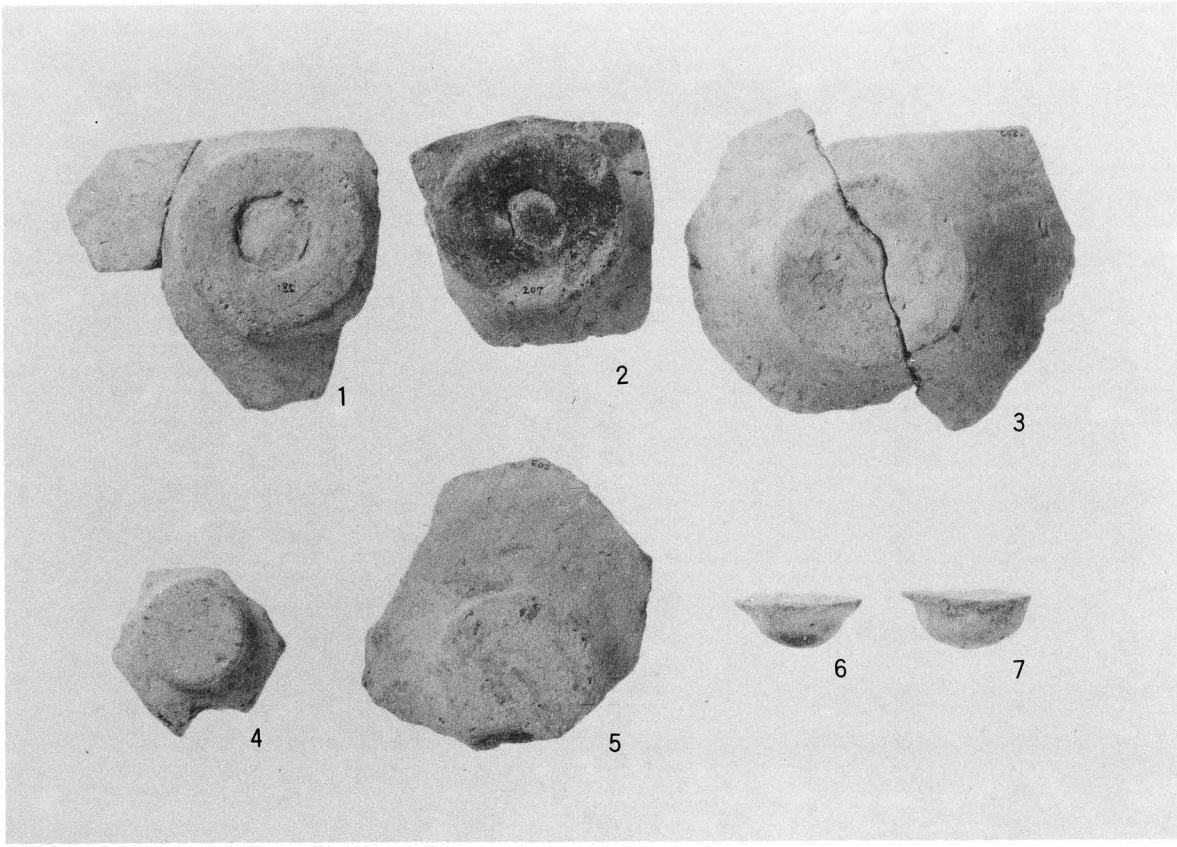
6

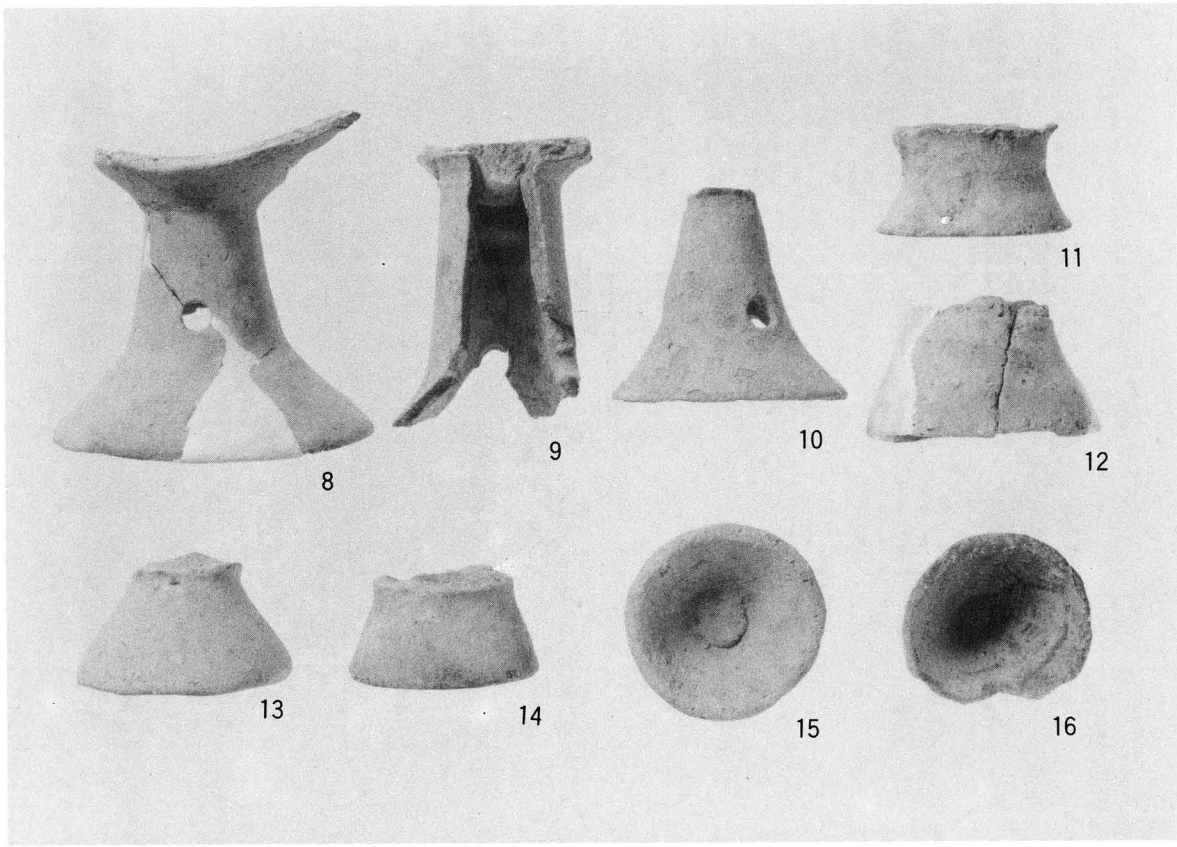

7

8

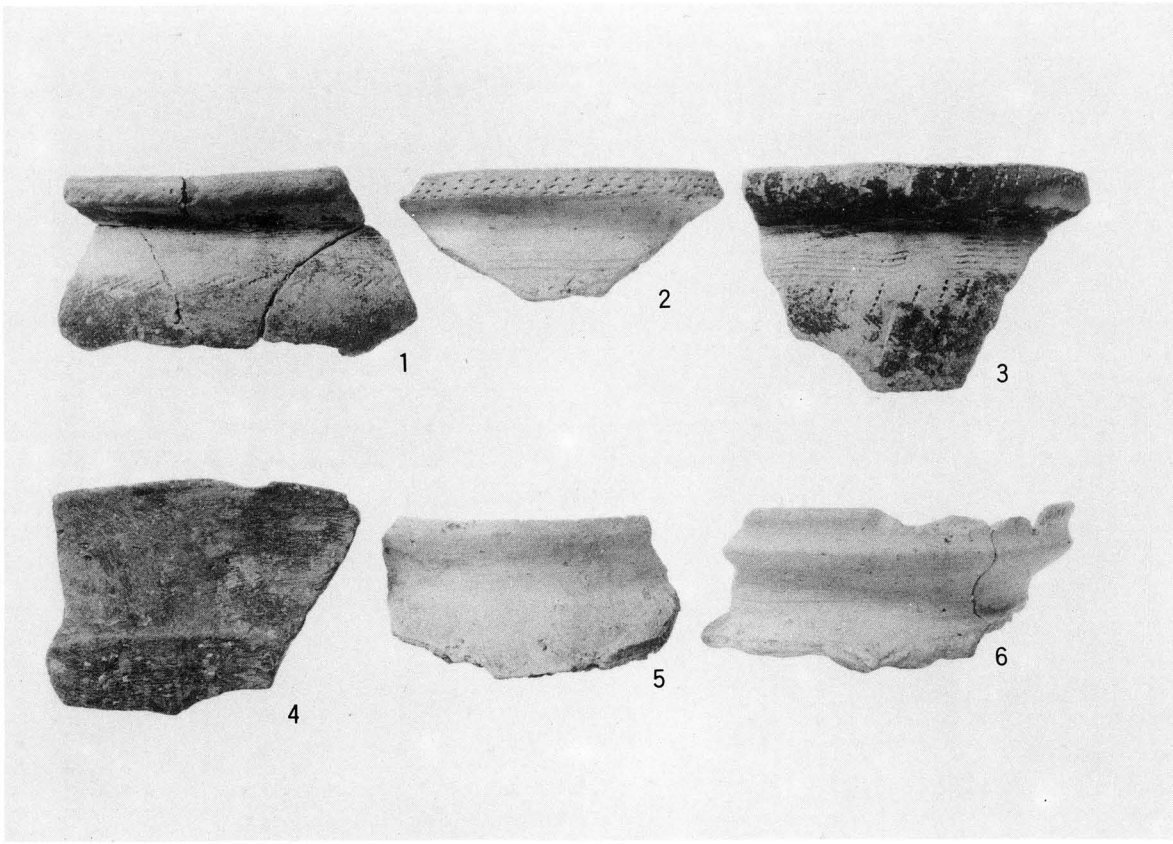

9

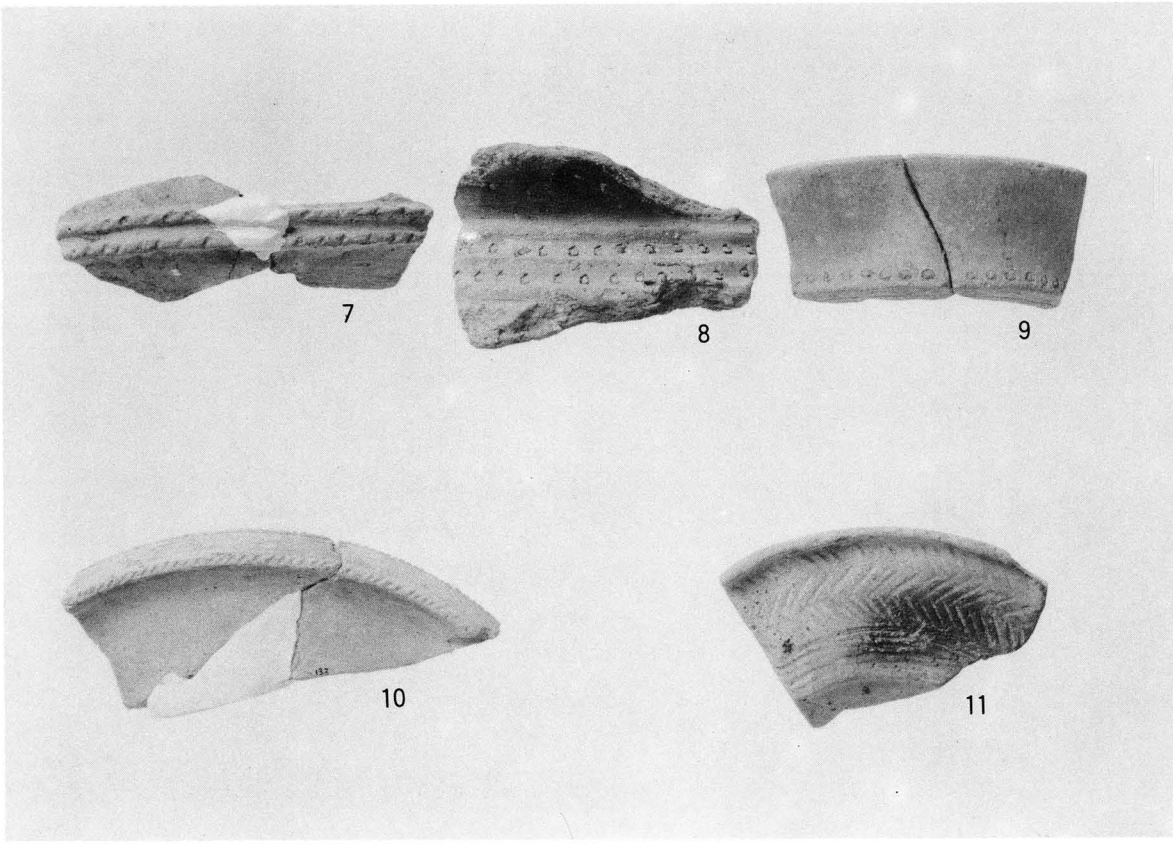
第6トレンチＳＤ００１、第7トレンチＳＤ００２出土遺物



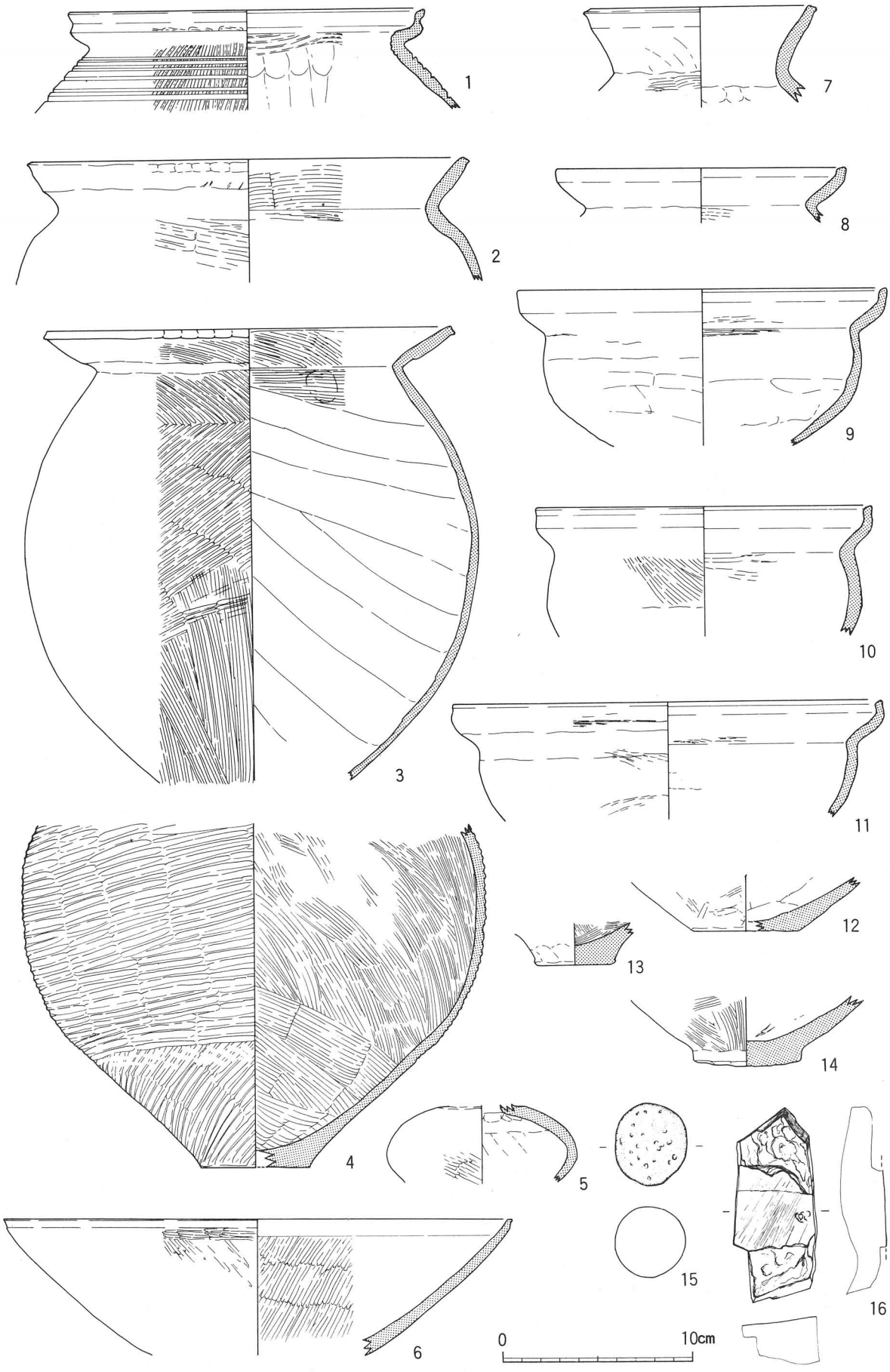


第７トレンチＳＤ００２出土遺物

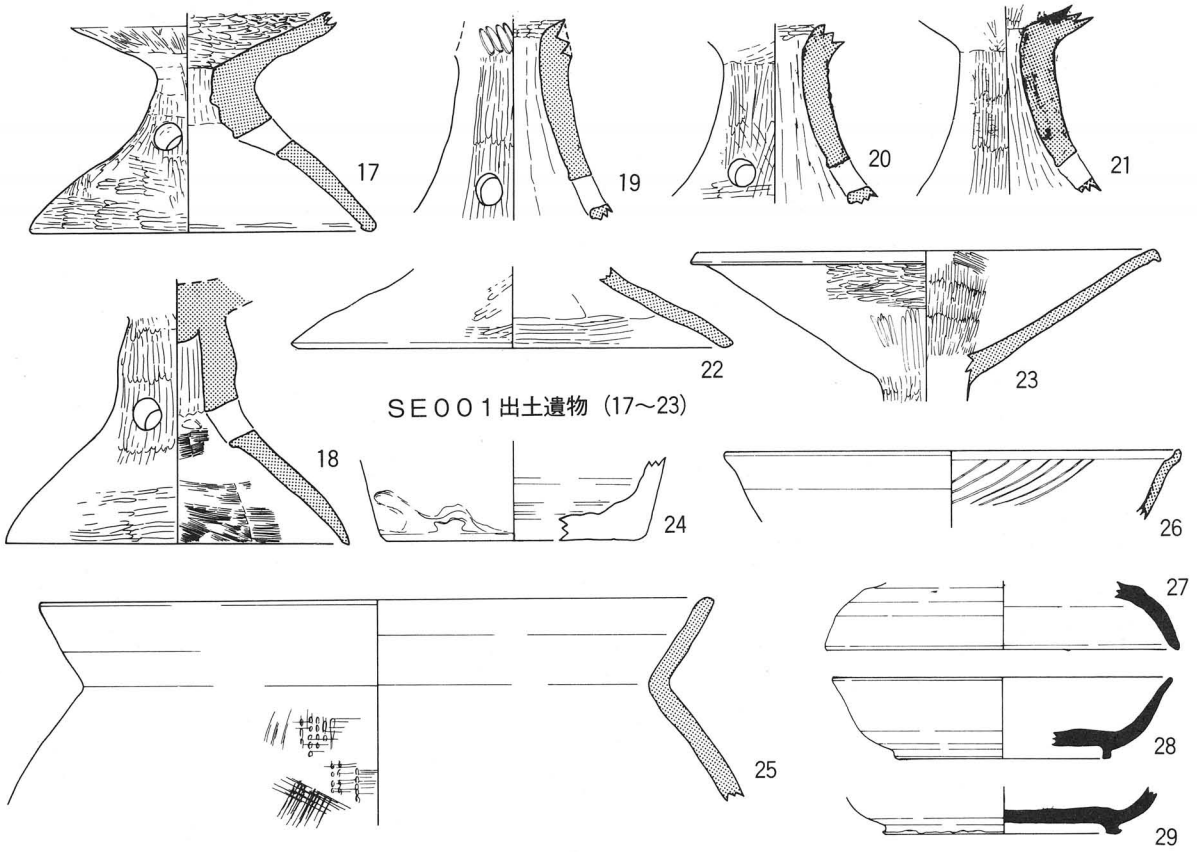




第７トレンチＳＤ００２出土遺物

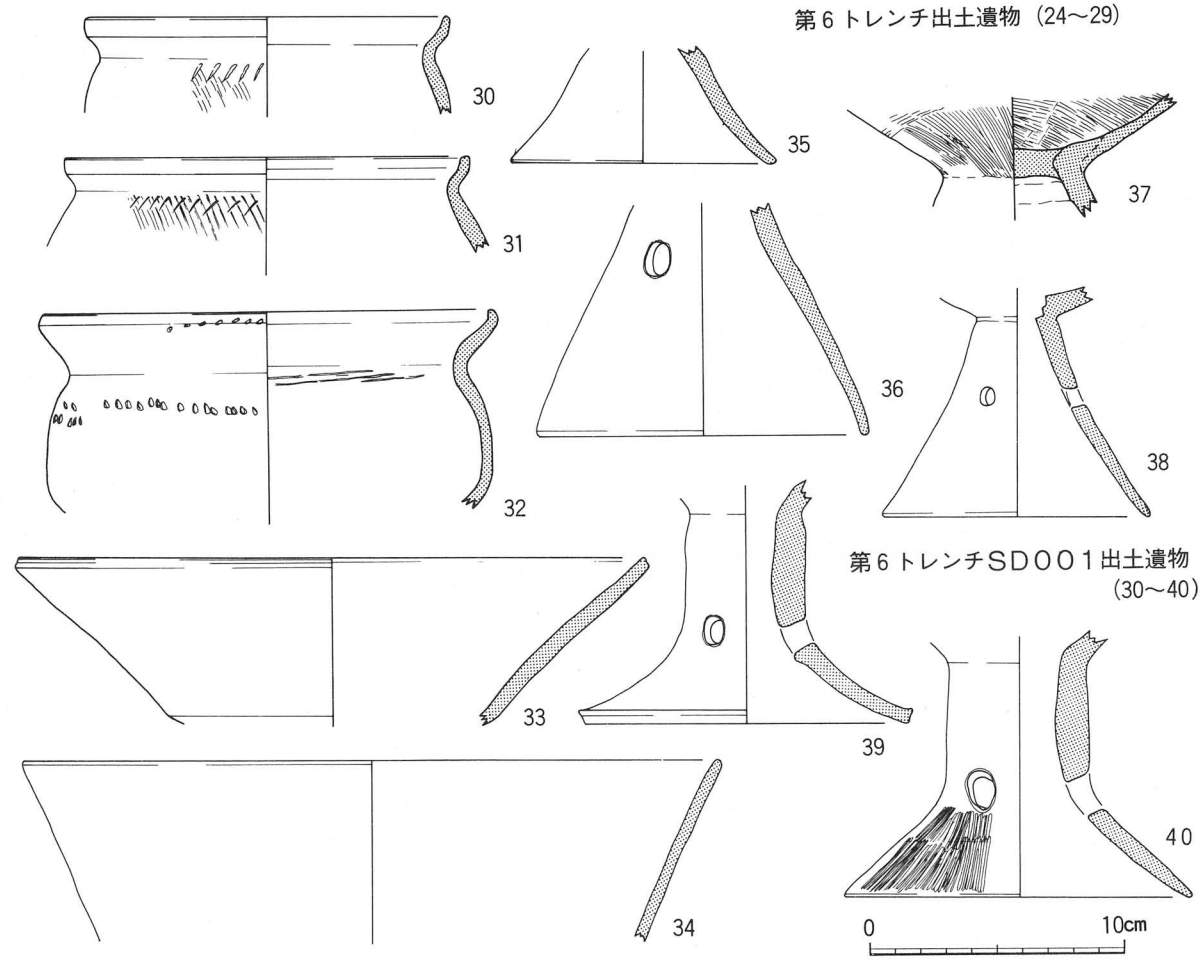


ＳＥ００１出土遺物

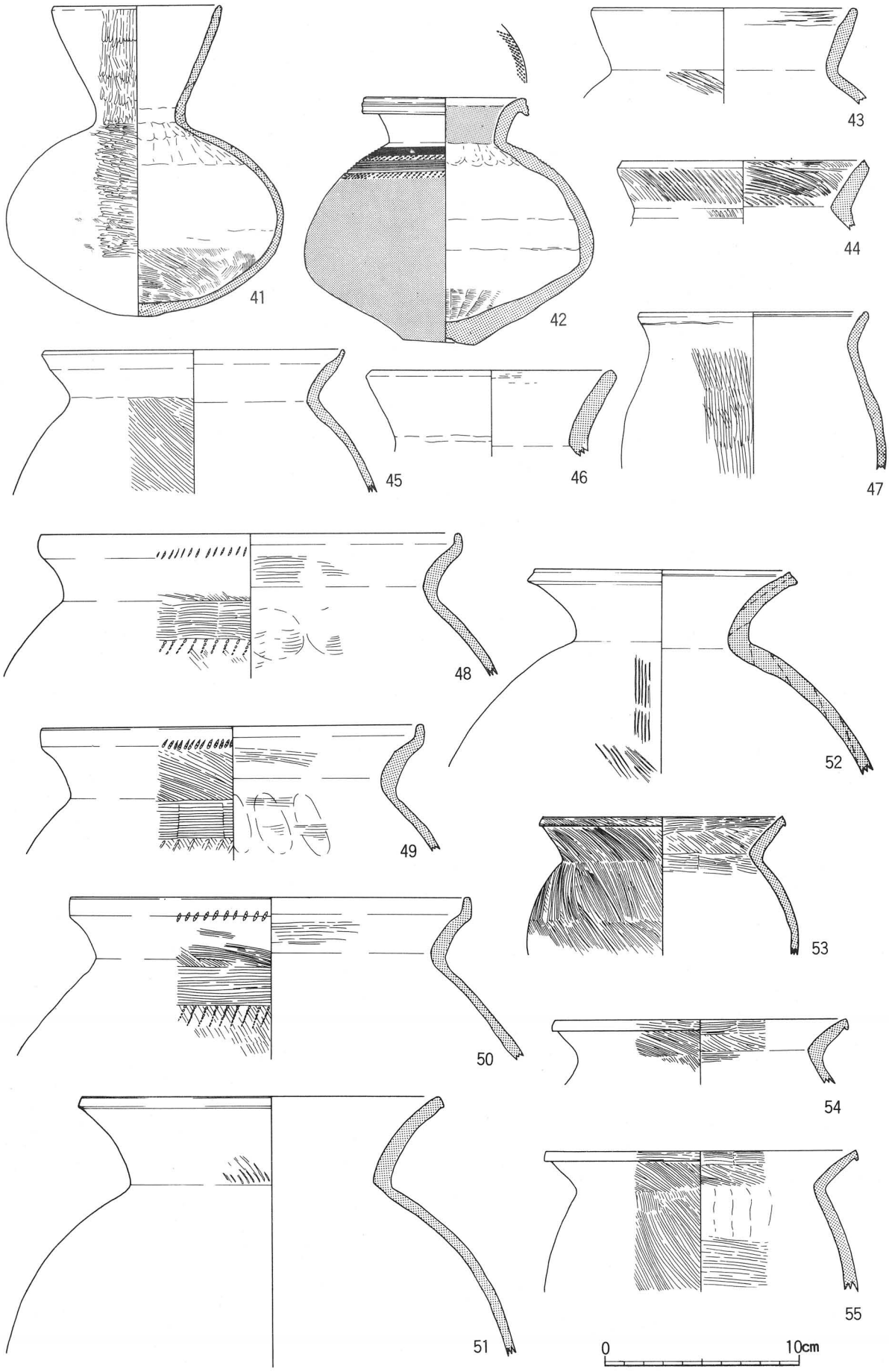


SE001出土遺物（17～23）

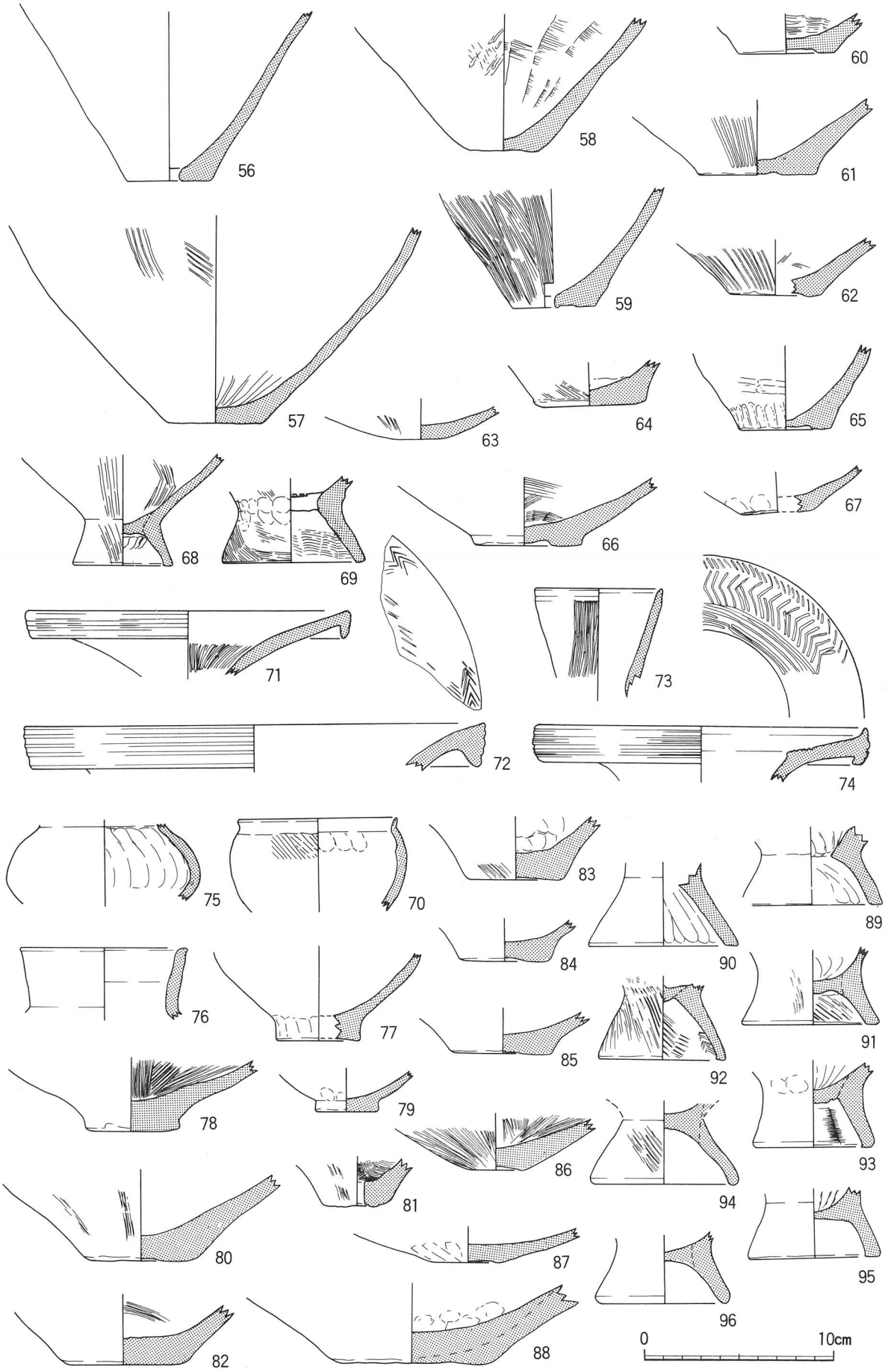
第6トレンチ出土遺物（24～29）



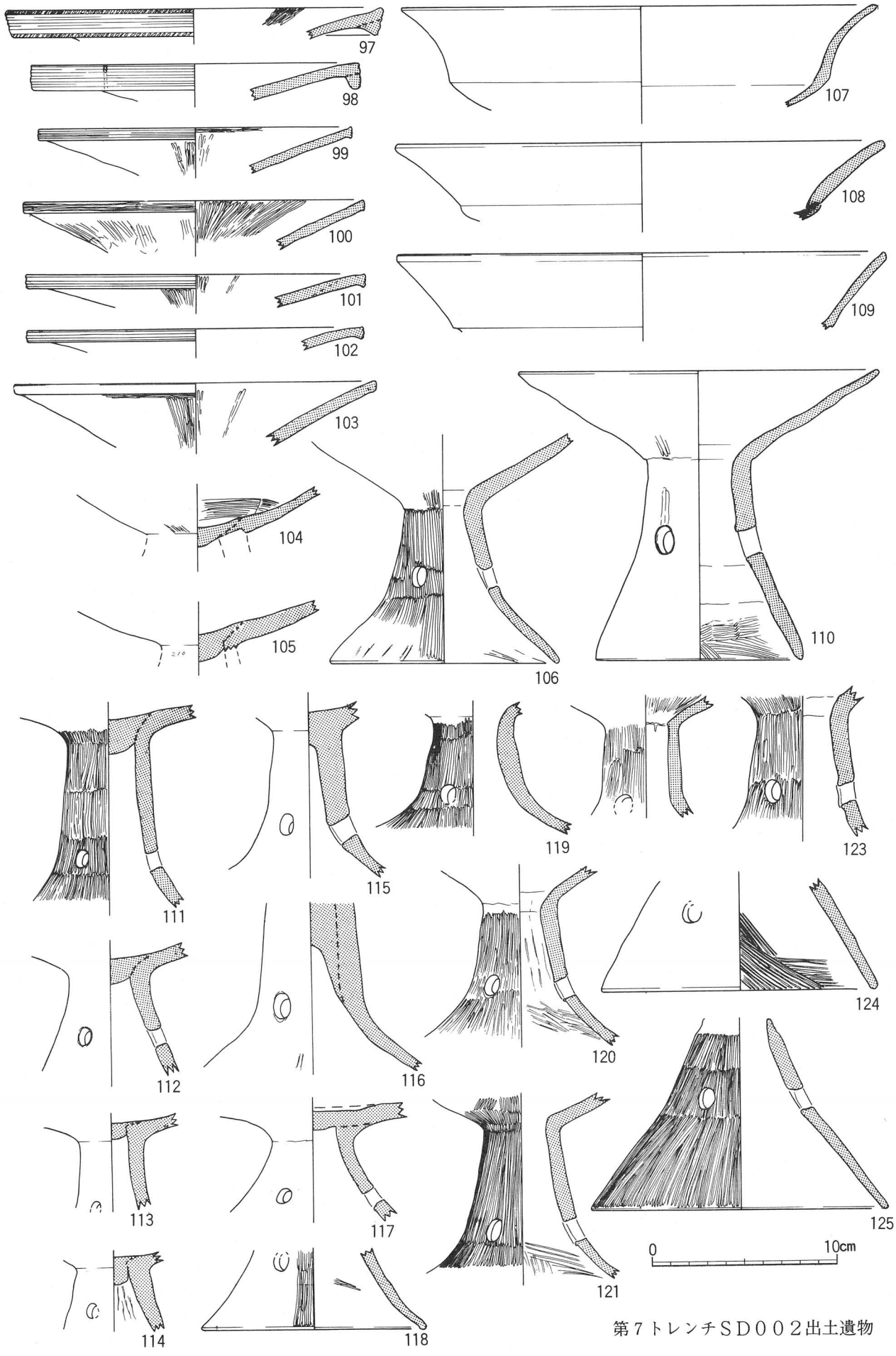
第6トレンチSD001出土遺物（30～40）



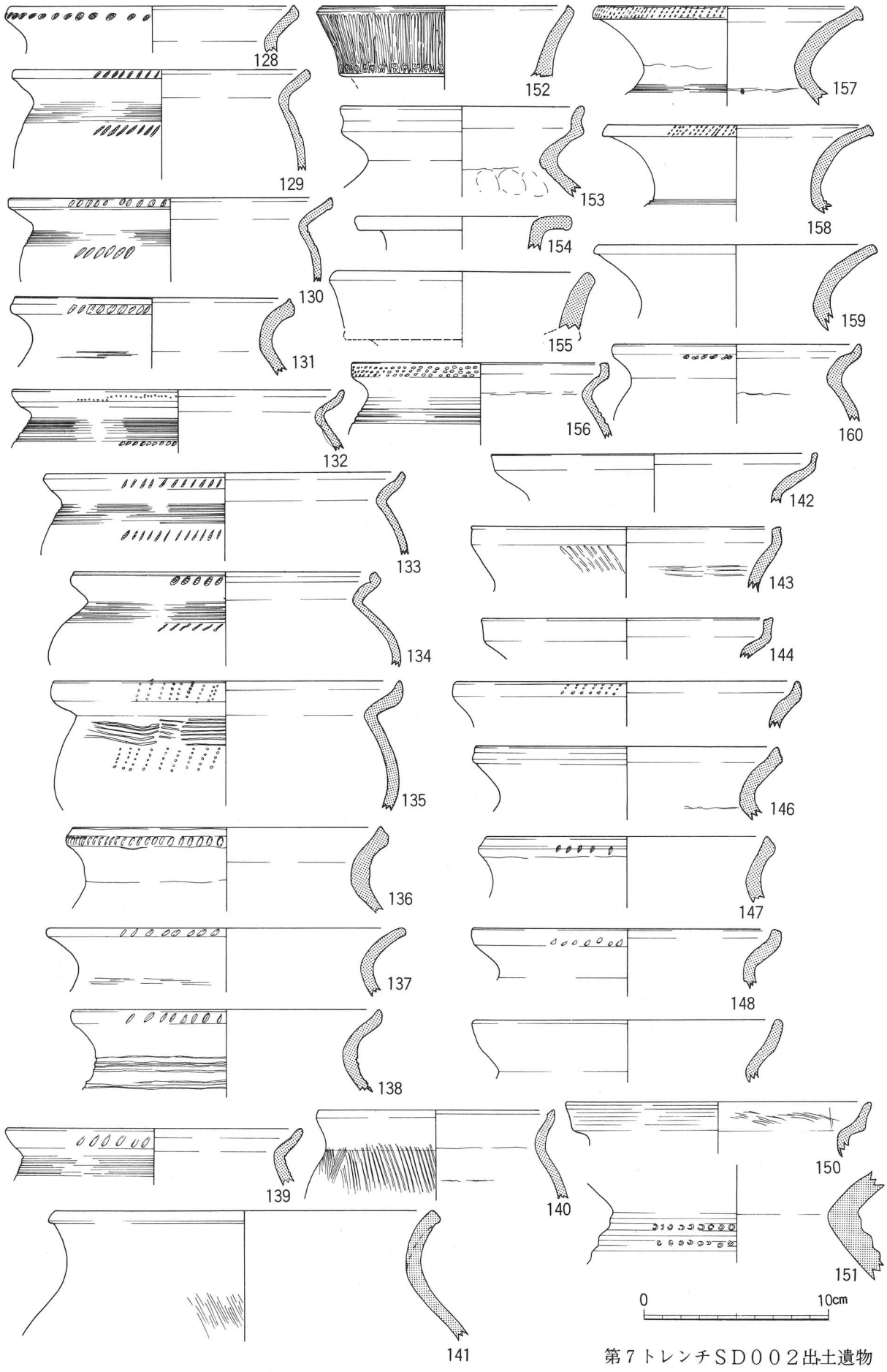
第６トレンチＳＤ００１出土遺物



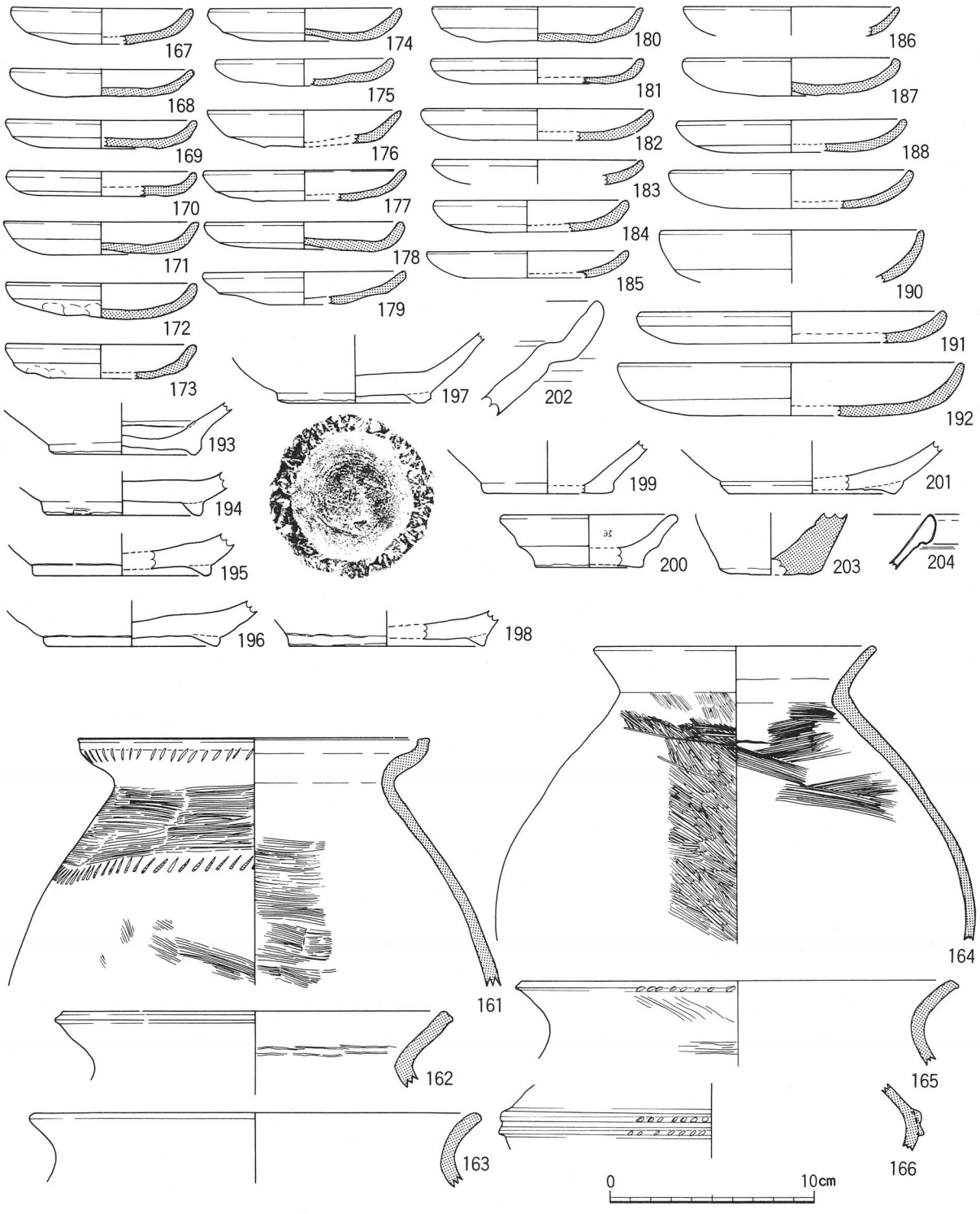
第６トレンチＳＤ００１、第７トレンチＳＤ００２出土遺物



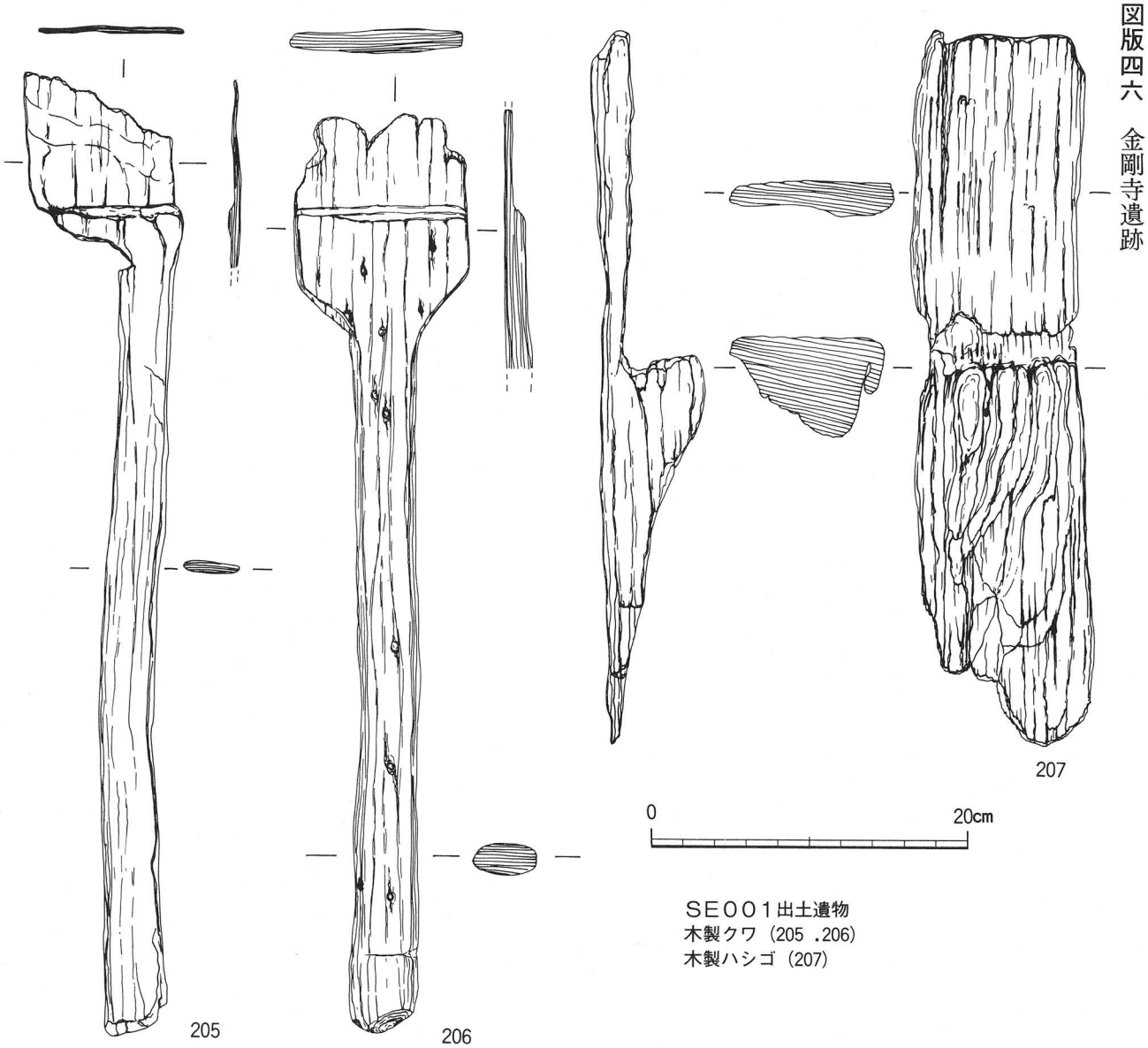
第７トレンチＳＤ００２出土遺物



第７トレンチＳＤ００２出土遺物



第７トレンチＳＤ００２出土遺物（161～166）　　鏡塚出土遺物（167～203）　撞木塚出土遺物（203、204）



SE001出土遺物
木製クワ（205 .206）
木製ハシゴ（207）

昭和６２年３月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告XIV-3

編集・発行　滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目１－１
電話　0775-24-1121　内線 2536

㈶滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町１７３２－２
電話　0775-48-9781

印　刷　所　冨士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－２０